

石清水八幡宮『八幡八景』を読む

竹内千代子
小西 亘
土井 三郎



石清水八幡宮
い
わ
し
み
ず
は
ち
ま
ん
ぐ
う

『八幡八景』
や
わ
た
は
つ
け
い

を
読
む

竹内千代子

小西 亘

土井 三郎

目次

凡例	
はじめに	1
第一景 雄徳山松	8
第二景 極楽寺桜	24
第三景 猪鼻坂雨	39
第四景 放生川蛭	52
第五景 安居橋月	66
第六景 月弓岡雪	81
第七景 橋本行客	93
第八景 大乘院鐘	106
おわりに	120
作者名索引	121
参考文献	
図版一覧	
著者紹介	
付記	

凡例

一 本稿は、元禄七年序、南山城国男山石清水八幡宮神人の柏村直條編『八幡八景』を輪読したものである。

一 原稿清書は、各景解題については、土井三郎。漢詩については、小西亘。和歌については、竹内千代子。発句については、土井、竹内がそれぞれ担当するが、三者の検討を踏まえている。

一 底本は、正徳六〈享保元〉（二七二六）年六月、山田直好写『八幡八景』（東京都立中央図書館 加賀文庫蔵）である。
縦二三・四糎、横一七・〇糎、半紙本一冊、墨付二三丁。奥付に

正徳第六申季林鐘中旬 山田直好写之 印 印

とある。以下、正徳本と略称する。なお、昭和九（一九三四）年、加賀翠溪写『八幡八景』（東京都立中央図書館 加賀文庫蔵）を適宜参照する。縦二七・五糎、横一九・五糎、大本一冊、墨付一〇四丁（附録付、二二〇丁のうち）。以下、昭和本と略称する。

一 漢詩、和歌、発句の掲載順は底本のとおりとする。ただし、「月弓罡雪發句」は、昌純の跋文の後に収録されているが、「月弓岡雪」本文の箇所に移動する。

一 漢詩、和歌、発句に便宜上の番号を掲載順に付す。

第一景	雄徳山松	↓	一―一〇二七
第二景	極楽寺桜	↓	二―一〇二四
第三景	猪鼻坂雨	↓	三―一〇二六
第四景	放生川蛭	↓	四―一〇二四
第五景	安居橋月	↓	五―一〇二六
第六景	月弓岡雪	↓	六―一〇二三
第七景	橋本行客	↓	七―一〇二四
第八景	大乘院鐘	↓	八―一〇二四

一 昌純の跋文、考斉松雲の跋文、直好の奥付は省略する。ただし、昌純の跋文については本冊「はじめに」に、直好の奥付は本「凡例」中に記載している。

一 本稿は、〈本文〉〈校異〉〈作者〉〈語釈〉〈訳〉〈解説〉から成る。漢詩においては、〈押韻〉及び書き下し文を付す。

一 〈校異〉は、昭和本等のよるべきものについてのみ記す。なお、表記の違いについては言及しない。

また、〈作者〉〈解説〉については省略することがある。

一 漢詩、和歌、発句本文の文字は、概ね原文のとおりとする。その他、漢詩の書き下し文等は、現在通行している字体に改める。なお、人名については、原文の表記によったものがある。

一 漢詩、和歌、発句本文には、清濁などの振り仮名を、適宜に現代仮名遣いで付す。漢詩においては、書き下し文の全文に現代仮名遣いの振り仮名を付す。

一 漢詩の書き下し文は現代仮名づかいとするが、習慣によったものがある。

一 作者名の読みについては、原則として漢音を優先とした音読みとする。ただし、慣用によったものがある。

一 資料書名等のうち、（ ）内のものについては略表記とする。

一 和歌、発句などの引用については本文、作者名などの表記を私に変更することがある。漢詩文の引用については、原則として書き下し文に改め、適宜抄出する。

はじめに

石清水放生会の復活

『八幡八景』は、石清水八幡宮の八景に因む漢詩、和歌、発句を柏村直條かしむらなおたが編纂した一書である。文芸を好む祖父直重、父直能の意向も含まれているとするが、原本は未詳である。写本としては、正徳六年（享保元）に山田直好によって筆写されたもの（以下正徳本）と、昭和九年に加賀翠溪によって筆写されたもの（以下昭和本）が、東京都立中央図書館加賀文庫に蔵されている。直條やその周辺、八幡地域の人々が入集しているのは正徳本に多くあり、直條の編纂の意向を濃く残している」と推察される。本冊では正徳本によって読む所以である。

『八幡八景』の成立は、宗雅の跋文（昭和本）には、

干時宝永五著雍困敦季春中浣 中山氏宗雅謹跋之

とあり、宝永五年（一七〇八）である。

一一世紀に中国で成立した『瀟湘八景』を範として、日本では一四世紀（弘和二年・永徳二年、一三八二年）に『南都八景』が成立し、一六世紀（明応九年、一五〇〇年八月一三日、また、永禄五年、一五六二年成立説あり）に『近江八景』が、一七世紀（元禄元年、一六六八年）に『金沢八景』が成立している。『八幡八景』は、その後に成立したものであるが、江戸時代後期以降に多く成立する「八景」に先駆けてのものとと言える。因みに、石清水八幡宮に「八幡八景連歌発句集」を蔵する。これは『八幡八景』のそれぞれに連歌の発句を記したものであるが、文学史において「八景」に発句が創作された初期のものであると位置づけられる。

『八幡八景』が成立した歴史的背景を考えてみたい。『八幡八景』が成立する約三〇年前の延宝七年（一六七九）に、石清水八幡宮の放生会が再興された。江戸幕府の経済的援助をもとに、実に二〇〇年ぶりに復活したのである。石清水八幡宮の放生会は、文明年間（一四六九～一四八七）において執り行なわれなくなった。長引く戦乱により八幡宮の有する荘園が侵食され、年貢米その他が調達されず、朝廷も室町幕府も経済的援助をさしのべる余裕がなくなっていた。およそ二〇〇年の空白を埋めてようやく放生会が再興されたのであるから八幡宮としては画期的な慶事である。

徳川家康は、將軍宣下を受ける前から石清水八幡宮には特別な関心を寄せ、慶長五年（一六〇〇）の五月、石清水に所領を寄進し、領地朱印状を發給している。例えば、社務の田中家には百石、徳川氏の祈禱所であった山上の豊藏坊に二〇石、正法寺が五〇〇石、そして神人（じん）や百姓などにいたるまでそれぞれの知行高が認定されたのである。まだ將軍になる以前からこのような行動がとれたのは、家康が、源氏の氏神である石清水八幡宮との関わりを深くすることで、自らが源氏の棟梁であることを天下に示したと解釈できよう。家康は、関ヶ原の合戦の一〇日後、八幡八郷に条目を掲げる。そこに記されていることは、「八幡宮に流れ寄る放生川は靈地であるので流れをよくするように努めること、検地を免じる代わりに天下安全のための神事を油断なく永代にわたって務めること」等である。家康は慶長一〇年に將軍職を秀忠に譲ったが、秀忠も家康同様に石清水の保護には尽力し、同年、本殿の内陣及び外陣・幣殿・舞殿・武内社などを造替した。なお、寛永十一年（一六三四）第三代家光の時代に、幕府より遷宮用途として二〇〇〇石が寄付され、正遷宮が行われた。今日ある社殿（国宝）はその時のものである。

さて、家康を始め徳川將軍家が石清水に期待した神事とは何か。その主要なものは、安居会（あんごえ）と放生会である。八月一日日に行われる石清水における放生会は、以下のような歴史をもつ。

・貞観五年（八六三）

諸々の靈を慰める祭儀として放生会が始まる。

・天曆二年（九四八）

勅使が派遣され、国家の安寧が祈誓された。

・延久二年（一〇七〇）

上皇が勅使を兼ね、参議以下朝廷の諸官が参向。

・明德四年（一三九三）

足利將軍家が上卿として参向。

・文明年間以降 中絶

以上のように、古く朝廷と八幡宮が足並みをそろえて執り行なわれる放生会が、徳川幕府の財政的援助によって再興された意義は大きい。但し、それらの復古的な動きは、江戸幕府独自の判断でなされたというのは考えにくい。霊元上皇（寛

文三年（一六六三）天皇即位、貞享四年（一六八七）讓位）は、「英邁かつ意志の強い性格でも知られ、対幕府の交渉においても、明確に朝廷の存在を主張し、しばらく絶えて行われることのなかった大嘗祭をはじめ各種の朝廷儀礼の復旧に意を用い、朝廷の面目を一新した功績が大きい」（笠原英彦著『歴代天皇総覧』）とされる。このような状況から、上皇の意を受けて石清水放生会が再興されたことが大いに考えられる。なお、霊元上皇は有職故実に明るくだけでなく、歌道にも優れた才能を発揮した。また、上皇が催した連歌、和漢聯句の会からは、『八幡八景』の作者と重なる者があり、上皇の意向が反映されているとみるべきであろう。詳細は後述する。

柏村直條のこと

『八幡八景』を編集し、その成立に尽力したのは、柏村直條である。代々石清水八幡宮の神人であった柏村家にあつて、直條は伝来の家譜などによる家系図では第三九代の当主である。神人とは、社務以下の役職に列なり、神事を務める身分を指すが、柏村家は放生会では相撲神事を司る役職を担った。神人は、同時に、流通・交通の物流上の独占権をもつ商業の座に関わる者もいて、柏村家は、酒麴の製造・販売に携わっていた。それを示すものとして、柏村家の家系図の建武三年（一三三六）の項に、八幡の森町の柏村・森本両家が酒麴の役を担っていることが記述されている。酒麴の販売をめぐることは、楠葉の住人と争論があったことが『八幡市誌』等で知られるが、石清水八幡宮の采配によって八幡の森町の住人の独占権が安堵されたこともあり、その後も八幡宮の後ろ盾によって製造・販売が保障されていた。

また、慶長五年（一六〇〇）五月二五日付の徳川家康による朱印状によって、八幡神領が確定される。祠官家である田中家・善法寺家などの社家をはじめ、律家・禪家・正法寺等の寺家、神人などの石高が確定され、相撲神人として柏村藤兵衛と善八に合せて三四石余の知行が認められている。その後、江戸幕府より、將軍の代替わりごとに柏村家に対し同様な朱印状が交付された。

直條は、八幡の森町に出生する。寛文元年四月一二日生、元文三年五月九日没、七八歳。退休して醜哉と号する。二歳の時、母を亡くし、六歳の頃から、学識のある祖父直重に育てられ、四書五経、和歌、連歌に親しんだ。公家の風早實種、公長親子とも親しい交流があった。延宝六年（一六七八）、一七歳の時、佐渡へ旅し、その後京都の儒者伊藤固庵に師事した。また、直條の妹^{まな}真は連歌師里村昌純に嫁し、里村家との交流が深まった。

『八幡八景』成立に到る経緯

『八幡八景』は宝永五年（一七〇八）二月の中山宗雅の跋文（昭和本序文）をもつてその成立とする。昭和本には、里村昌陸が序文を記している。これにより、成立の具体的な様子がわかる。なお、適宜、濁点、句読点、傍注を入れた。

柏村氏の代々は石清水の神職にて、餘力ある時は、筑波の道をまなべるに、ことに直條は吾類（直條の妹が弟昌純に嫁す）によりて、いと深く心を染しむ。又家父の隠士は連歌の外、牡丹を愛して年来ふるま、に珍き教を尽し世に名だゝるほど。堂上（公家）の御かたぐいにも切花度々送り上らるゝに、かけまくもかしこきは霞の洞（仙洞御所）にきこえあげて、つぎ牡丹などほらせて奉れるとな

ん仰。直條は社参の折々、山上山下、名ある所に八の景色を望みて大和、もろこしの例にならひ、これを和歌につらね置れば、後のよ迄の風流、かつは男山の面目ならんと、京にのぼりて有栖川の宮へ申上られしに、院中の御さたに及べる事、まことに神慮の冥加に叶へるならし。則宮（すなわち）より仰を傳へ給へば、すがくしく和哥皆（事成）ことなりぬ。その

悦に堪て、又連哥の発句もあつめんとて、予にも申べきよしあれば、いなみがたくて、殺風景を口に任せけるを置つくる序、このむねをしるべきよしあればかくなん。（以下発句略）

右によれば、直條の父直能は連歌を嗜む以外に牡丹を愛し、殿上人に切り花を送り届け、仙洞御所にも献上してきた。直條は石清水への参宮の折に、山上山下の八か所を中国の『瀟湘八景』や奈良の『南都八景』に倣い和歌にすれば男山の面目が立つと思ひ、有栖川親王に申し上げた。親王は、靈元上皇にその旨を奏上したところ、上皇は神慮にも叶うことだと賛意を示された。そんなこともあって、和歌はすぐには選集された。実は、昭和本によれば漢詩もあった。八景の題によつて和歌と漢詩を一組ずつにし、有栖川の宮をはじめとする公家方一六名のみで詠んだのである。これが『八幡八景』の原点の一つであろう。その悦びから、直條は連歌の発句の選集を昌陸に懇請した。里村家の人々は、直條からの要請を受け、積極的に応じた。

また、八景の編纂は直條であるが、彼は七年前に亡くなった祖父、直重（宗得）が連歌の道を好んでいたことを知り、祖父の句をも入りたいと望んでいたところ、大乘院の老衲の手に残っていることがわかり、それも収録した。八景の発案は祖父であった。これらのことは神慮にも仏の教えにも叶うことだとしている。これらの経緯は、元禄七年の里村昌純の跋文（昭和本では序文）に記されている。傍線、傍注は稿者。

右雄徳山八景の發句は、柏村氏直條思ひ及びて人々をすゝめ事成なんとするに、祖父一清宗得は此道を好み給ひけれど、

七年計さきに身まかりにければ、此人なみにもれたる事をほいならず思はれ、彼人の書集めし藻塩草の中に、
大乘院の老柄望けるとて、此發句の有けるを見出しければ、かゝるやうもやと残し置給んと、嬉しくてやつがれに
書付べきよしなりければ、まことに神の御慮にも仏の御教にもかなひけるにやと、あやしくてしるし付侍物也。

干時元禄七戊仲冬

昌純

里村の連歌の発句の蒐集については先に述べたが、大坂の西山宗因の流れの発句の蒐集については、西山宗春の序文（昭和本）に記されている。宗春が大坂の談林連中に呼び掛けて発句を蒐集したのである。和歌と同様に題詠である。傍線、傍注は稿者。

男山石清水はいともかしこきおほん神の跡を垂まし、宮ばしらふとしきたて、星霜をふりし縁地、いへばさら也。爰に神官柏村氏直條は、朝暮の勤仕をこた^怠らざる中に、筑波の道をひたすら好みて、年比華洛^{としろう}の好士にまじはりて其奥旨をたづね、ある時は竹の園、星の林の雅席にも召まつはされ、世に風流の聞えあり。さるによりて此山^{この男山}の景色に常に心をうつしてあるが中に、八の所を定め置んの志あり。終に大宮^{宮中に仕える人の取り立て}人のもてはやしによりて、雲のうへまでも聞えあげられしほどの事にぞ成侍る。それを便として和哥の数おほく集りしに、又都の名ある人々に連哥の発句をすゝめられて、作意皆そなはれり。是を難波人の事このむともがら聞傳へて、件の八景に合する発句せしに、予にも一句を書加へて、かの家にをくり侍るものならし。（発句略之）

元禄九年春

ところで、『八幡八景』は、漢詩、和歌、発句からなるが、多くの漢詩が各景の章の最初に置かれている（昭和本では最後）。作者は公家、僧、儒学者等であるが、当書にはこれらの入集の経緯について触れた記述がない。しかし、先行の「八景」からすれば、漢詩と和歌とが創作されるのは自然のことである。状況を記す。

漢詩の作者は、公家方では、公辨親王（雄徳山松）、風早實種（極楽寺桜）、勘解由小路韶光（猪鼻坂雨）、一乘真敬（放生川堂）、花山院持實（安居橋月）、久我道恕（月弓岡雪）、高辻豊長（橋本行客）、石山基董（大乘院鐘）。各章の冒頭に貴人を配する構成は和歌、発句も同様である。なかでも、實種（香道風早流の祖）と直能（直條の父）とは師弟の關係に有る。僧侶では、中世以来の五山文学の流れを汲む禅宗の相国寺、天龍寺、大徳寺、妙心寺、臨川寺の僧等。また新たに隠元の渡来によつて開かれた黄檗山の僧等が名を連ねる。劍豪柳生新陰流宗矩の子列堂も詩を寄せている。地元八幡神応寺の廓翁

鉤然（八一八）の名を見出せるのは特筆すべきことであるが、その他に、大乘院の實長（二一九）、全昌寺の環溪座元（五一九）、常德寺の大柱座元（六一八）、西遊寺の善譽（七一十九）、橋本主馬秀信（二一九）や、石清水八幡宮公文所の紀院卓（三一二）及びその母（七一三）の名もある。

儒者では、公家方儒者の小野桃原、公儀儒者の林信篤、木下順庵。幕府医官細川桃庵。漢詩人の木下寅亮等。木下順庵は徳川綱吉の侍講となり、林信篤は湯島聖堂の大学頭を務めた。

これらのうちの公家、禪宗の僧、儒者の林家の入集の背景には、靈元上皇の和漢聯句並びに漢和聯句（以下、和漢聯句という）などの文化サロンの存在がある。『八幡八景』に和漢聯句があるのではないが、それらに同座する人々の漢詩、和歌が入集しているのである。

靈元上皇の周辺では、つとに先の院の寛文頃から、『八幡八景』作者の豊長（七一参照）、實種（二一参照）、相国寺の閑汀集仗（一一参照）、昌陸（一一参照）らが和漢聯句の会に出座している。元禄四、五年の靈元上皇の和漢聯句会でも、實種、豊長、韶光（三一参照）、昌陸などの里村家の人々が出座する。和漢聯句の歴史的な経緯からすれば、公家の漢詩作者、禪宗の僧、林家の人々が『八幡八景』の漢詩作者として入集するのは自然なことである。

江戸詩史を繙くと、『八幡八景』の詩は、江戸初期の漢詩隆盛期にあたる。儒者、公家、僧侶などによって盛んに漢詩が作られた時期である。詩風は主に唐詩を範とし、格調を重んじ儒仏の思想を踏まえたり、和漢の故事に依ったりして詩題の景の特徴をよく表している。

周知の通り『瀟湘八景』は、中国の湖南省にある洞庭湖に注ぐ瀟水・湘江周辺の景色を、北宋の画家、宗迪（生没年不詳）が描いたもので、宋の沈括（一〇二九―一〇九三）は、随筆『夢溪筆談』に、「平沙雁落」「遠浦帆歸」「山市晴嵐」「江天暮雪」「洞庭秋月」「瀟湘夜雨」「煙寺晚鐘」「漁村落照」と紹介したことによる。日本では、鎌倉時代から近世初期において、ことに五山文学の禅僧によって盛んに『瀟湘八景』が漢詩に詠まれた。その後、鉄庵道生（一二六二―一三三一）によつて「博多八景」が詠まれ、康暦二年（一三八〇）には、義堂周信序による「大慈八景詩歌」（日向国志布志）が成立した。これらを基として、一四世紀に『南都八景』、一六世紀に『近江八景』等が誕生するのであるが、『八幡八景』には、『南都八景』の影響が認められる。『南都八景』は、公家方による漢詩と和歌とを一組にした編纂であるが、その意図には漢詩と和歌との物合せのような競演、および共演があり、以前から行われている趣向でもある。『八幡八景』はこれに倣った

のであろう。八景の内、六景の「雲居坂雨」「佐保川螢」「猿沢池月」「三笠山雪」「轟橋旅人」「東大寺鐘」がその影響とみられる。南都の地から八幡の地に移したのであるが、内容においても類似が認められる。例えば、（傍線稿者）

「佐保川螢」（南都八景）

一帯時川花鎗傍 緑楊陰晴引風涼 晚来千点流螢乱 疑是大官庭燎光 三条公時

飛ぶ螢影を映して佐保川の浅瀬に深きおもひをぞ知る 三条公忠

「放生川螢」（八幡八景）

晴川一帯遶宮牆 如在靈威与水長 熠燿流螢影相照 点衣猶認曩時光 泰山棕涇

いさぎよき川瀬の波に通夜かけをうつして螢とぶなり 見野

がある。なお、『八幡八景』は、複数の漢詩、和歌、発句から成る。

また、特筆すべきことに『八幡八景』では連歌の発句が加わっているのが指摘され、これが新しい趣向であるが、この発句に関連して、石清水八幡宮には「八幡八景連歌発句絵巻」がある。なお、『南都八景』には、和歌絵巻があり、『八幡八景』と同様な趣向であるが、『瀟湘八景』の画題の影響もあろう。「八幡八景連歌発句絵巻」も同様な趣向であるが、発句は当代の里村家の人々を中心に書き留め、絵も昌陸、昌純、昌億によって描かれたものである。連歌師による画賛は貴重な資料である。詳細は「第一景 雄徳山松」解題参照。

第一景 雄徳山松

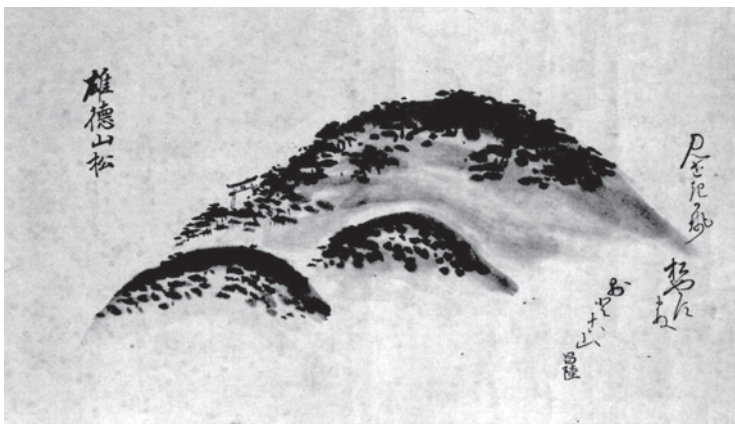
雄徳山松 解題

「八景」は、ある地方の風光明媚な風景を詩歌や絵画で表現したものであるが、地名（名所）の景觀とそれに相応しい景物をあしらうことで成立している。先行する八景では、中国の『瀟湘八景』に松は無い。景物として松があらわれる例は後に多くなるが、『八幡八景』が成立した当時は少なかった。

何故男山に松が出現したのか。男山は特定の山ではなく、石清水八幡宮を言う。

松は、わが国においては、神が宿る神木であり、常緑の松は千載を寿ぐ象徴である。また、松平氏を本姓とする徳川將軍家の弥栄を願う意を含める。このことは、昌陸の発句（一一一三、下挿図の石清水八幡宮蔵『八幡八景連歌発句絵巻』参照）に表れている。なお、『八幡八景』が影響を受けた『南都八景』に「南円堂藤」がある。この「藤」は、藤原冬嗣が南円堂を建立し藤を植えたことによるが、藤原氏繁栄の意味を込めた「藤」である。石清水八幡宮では、松が宝樹とされ、「雄徳山（男山）松」に相応しい趣向であるといえよう。

また、和歌においても男山の松は古より詠まれている主題である。「男山みねに聞こゆる声のみやいはねの松も万代のいろ 兼経」（石清水若宮歌合・三二六）などがある。漢詩では、「男山」を「雄徳山」と称している。このことに関し、嘉永元年（一八四八）に成立した『男山考古録』（以下『考古録』。石清水八幡宮編、全五巻、昭和二八年発行。本文の漢字は現行の字体に改め、濁点、ルビを適宜付す。）巻第二では、「男を雄徳と書るハ借字也、徳は古トコと訓めり、大徳法師などをダイトコと云にて知べし、又ユウトクと音もて呼は非じ」と述べている。その漢詩では、男山に徳が備わっていると讃え、松を龍に見立てる例がみられる。『八幡八景』の



『八幡八景連歌発句絵巻』

「天竜寺 前南禅虎岑」の「雄徳山頭地亦靈 龍姿入眼一峰青」(一一三参照)である。

挿画は、石清水八幡宮蔵『八幡八景連歌発句絵巻』(以下、『発句絵巻』と称す)である。その状況を一覧する。

- | | | | | | |
|-----|------|-----|----------|----|---------|
| 第一景 | 雄徳山松 | 発句者 | 昌陸 | 画者 | 未詳(昌陸か) |
| 第二景 | 極楽寺桜 | 発句者 | 昌純 | 画者 | 未詳(昌純か) |
| 第三景 | 猪鼻坂雨 | 発句者 | 昌億 | 画者 | 未詳(昌億か) |
| 第四景 | 放生川蛭 | 発句者 | 昌築 | 画者 | 未詳 |
| 第五景 | 安居橋月 | 発句者 | 周旋 | 画者 | 昌億 |
| 第六景 | 月弓岡雪 | 発句者 | 玄心 | 画者 | 昌陸 |
| 第七景 | 橋本行客 | 発句者 | 直能(直條父) | 画者 | 昌純 |
| 第八景 | 大乘院鐘 | 発句者 | 宗得(直條祖父) | 画者 | 昌純 |

山城郷土資料館編図録『南山城の俳諧―芭蕉・蕪村・樗良―』(二〇〇七)伊藤太氏稿によると、全八景の発句揮毫はそれぞれ自筆である。画者は昌億、昌陸、昌純の三名で、彼らの景は自画讃であろうか。画者については、用紙の裏に名が記されている。連歌師による自画賛資料は貴重である。因みに、『南都八景』も同様の淡彩画に和歌を記した一軸(国文学研究資料館蔵「南都八景和歌」)がある。

漢詩一首、和歌六首、発句一句が撰集される。

一 雄徳山松

雄徳山頭古廟前

雄徳山頭古廟の前ゆうとくさんとうこびょうまえ

蒼官擎蓋立森然

蒼官擎蓋立つこと森然たりそうくわんけいがいたちりんぜん

到今猶見神明化

今に到るも猶神明の化を見るいまいたなおしんめいかみ

佳氣氤氲幾萬年

佳氣氤氲たること幾萬年ぞかきいんうんいくまんねん

公辨親王こうべんしんのう

〈作者〉 公辨親王。寛文九年(一六六九) 正徳六年(一七一六)、四八歳。後西天皇の第六皇子、貴宮秀憲親王。出家後、

親王宣下を受け法親王となる。毘沙門堂門跡、天台座主などを兼任。狩野常信に画を学び、能書家としても知られた。

《押韻》 前・然・年（下平声一「先」韻）

《語釈》 ○頭Ⅱいただき。 ○蒼官Ⅱ松の異名。 ○擎蓋Ⅱ高くそばだち、おおうさま。擎は、たかい、そばだつ。蓋は、

おおう意。 ○森然Ⅱ樹木がこんもりと茂り立つさま。 おごそかなさま。 ○神明Ⅱ神。 ○化Ⅱ自然界の創造のはたらき、造化、めぐみ。 ○佳氣Ⅱめでたい氣、吉祥の氣。 ○氤氲Ⅱ天地の氣の盛んなさま。

《訳》 男山のいただきの古いやしろの前に、松が高々とおおうように茂り立つ。今もなお神の造化のめぐみを見ることができ、盛んな吉祥の氣は幾万年漂いつづけていることか。

一一二 同

雄徳山中感勝縁

ゆうとくさんちゆうせんかん
雄徳山中勝縁を感じず

靈神威力自嚴然

れいじん いりよくのすけげんぜん
靈神の威力自ら嚴然たり

高松繁茂參天翠

こうしょうはんも てんさん
高松繁茂し天に參ぜんとして翠なり

知為皇家保萬年

ちうけ ため ばんねん たも
皇家の為に万年を保てるを知る

《作者》 閑汀集仗。生没年未詳。相国寺中瑞雲庵、天啓和尚、諱杖長老。後光明上皇、後西院上皇、靈元天皇の和漢聯句会に出る。幕府の朝鮮書契御用（以酏庵輪番）を務める。

《押韻》 縁・然・年（下平声一「先」韻）

《語釈》 ○勝縁Ⅱすぐれた因縁、すぐれたよい縁。 ○靈神Ⅱ靈驗あらたかな神。御利益のある神。 ○嚴然Ⅱいかめしい

さま。

《訳》 男山の山中は神仏との優れた縁が感じられ、靈驗あらたかな神の威力がいかめしくもただよう。みどりの松が高々と盛んに茂り青空にとどかんばかり、天皇家の為に万年の太平を保っているのが知られることだ。

《解説》 起句・承句に男山山中の厳かな神の靈氣を記し、転句で高々と聳えるみどりの松を具体的に描写する。男山は都西南の裏鬼門に位置し、古来王城守護の神として崇敬されてきた。転句を受けて結句は、万年の縁を保つ松に象徴されるかのように、男山は、皇家の万年の榮を守護していると結ぶ。

一三 同

天龍寺 前南禪虎岑

雄德山頭地亦靈

雄德山頭地も亦靈なり

龍姿入眼一峰青

龍姿眼に入りて一峰青し

神通似現無常說

神通無常の説を現すに似たり

松吹聲々側耳聽

松吹聲々耳を側て聴く

《作者》 虎岑玄竹。直參旗本酒井田忠知の五男、臨濟宗鹿王院、天龍寺塔頭の住職を務めた。寛文七年（一六六七）現在に至る堂舎を修理し、中興の祖といわれる。

《押韻》 靈・青・聽（下平声九「青」韻）

《語釈》 ○龍姿Ⅱけだかい姿を龍にたとえていう語。ここでは男山の松をいう。 ○神通Ⅱ俗人の不可能なことが自由にできる不思議な力。 ○似Ⅱ如しに同じ。

《訳》 男山の頂きはその地までも靈氣が感じられる、龍のごとき松の姿が眼に入り峰全体が青々としている。神通不可思議な力がこの世の無常を説くかと感じられ、松に吹く風の響きを耳をそばだてて聴くことである。

《解説》 龍姿は、天子の姿をいう用例が多い。古来男山に多くの天子の行幸がなされたことが思われる。ここでの龍姿はけだかい松を表す語である。転句・結句で作者は、神通不可思議の松籟に、諸行無常の仏説を聞き取っている。

一四 同

大徳寺 端堂和尚

翠嶺鵠峰德自存

翠嶺たる鵠峰德自ら存す

蒼髯聳緑晝黄昏

蒼髯縁に聳え昼も黄昏たり

蔭涼匪啻清凡眼

蔭涼しくて啻だに凡眼を清むるのみに匪ず

更有風濤洗耳根

更に風濤の耳根を洗う有り

《作者》 端堂紹肅。寛永七年（一六三〇）〜正徳三年（一七一三）、八四歳。大寂法明禪師。克々子。大徳寺二二六世。

《押韻》 存・昏・根（上平声一三「元」韻）

《語釈》 ○翠嶺Ⅱ山が高くそびえるさま。翠は高い、嶺は山の意。 ○鵠峰Ⅱ鳩ヶ峰。ここでは男山のこと。鵠は、はと。

○蒼髯そうぜん髯はひげ。蒼髯は年老いて灰色になった髯をいうが、松の異名に「蒼髯叟」があり、ここでは松をいう。○匪啻ひたん更さらただにただでなく更さらにさらである。○濤たう大きな波浪。なみ。擬音語として、波のような音。○耳根じこん六根の一。声塵に對して、耳識を生ずるもの。ここでは耳・聴覚の意。○洗耳根せんじこん洗耳に同じ。世俗の汚れたことを聞いた耳を洗ひ清める。昔、許由が、堯が自分に天下を譲ろうとしたのを聞いて耳を洗ったという故事。(後漢書 崔駰伝注)による。

〔訳〕 高くそそり立つ男山には徳がおのずから備わり、山には松が聳え登も小暗くたそがれどきのようである。松陰には涼しい風が吹き、ただに松のみどりに凡人の眼が清められるだけでなく、さらに波のような音のする風に耳まで洗われるようである。

〔解説〕 『論語』に「歳寒くして、然る後に松柏の彫むに後るを知る。(時節が寒くなつて始めて、松や柏が、他の草木がしぼむのに青さを保つことがわかる。このように、大事に遭遇してはじめて君子の節操がわかるものだ)」とあるように、松は君子の節操・人徳を象徴する。男山に立つ松に徳を感じ、さらに松陰で松籟の音を聞くと耳が洗われ、俗塵に生きていた己が清められると述べている。

一五 同

妙心寺 鐵帚和尚みょうしんじ てつそう おしょう

靈光生處是靈區

靈光れいこう生ずる處ところ是靈區れいこく

巖岫松高千萬株

巖岫がんしゅう松は高したか千萬株せんまんしゆ

不土托根今古色

不土ふどに根を托たくして今古こんこの色いろ

聚青擁碧護皇都

青あおを聚あつめ碧みどりを擁ようし皇都こうとを護まもる

〔押韻〕 区・株・都 (上平声七「虞」韻)

〔語釈〕 ○靈光れいこう靈妙な光、不可思議の光。 ○靈區れいこく神々しい土地、神仏の靈驗あらたかな地。

つ岩。岩の峰。 ○不土ふど未見。土 (国土・領地) でないところ、すなわち神域と解した。 ○今古こんこ「古今」に同じ。昔

も今も。また、昔から今に至るまで。

〔訳〕 靈妙な光の生ずるこ男山は靈驗あらたかな地域であり、険しい岩の峰に幾千万株の松が高々と生えている。松は神域に根をおろしつつ古来の色を保ち、青々とした山を集めみどりの川を帯びて皇都を守護しているのである。

一六 同

黄檗山衆 月潭和尚
おうばくさんしやう げつたんおしょう

満山鬱密尽靈松

まんざんうつみつじんれいしょう

鱗甲千年欲化龍

りんこうせんねんりゆう
鱗甲千年龍と化せんと欲す

莫是教翁曾手植

これな
是翁をして曾て手ずから植えしむること莫し

永鋪清蔭翠光濃

ながせいん
永く清蔭に鋪きて翠光濃かなり

〈作者〉 月潭。寛永一三年（一六三六）〜正徳三年（一七一三）、七八歳。黄檗宗の僧、近江生まれ。道号は惟徹、法諱は

道澄、室号は心華室。著書に『禅悦集』・『龍巖集』がある。

〈押韻〉 松・龍・濃（上平声二「冬」韻）

〈語釈〉 ○鬱密うつみつ 〓 ふさがりこもっているさま。 ○鱗甲 〓 魚類と甲殻類をいう。ここでは年を経た松の幹の表面。 ○清蔭 〓

涼しいかげ。 ○化龍 〓 龍に変化する。『碧巖録』に「三級浪高くして魚龍と化す」とあるのを踏まえる。

〈訳〉 山じゅうが鬱蒼として尽く靈なる松におおわれている、鱗や甲羅のごとき皮を持つ松の幹は千年を経て竜に変化しそうな様子である。この松はかつて翁たちに手ずから植えさせたものでは無い、長い年月この神霊の地の清らかな蔭に成長し濃い緑をなすにいたったのである。

一七 同

公儀儒者 林大學頭信篤
こうぎじゆしや はやしだいがのとうのふあつ

百尺長松雲接隣

ひやくしやく ちやうじやうくもせつりん
百尺の長松雲接隣す

男山雖舊德惟新

おとやまきゆう いえど しかく これあら
男山旧なりと雖も徳は惟新たなり

銀濤漲起石清水

ぎんとうみづ かわ いわしみず
銀濤漲り起くる石清水

一曲風聲迎送神

いつきやく ふうせいかみ げいしやう
一曲の風声神を迎送す

〈作者〉 林信篤。正保元年（一六四四）〜享保一七年（一七三二）、八九歳。江戸時代前・中期の儒者。鳳岡と号する。林

鷺峰の次男。四代將軍徳川家綱から八代將軍吉宗まで五代にわたって仕えた。林家の家塾が移され湯島聖堂となるに伴い、

元禄四年大學頭に任ぜられる。著書に『鳳岡學士集』などがある。

〈押韻〉 隣・新・神（上平声一一「真」韻）

〔語釈〕 ○銀濤ぎんとう 〓 白く激しい大波。ここでは男山山上に湧き上がるように立つ白雲をいう。 ○風声 〓 風の音。ここでは松籟をいう。

〔訳〕 百尺もあるかと思われる松に雲が近づき接し、男山は古くからあるが徳は日々新たまる。石清水のほとばしるかと思ふ白雲が湧き上がるように立ち、音曲の調べのように松風が音を立てて神を送迎することである

一一八 同

徳嶺地雄藏世年

徳嶺地雄世年を蔵す

松廻靈社勢凌天

松は靈社を廻り勢い天を凌がんとす

操心不改四時翠

操心改めず四時翠にして

永護萬邦榮色連

永く万邦を護りて榮色連なる

〔作者〕 光海。慶安二年（一六四九）〜元禄一三年（一七〇〇）。東本願寺第一六代法主、一如上人。元禄一二年（一六九九）、大谷本堂を再建した。

〔押韻〕 年・天・連（下平声一「先」韻）

〔語釈〕 ○世年 〓 世代や年月。 ○四時 〓 四季。 ○万邦 〓 多くの国、あらゆる国。ここでは日本国内の国。 ○榮色 〓 光り輝く容色・美色をいうが、ここでは国々の榮えを守る美しい色をいう。

〔訳〕 男山は嶺に徳あり地は雄大であり長い年月を経ている、松は靈社をめぐりその勢いは天を凌がばかりである。節義を守る松は四季に色を変えず常に緑であり、長く日本の多くのくにぐにを護って美しい色を連ねていることだ

〔解説〕 結句「万邦」は古く『書経』・『詩経』に用例の見える語で、（徳高い聖なる）帝が治める国々、また帝に教化されるべき国々という文脈で見える。この詩では石清水八幡宮が守護すべき、日本の諸国の意味で用いられている。

一一九 同

鳩嶺放光護帝城

鳩嶺光を放ち帝城を護る

群松積翠萬年榮

群松翠を積みて万年榮ゆ

大僧正光海

雲梢自有上求色

風葉猶餘下化聲

雲梢自から上求の色有り
風葉猶余す下化の声

〔校異〕 承句「群」・結句「聲」は、底本「郡」・「龍」とするが、昭和本によって改めた。

〔押韻〕 城・榮・聲（下平声八「庚」韻）

〔語釈〕 ○鳩嶺あぐれい＝男山の嶺。 ○帝城＝天子のいる都。帝京。 ○上求じょうぐ＝上に向かってさとり道の道を求めること。

○下化げけ＝菩薩が衆生を救うこと。

〔訳〕 鳩が嶺は靈光を放って都を守護し、多くの松が翠を重ねて万世に榮える。雲に聳える梢は上に向かってさとり道の道を求めようとする趣があり、松に吹く風の音は衆生を救う教えの声を聞くようである。

〔解説〕 上求・下化は、『摩訶止観』に「上は菩提を求め、下は衆生を救う」とあるのに基づき、菩薩が上に向かっては菩提を求め、下に向かつては衆生を教化することをいう。男山の松の姿を自利利他を実践する菩薩に見立てた表現である。

一一〇 同

兀岩座元こつがんざげん

鎮護國家山有靈

老松出岫獨亭々

殿前高積千年緑

峯頂常看四序青

鎮護國家山に靈有り
老松岫に出でて独り亭々たり

殿前に高く積む千年の緑
峰頂常に看る四序に青きを

〔作者〕 未詳。昭和本に「淀長州寺先住」とある。

〔押韻〕 靈・亭・青（下平声九「青」韻）〔語釈〕、○座元＝禪宗の僧職。首座。首座の僧堂での座位が元首であるところからいう。 ○岫しゅう＝みね。山のいただき。 ○亭々＝高くそびえ立つさま。 ○四序＝春夏秋冬の順序。四季。 ○青＝松の緑。

〔訳〕 男山は國家を守り山には靈氣が感じられ、老松が山の峰にひとり高々とそびえ立つ。八幡宮の前には長い年月松が高々と緑に映え、山頂に季節に変わることなく青き色を見せていることだ。

一一二 同

嘯月

般若談高豈厥知

般若の談高豈に厥れ知らんや

古松鬱密拂天奇

古松鬱密として天を払いて奇なり

寄言長勿化龍去

言を寄す長く竜と化して去ること勿かれ

恐有男山山勢衰

恐るらくは男山の山勢衰うること有らん

《押韻》 知・奇・衰（上平声四「支」韻）

《語釈》 ○般若Ⅱ迷いを去り悟りを開く知恵。また、『般若心経』の略。

○談高Ⅱ高談に同じ。高尚な話。○厥Ⅱそれ。

その。○鬱密Ⅱ木が茂りふさがりこもるさま。○払天Ⅱ天をなでる。非常に高いさまをいう。

○奇Ⅱ「奇」の俗字。

すぐれる。ぬきでる。○化龍Ⅱ一六語釈参照。

《訳》 仏教の般若の高尚な議論に松は何の関わることも無い、古松は高々とおおうように茂りみごとなさまである。松よ、

竜と化して去らずにいつまでもそのままいてくれ、男山の山の勢いが衰えるかもしれないから。

《解説》 仏教の悟りに関する高尚な般若の議論にも関わることも無く、超然としておのずから茂り立つ松。その松こそが男山

の山の勢いをささえ、男山を象徴するものであると詠んでいる。

一一二 同

兵部卿 幸仁親王

おさまれる世にそやわらく男山栄行松の花のひかりは

《作者》 幸仁親王。明暦二（一六五六）年生、元禄一二（一六九九）年没、四四歳。後西天皇の第二皇子。寛文七（一六六

七）年に高松宮を継承、同一二年に有栖川宮に変えた。和歌・書・茶・絵画・文章に巧みであった。

《語釈》 ○栄行Ⅱ栄え行く。ますます栄える。繁栄する。「今こそあれ我も昔は男山さかゆく時もありこしものを よみ人

知らず」（古今集・雑・八八九）。「やはた山さかゆく峰はこえはてて君をぞ祈る身のうれしさに 源通光」（玉葉・神祇・二

七六五）。

○松の花Ⅱ松に咲く花。百年に一度咲くというところから「十返りの花」ともいい、めでたいことや長寿の賀

の意に用いる。「雪つもる年のしるしにいとしく千歳の松の花咲くぞ見る 藤原頼通」（金葉集・賀・三三三）。

《訳》 治まった世には雄々しい男山も和らいださまを見せる。ますます栄える御代をたたえるかのように松の花がひかり輝

いていることよ。

〈解説〉「男山」は、男の意をかけ、雄々しい様子を表現する。一首は、治まった世とその行く末までの栄えを、男山に繁茂する松、その松の花のひかりの具体をもつて表現したものである。

一一三 見せきかせ松や霞まぬおとこ山

法眼昌陸しやうりく 〈霞む・春〉

〈校異〉 底本は、上五「見をきかせ」とあるが、昭和本、上五「見せきかせ」によった。

〈作者〉 里村昌陸。連歌師。寛永一六（一六三九）年生、宝永四（一七〇七）年十一月一六日没、六九歳。里村南家。昌程の子。兄弟に昌純（二一一一参照）、周旋（五一一七参照）がいる。延宝元年（三五歳）、法眼。元禄八年（五七歳）、職を辞する。江戸幕府の連歌会である柳営連歌の宗匠を務める。なお、松江重頼（維舟）、西山宗因は、里村南家昌琢に師事する。

〈語釈〉 ○見せきかせ〓見せなさい、聞かせなさい。男山の松に呼び掛ける様子。 ○松〓往古を熟知し、老人の知友の木と目され、千年の樹齡と常盤の緑を讃える。 ○霞〓春の象徴的景物として立春と共に山や原に棚引き、春の訪れをいち早く人に知らせるところに眼目がある。

〈訳〉 見せなさい、聞かせなさい、男山の松よ。霞むことなく、あざやかな常緑の姿を現す、そんな評判の鳴り渡る男山の千載の松であることだ。

〈解説〉 松に霞をあしらい、連歌の発句らしい、品格のある丈高い句である。昌陸は、柳営の連歌始めの宗匠を勤め、千歳の松に尽きせぬ御代を祝うのは賀歌の常であるが、特に徳川松平家に因む松を詠み込むのを常としていた。後の芭蕉『俳諧七部集』に次の句が詠まれている。「昌陸の松とは尽ぬ御代の春 利重」（春の日）。

一一四 姿のちや春風よはふおとこ山

紹尹しやういん 〈春風・春〉

〈作者〉 里村紹尹。連歌師。生没年未詳。玄俊の子。玄心（六一一五参照）の弟。『元禄十二年正月十一日連歌御会』に、発句昌億（三一一一参照）、脇紹尹、紹兆（二一一二参照）、信円、清長、昌築（四一一五参照）、昌益と一座する。里村北家。なお、松永貞徳は里村北家の祖紹巴に師事する。

〔語釈〕 ○松のち〓千載の松の生える土地。ここでは男山のことをいう。 ○よばふ〓呼ばう。何度も呼ぶこと。呼び続ける。

〔訳〕 ここは千載の松の生える土地である。その松に春を呼ぶ風が吹き続ける、そんな男山である。

〔解説〕 松に風はふさわしい取り合わせで、春風を呼ぶとすることで、春のさわやかな景色を浮かび上がらせる。「呼ばう」と呼びかけ、話し言葉となり、春が来た心の高まりを平易に表現した。

一一五 松に吹かせや長閑けき男やま
〔語釈〕 ○長閑けし〓天氣が良く、静かで穏やかなさま。 玄怙 〔長閑けし・春〕

〔訳〕 松に風を吹かせて長閑かなもので、初春の穏やかでめでたい男山であることだ。

〔解説〕 「長閑けし」が季語として春を示す通り、春の男山の風情を示す句であるが、松に風を吹かせるという擬人化に趣向がある。大きな景句となっている。

一一六 山松に禮やおくりし若みどり
〔語釈〕 ○礼〓敬意を表すこと。 宣安 〔若みどり・春〕

〔訳〕 男山が松に敬意を表したようだよ。命を吹き込まれた松の若みどりがいきいきとしている。

一一七 若松や千代のさか見む男山
昌海 〔若松・春〕

〔語釈〕 ○さか〓栄えること。 弥栄。「今こそあれ我も昔は男山さかくく時もありこしものを 読人知らず」(古今集・雑・八八九)。

〔訳〕 若松よ。これから千載までの繁栄を見せてくれるであろう、男山にふさわしい姿であることだ。

〔解説〕 『古今和歌集』の「今こそあれ」歌(八八九)をふまえた次の句がある。「新月やいつを昔のおとこやま 其角」(いつを昔)。

一一八 橘にそなれて茂れ嶺のまつ

高經（こうけい）〈橘・秋〉

〔語釈〕 ○そなる＝磯馴。潮風のため樹が低くなびて傾くことから、その風土に順応すること。なじむこと。ここでは松に馴染んで茂れと呼びかける。 ○橘＝橘は花も美しく、実もよい香りがするが、葉は霜が降りても常緑であるところから、常盤の樹とされる。松とともに千載を寿ぐ。内裏の紫宸殿の左近の桜に対し、右近の橘がよく知られているが、これに因んで石清水八幡宮にも植えられた。

〔訳〕 石清水八幡宮に、橘が植えられている。それに馴染んで茂れ、男山の嶺の松よ。

一一九 松も霜の花をかさすや雄徳山

利房（りぼう）〈霜・冬〉

〔作者〕 『西山三代集』に出る「西脇利房隱市軒」で、元禄期に活躍する堺の人か。貞門俳書『犬子集』『時勢粧』や談林俳書『続境海草』『つくしの海』などに名が見える。

〔語釈〕 ○霜の花＝霜が美しく白く見えることを花にたとえていう語。 ○かさす＝挿頭す。草木や花の枝を飾りとして髪または冠に挿すこと。「露ながらをりてかささむ菊の花おいせぬ秋のひさしかるべく 紀友則」（古今集・秋・二七〇）。

〔訳〕 花時に人が桜をかざすように、松も同じように霜を挿頭している男山であるよ。

〔解説〕 花の時期に、それを髪などに挿頭することが昔から見られた。当該句では、松が霜をかざすと言い立てたのである。現実ではありえない様子を言い立てるのは、談林俳諧の得意とするところである。

一二〇 まつの聲やそれしも神樂男山

照圭（しょうけい）〈神樂・冬〉

〔作者〕 西山宗春（二一一五参照）に連なる人で、連歌に名が見える。

〔語釈〕 ○まつ＝松に待つのを意を掛ける。神樂を待ち望むのである。 ○それしも＝それこそ。 ○神樂＝神をまつるために舞樂をもつて奉納する神事。ここでは石清水八幡宮に奉納される神事。記紀の天岩屋戸前の天鈿女命の神がかりを原形として、宮中では御神樂と称して執り行われる。

〔訳〕 松が風にゆれる音を聞けば、それ自体が、待ち望まれた御神樂を聞くようである。そんな敬虔な松の声が聞ける男山なのだ。

《解説》 寛元二（一二四四）年の記録によれば、石清水八幡宮では勅節十箇度として、朝廷が関与する仏神事が年一〇回行われた。御神樂は二月と十一月の上卯日に行われた。天曆八（九五四）年が記録に見える初めとし、以来室町時代に至るまで行われたが、その後執行されなくなった。だが、霊元天皇が在位する延宝四（一六七六）年から延宝八年まで執り行われた（石清水八幡宮史資料叢書・四）。まさしく、朝廷儀礼の復旧に意を用いた霊元天皇の差配によるものと思われる。現宮司田中恆清氏の著書『神道のちから』によれば、父の代に復活したとのことである。但し、里神樂と異なり、神事は非公開である。

一一二 姿にとはん幾春久しおとこ山

伴与九郎 光金 〈春・春〉

《語釈》 ○とふ〓問う。話しかける。尋ねる。

《訳》 幾度の春を経てもなお変わらぬ男山の松よ、お前はいつの世からこの男山に命を得ているのかと問うてみよう。

《解説》 神の座す男山が末永く続くことを、永遠を象徴する松に重ねた句である。

一一三 若緑立や栄行峯の松

則平 〈若緑・春〉

《語釈》 ○若緑〓樹木の新芽や若葉などのみずみずしい緑色。ここでは松の若葉をいう。 ○立つ〓新芽や若葉が芽吹くこと。萌え立つ。 ○栄行〓「雄徳山松」一一二語釈参照。

《訳》 若葉が芽吹き、これから栄え行く峯の松であることだ。

一一三 春毎に色新也嶺のまつ

柏村醜哉 直條 〈春・春〉

《作者》 柏村直條。「はじめに」参照。

《語釈》 ○色〓松の葉の常盤の緑色。 ○新〓今までと違って新しいさま。ここでは、松の緑が新葉に変わること。「冬過ぎて春し来れば年月は新たなれども人は古りゆく」（万葉集・一八八四）。

《訳》 春になる毎に、壮気に満ち甦るかのような嶺の松の若葉であるよ。

《解説》 北宋の欧陽修（一〇〇七―一〇七二）の詩「張生を送る」に、「老驥骨奇にして心尚壯、青松歳久しくして色愈新

たなり」とある。一七年ぶりに不遇の旧友と再会し、年を経ても年毎に芽吹く松の常緑が変わらない様子に、友情の変わりのないことを託したものである。

一―二四 同

直樹なおき

男山音にたてつ、榮行さかゆかんん玉衾まつがえ枝の風のひかりも

《作者》 森元直樹。生没年等未詳。森元（本とも）家は継嗣が絶え、柏村宗久の子信久が跡を継いだ。直樹は信久（寛永一六（一六三九）年没）の末裔。

《語釈》 ○音に立つ＝評判になる。うわさになる。「吉野河水の心はやくとも滝の音には立てじとぞ思ふ よみ人知らず」（古今集・恋・六五一）。○玉＝美しいもの、すぐれているものをほめていう。○風のひかり＝春の日光のうらうらと照る中を、微風が吹き渡る様子。

《訳》 男山は評判になりつつ榮え行こうとしている。美しい松の枝に春の光がうらうらと照る中、風がふきわたっていることだ。

《解説》 「音に立つ」の表現で、男山が評判になるほど榮え行く山であると讃え、そんな山に相応しいものとして美しい松を取り上げ、春のうらかな光の中、微風が吹く様を寿いだものである。

一―二五 同

正隠しょういん

榮行さかゆくやむかしも今も男山木高こたかき衾まつの千代みどりのみとりに

《語釈》 ○千代＝千世。千年。千歳。また、非常に長い年月。「男山榮行く君がはとの杖つきせぬ千代をかへりみるらん飛鳥井雅世」（雅世集・七〇七）。「おしなべて木のめも春のあさみどり松にぞ千代の色はこもれる 藤原良経」（新古今集・春・七三五）。○緑＝松の葉は常緑であるところから、永遠に続く様子を例える。ここでは男山の松の緑をいう。

《訳》 まずは榮え行くことだ。昔も今も男山は。木高い松に年ごとに芽吹く緑は、幾久しく気高い様を示している。

《解説》 倒置法によって、男山の榮え行く様を強調し、「昔も今も」と付け加えることで、『古今和歌集』にある次の和歌をふまえていることを示す。「今こそあれ我もむかしは男山さかゆく時もありこしものを よみ人知らず」。この歌は、『古今

和歌集』の仮名序にも「男山の昔を思ひ出でて、女郎花の一時をくねるにも、歌を言ひてぞ慰めける」と取り上げられ、つとに知られるようになった。但し、仮名序では、この歌が、男が若かりし昔の盛んな様を思い起こし、それと比べて今日の老いた姿を嘆く時、自分自身を慰めるものとして取り上げていることに注意すべきである。それに対し、正隠の和歌は、「昔も今も」榮え行くものとして男山を強調し、「千代のみどり」にその証しがあるとしている。毎年、春になれば新緑が芽吹き、若さを保っているから老いることがないのである。

一―二六 同

伊貞

十かへりの松に花さく男山幾千年とか御代をいのらん

〔語釈〕 ○十かへりの松十返りの松。とがえりの松とも。松が百年に一度、千年に一度花を咲かせるところから、永い時を経た松をいう。「久に経ん友とや君に契るらん十かへりの松の花の咲まで 平経顯」(新拾遺集・賀・六九三)。

〔訳〕 幾千年もの永い時を経たという松に花が咲いている男山である。幾千年とか言うが、いったいどのくらいだろう。いずれにしても永遠の泰平の治世を祈ろう。

〔解説〕 めったに咲かない松の花が咲いたことに寄せて、男山の松を賀し、天皇の治世を祈る。松は常緑の生命力を寿ぐことが多く、勅撰集の賀の歌にも多く詠まれる。「よろづ世を松にぞ君を祝ひつる千歳のかげにすまむと思へば 素性法師」(古今集・賀・三五六) などがある。伊貞の歌では、めったに咲かない松の花が趣向である。いずれにしても泰平の御代を寿ぐにふさわしい。

一―二七 同

宗仙

おとこ山木高き松の色にひく君か八千代の影はふりせし

〔校異〕 底本の第三句は「色アキマく」となっているが、昭和本によって「色にひく」とした。

〔作者〕 柏村宗仙。直能の号。宗仙齊、柏亭とも。宗得(直重)の子(五―一二参照)。直條(「はじめに」参照)の父。

〔橋本行客〕 発句(七―一五) に出る。

〔語釈〕 ○ひく手繰り手繰り寄せること。 ○八千代八千年。万世。多くの年月。松の緑の永遠性に関連して「千代」「八千

代」の表現は多い。「ちはやふる平野の松の枝繁み千代も八千代も色はかはらし 大中臣能宣」(拾遺集・賀・二六四)。

○影〓お陰。恩恵。「筑波嶺のこのもかのもにかげはあれど君が御かげにますかげはなし」(古今集・東歌・一〇九五)。

○ふりせじ〓古くならないだろう。色褪せることはあるまい。

〈訳〉 男山の松は、すつくと背が高く、松の緑は青々としている。その色に手繰り寄せられるように、天皇の恩恵は多くの年月を経ても色褪せることはなからうよ。

〈解説〉 男山の松を寿ぎ、天皇の恩恵を寿ぐ。当世の永遠の泰平を賀すにふさわしい歌となっている。「君が世を何にたとへん常盤なる松の緑も千代をこそふれ よみ人知らず」(後拾遺集・賀・四三二)。

第二景 極楽寺桜

極楽寺桜解題

極楽寺の沿革として、『考古録』巻一〇はその創建を元慶七年（八八三）としている。石清水八幡宮の男山遷座が貞観元年（八五九）とされるので八幡宮創建間もない時期に建立された堂宇としてよい。『考古録』では「昔も今の如く惣檜皮葺也、是往古の堂の容鉢也」とし、安宗（石清水初代別当）が「伽藍一院」を「極楽寺」と號したと記す。「極楽浄土」の世界を体现するための建立と解釈できる。（表紙・裏表紙の「八幡山案内絵図」参照）

また、『考古録』に、「建久元年八月十五日己酉放生会也、神輿令下三極楽寺」云々あるは、後年右寺境内に頓宮建設られし故に、當寺の名を挙たる也」とある。放生会の際、神輿が本殿から頓宮に遷座されるのであるが、頓宮殿が建設中であつたため臨時的に極楽寺に遷座したということである。

ところで、『徒然草』五二段は、京都の仁和寺の僧侶が石清水八幡宮を参拝するためにやってきたのに、ふもとにある高良神社や極楽寺など宿院地区だけしか詣でず、山上を巡らなかつたことを悔いる話であるが、それ程、極楽寺などの山下の堂塔が賑わつていたということでもあろう。だが、宿院地区は、明治元年（一八六八）の鳥羽伏見の戦いによつて周囲の頓宮、回廊など数多の建造物が尽く灰燼に歸したことは周知の通りである。

『考古録』の極楽寺の項には、『八幡八景』から園基福の和歌が挿入されている。桜の花は、『万葉集』では梅の花が多く詠まれていたが、『古今和歌集』以後、わが国を象徴する花として賞翫されてきた。桜は「花」とも表現され、連歌俳諧においても「月」とともに風雅の象徴である。極楽浄土の気分に通う花として桜が趣向されたのであろう。極楽寺の桜は、『八幡山名所案内記』（慶応二年冬、長濱尚次序）



『発句絵巻』

によれば、「廊内数百の桜は八景之一」とあり、見てたえのある景であつたようである。桜を詠んだ和歌は、

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ 紀 友則 (古今集・春・八四)

世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし 在原業平 (古今集・春・五三)
など枚挙に暇がない。

なお、極楽寺が頓宮殿(疫神堂)と並立していたことは、石清水八幡宮が江戸時代まで「石清水八幡宮寺」と称されていたように、神仏習合の宮寺であつたことを示すものである。

漢詩九首、和歌五首、発句一〇句が撰集される。

二一 極楽寺櫻

莫伐從來花有神

神人日々揖宮巡

彩霞溶曳紫雲外

極楽寺中占断春

伐る莫かれ從來花に神有り
き な じゅうらいはな かみあ

神人日々宮を揖して巡る
じにんひびみや ゆう

彩霞溶曳す紫雲の外
さいかようえい しうん そと

極楽寺中春を占断す
ごくらくじちゅうはる せんだん

風早 光禄太夫實種
かきはや こうろくたいふ ざねたね

〈作者〉 風早實種。寛永九年(一六三二)〜宝永七年(一七一〇)、七九歳。江戸時代中期の公卿。光禄大夫は、従二位にあたり、後に正二位中納言となる。風早家の祖。千宗旦に茶を学び、烏丸光広に香を学び、香の風早流を興した。

〈押韻〉 神・巡・春(上平声一一「真」韻)

〈語釈〉 ○從來Ⅱ今まで。これまで。 ○神人Ⅱ神社に奉仕する神職。 ○揖Ⅱ両手を組んで会釈する。 ○彩霞Ⅱ桜の花

で色どりの美しい霞。霞は漢語では、朝焼け・夕焼けの意であるが、ここでは和語の「かすみ」の意味で用いられている。

○溶曳Ⅱゆったりとたなびくさま。 ○紫雲Ⅱ紫色の雲。瑞雲。 ○占断Ⅱしめつくす。ことごとく占有する。

〈訳〉 桜を切つてはならない、これまでずっと花に神が宿ってきたのだから、神に仕える神人が日々宮を拝礼しつつ巡っているのだ。紫雲の外に桜で美しい色に染まった霞が漂い、ここ極楽寺は春をひとり占めしていることである。

〈解説〉 紫雲は瑞祥をあらわす。浄土教では、念仏修行をするものの臨終に弥陀三尊が極楽から紫雲に乗って来迎するとい

う。宗祖法然の誕生や往生の時には紫雲があつたと伝えられる。法然の歌に、「柴の戸に明け暮れ懸かる白雲をいつ紫の雲に見なさむ」（玉葉集）がある。

二二二 同

前眞如顯昌
ぜんしんにょけんしやう

遠映夕陽古寺櫻

とお せきやう えい こじ さくら
遠く夕陽に映ず古寺の桜

春光明媚慰人情

しやうこうめいびにじんじやう なんくせ
春光明媚人情を慰む

吟望宜極視聽樂

ぎんぼうよろ しやうぼう
吟望宜しく視聽の樂を極むべし

花有清香鳥有聲

はな せいこうあ とり こえあ
花に清香有り鳥に声有り

〈押韻〉 櫻・情・聲（下平声八「庚」韻）

〈語釈〉 ○光Ⅱ光に同じ。 ○明媚Ⅱ山水の景色の清らかであかるく美しいこと。

〈訳〉 遠くから眺めると古寺の桜は夕陽に映え、その春景色は美しく人の心を慰める。詩を吟じつつ眺めると見聞きする樂しみを極められる、花は清らかに香り鳥のさえずりが聞こえてくる。

〈解説〉 結句は、蘇軾「春夜」詩の「春宵一刻值千金 花に清香有り月に陰有り」を踏まえる。人口に膾炙した詩句を踏まえながら、ここでは花の清らかな香り・さえずる鳥を詠み、極樂寺にふさわしく、『阿弥陀經』の極樂浄土をも連想させる。

二二三 同

前天龍古靈
ぜんてんりゆうこれい

歷涉城南奇秀境

れきしやう じやうなん きしやう
歷渉す城南奇秀の境

梵宮櫻雪映神祠

ぼんぐう おうせつしんし えい
梵宮の桜雪神祠に映ず

古今騷客多題詠

ここん そうかくだいはいおほ
古今の騷客多し

露葉風枝受幾詩

ろやうふうしいく
露葉風枝幾くの詩を受くるや

〈校異〉 結句「詩」は底本「詠」とするが、昭和本によつて改めた。

〈押韻〉 祠・詩（上平声四「支」韻）

〈語釈〉 ○歷渉Ⅱへわたる ○城南Ⅱ平安京の南。南山城をいう。 ○奇秀Ⅱめずらしくすぐれている。 ○梵宮Ⅱ仏寺。

○騷客Ⅱ詩人。 ○題詠Ⅱ前もって決めてある題によって詩歌を作ること。ここでは、「極楽寺の桜」を題にして詩を詠むこと。

〈詠〉 城南の優れた景色の地を經巡り、ここ極楽寺を訪ねると仏寺の雪とみまがう桜が神社の祠に映えている。古今の文人たちが極楽寺の桜を題に多く詩歌を詠み、この寺の露置いた葉や風ばめる枝はどれくらいの詩を授かったことか。

〈解説〉 中国にはサクラは無く、中国の古典詩では日本という桜は詠まれない。中国の漢詩に詠まれる「桜」は、シナミザクラ、ユスラウメのことである。〔何れの処の哀箏か急管に随う、桜花永巷垂柳の岸〕唐、李商隱、無題詩。日本の漢詩では、桜を日本というサクラを表すものとして詠み、現存最古の漢詩集「懷風藻」にすでに二首の桜を詠んだ詩がある。江戸中期以降桜の詩は多くなる。梁川星巖・藤井竹外・河野鉄兜の「芳野三絶」など吉野の桜を詠んだ詩がよく知られる。「極楽寺桜」と題して詩を詠むことが、そもそも和風の漢詩である。

二一四 同

列堂和尚

白櫻爛熳滿庭院

はくおうらんまんていゐん
白桜爛熳庭院に満つ

日炙霞蒸轉麗娟

ひあぶりあせむ うたれいけん
日炙り霞蒸し転た麗娟

唐苑昔時有所種

とうえんせきじこ しゆあ
唐苑昔時斯の種有らば

海棠何比貴妃眠

かいどうなん きひ ねむ
海棠何ぞ貴妃の眠りに比せん

〈校異〉 結句「眠」は底本「眼」とするが、昭和本によって改めた。

〈作者〉 列堂。寛永一二年（一六三五）～元禄一五年（一七〇二）、六八歳。臨濟宗の僧。大和国柳生藩の初代藩主柳生宗矩の子で、天佑紹果に入門し、京都の大徳寺にて出家、義仙、列堂和尚と称した。大徳寺二三八世。奈良市柳生、芳徳寺の第一世住持となる。

〈押韻〉 娟・眠（下平声一「先」韻）

〈語釈〉 ○爛熳Ⅱ爛漫に同じ。花が咲き乱れているさま。 ○霞Ⅱ二一の語釈参照。 ○麗娟Ⅱ漢の武帝に愛された宮女の名前で美しい女性の喩えにも用いられる。ここでは、はなやかで美しいの意。 ○海棠Ⅱバラ科の花の名。なやかな美人の形容に用いる。別名「睡花」。 ○貴妃Ⅱ楊貴妃（七一九～七八二）。唐の玄宗皇帝の愛妃。安祿山の乱時、官軍に殺された。

〔訳〕 白い桜花が寺の庭にみごとに咲き満ちる、日は差し霞は覆いますす美しさを増す。むかし唐の花園に桜の花があったならば、どうして海棠で楊貴妃の美しい寝顔をたとえただろうか（いやたとえなかっただろう）。

〔解説〕 転句・結句は、『冷齋夜話』の「海棠眠り未だ足らず」の故事を踏まえる。唐の玄宗が沈香亭に楊貴妃を召したところ、朝まだ早く貴妃はまだ目が覚めなかった。ぼんやりした顔つきで化粧を整えず、髪を乱して再拜も出来ない貴妃を見て、玄宗は笑って「豈に是妃子の酔うならんや、真に海棠の睡り未だ足らざるのみ」と言ったという。それを踏まえ詩は、中国にもし桜があったならば、美しい楊貴妃を海棠ではなく桜に喩えただろうにと結んでいる。

二一五 同

妙心寺 曇英座げん

繁花周市寺前櫻

はなかしうしうじぜん さくら
繁花周市寺前の櫻

春意相宜極樂名

しゆい あいよろ ごくらくの な
春意相宜し極樂の名

未必西方尋佛土

いまだ かならずしも さいほう
未だ必ずしも西方に仏土を尋ねずとも

琳宮寶樹異香生

りんきう ほうじゆい こうしやう
琳宮の宝樹異香生ず

〔押韻〕 櫻・名・生（下平声八「庚」韻）

〔語釈〕 ○座元Ⅱ一〇の語釈参照。

○繁花Ⅱたくさん咲いた花。たくさんさんの花。

○周市Ⅱめぐりまわる。市は、め

ぐる。

○春意Ⅱ春ののどかな心もち。春めく心。

○琳宮Ⅱ玉のように美しい家の意で、

熟語として道院・道観（道教の

寺）のことを言うが、ここでは極樂寺をいう。○宝樹Ⅱ珍宝の樹林。浄土の草木にたとえる。ここでは桜をさす。○異

香Ⅱ普通と異なったなんともいえないよい匂い。

〔訳〕 寺のあたりをたくさんさんの桜花が咲きめぐり、こののどかな春の心はまさに極樂の名にふさわしい。必ずしも西方にある極樂浄土を尋ねなくとも、この寺の仏土の珍しい樹のような桜から（極樂のごとき）よい香りが漂うことである。

〔解説〕 異香は、『往生極樂記』藤原義孝の条に「氣絶の後、異香生ず」とあり、瑞祥や阿弥陀仏の来迎の時に薫するものである。中世の仏教説話などにも例を見る。詩では極樂寺に香り咲く桜に、極樂往生へ導く花というイメージを含ませている。

二一六 同

鐵牛和尚

數樹白櫻映夕陽

數樹すうじゆの白桜はくおうせき夕陽しやうやうに映え

遊人絡繹醉吟狂

遊人ゆうじん絡繹らくえきとして醉吟すいぎん狂きやうたり

欄干望見春風程

欄干らんかんに望見ぼうけんすれば春風はるふうの程ほど

嘗怪六花飄碧蒼

嘗つねに怪あやしむ六花りつか碧蒼へきそうに翻ひるるかと

《作者》 鉄牛和尚。寛永五年（一六二八）〜元禄一三年（一七〇〇）、七三歳。一四歳で出家し、諸処を遍歴して長崎に行

き、渡来僧の木庵・隠元に教えを受け、宇治黄檗山万福寺の創建に関わった。下総の国（現在の千葉県）の椿海干拓に取り組み、完成させたことで知られる。

《押韻》 陽・狂・蒼（下平声七「陽」韻）

《語釈》 ○遊人Ⅱ花見の風流を楽しむ人。

○絡繹Ⅱつらなり続くさま。

○六花Ⅱ雪の異称。

《訳》 数樹に咲く白い桜花が夕陽に映え、花見に出た人がつらなり酔って吟詠をほしひまにしている。手すりにもたれて眺めると春風の吹くなを花が散り、雪が青空にひるがえっているかと見まがうことである。

二一七 同

竹軒木寅亮 木下平三郎

極樂精藍一望遐

極樂ごくらく精藍せいらん一望いちやう遐はるかなり

山櫻如雪又如霞

山櫻さんおう雪ゆきのごとく又霞またかすみのごとし

好將淨界菩提種

好よし淨界じやうかい菩提ぼだいの種たねを將もつて

栽作人間忠孝花

栽うえて人間じんかん忠孝ちゆうかうの花はなと作なさん

《校異》 初句「藍」は、底本「皿」の部分で「見」とするが、昭和本によって改めた。

《作者》 木下菊潭。寛文七年（一六六七）〜寛保三年（一七四三）、七六歳。竹軒は別号、寅亮は字、平三郎は通称。儒者。木下順庵（貞幹、七―七七参照）の次男。加賀金沢の藩儒。元禄五年から五代将军徳川綱吉につかえ、一二年から宝永六年まで近習番。享保三年、湯島聖堂の講師を務めた。

《押韻》 遐・霞・花（下平声六「麻」韻）

〔語釈〕 ○精藍Ⅱ精舎伽藍の略。寺院。 ○霞Ⅱ二一の語釈参照。 ○浄界Ⅱ穢れのない清浄無垢の境。寺院の境内をいう。 ○菩提Ⅱ仏教の悟りの境地、またその智。 ○人間Ⅱ人の世、世間。

〔訳〕 はるかに極楽寺を眺めやると、咲きほこる山桜は雪のようにもまた霞のようにも見える。よし、この清浄なお寺の菩提の種ともいえる桜を、人の世に植えて人々に忠孝の心を抱かせる花となそう。

〔解説〕 儒者である作者は、極楽寺に咲き菩提心の因縁となる桜を世に移植して、人々を儒教の説く忠孝の心に導く花としたいと詠んでいる。

二一八 同

僧正光性

霊場蹤古幾經春

霊場 古より幾たびか春を経し

爛熳櫻花蓋四鄰

爛熳たる桜花四隣を蓋う

極樂斯中來客競

極樂斯中來客競う

頓知香氣浴吟身

頓に知る香氣吟身に浴するを

〔作者〕 真如光性。天和二年（二六八二）延享元年（一七四四）、六三歳。東本願寺一七世。

〔押韻〕 春・鄰・身（上平声一一「真」韻）

〔語釈〕 ○蹤Ⅱ従り、に同じ。 ○四鄰Ⅱ四辺。あたり。 ○斯中Ⅱこのなか。斯は、これ・この、の意。 ○頓Ⅱとみに。

にわかに・すぐに。 ○香氣Ⅱよいにおり。二一五の「異香」に通ずる。 ○吟身Ⅱ詩を吟じる人。

〔訳〕 古来霊場である極楽寺は幾たびの春を経たことか、桜が鮮やかに美しく咲きあたりをおおっている。この極楽寺には競うように多くの人が訪れるが、寺に入るとすぐによい香りが詩を吟ずる身にふりかかるのを覚えたことだ。

二一九 同

實長

九品浄邦斯是境

九品の浄邦斯れ是の境

朱門玉殿映春霞

朱門玉殿春霞に映ず

重々寶樹潑觀想

重々たる宝樹深く觀想すれば

髻庭中萬朵花

髻ほうみつたり庭中ていぢゅう萬ばん朵花だはな

〔作者〕 未詳。昭和本に「大乘院」とある。

〔押韻〕 霞・花（下平声六「麻」韻）

〔語釈〕 ○九品くほん〓九品浄土の略。極楽浄土。 ○宝樹〓七重宝樹の略。極楽浄土にあるという七宝にかざられた木。ここでは極楽寺の桜樹をいう。

○観想〓あることに心を専念して迷情を除こうとする修行。ここでは浄土や仏の相好を想い描く観想念仏のことをいう。 ○髻ほうみつ〓ありありと目に見える、眼前に浮かぶこと。 ○万朵〓多くの花の枝。

〔訳〕 浄土の清らかな国はまさにこの境内にあり、朱色の門や玉のように美しい建物が春霞に映えている。幾重にも並ぶ極楽の宝珠のような木のもとで観念の修行に専心すれば、庭に咲き誇る万朵の花々がありありと目に浮かび、そのさまは極楽浄土をみるようである。

二一〇 同

園その儀ぎ同どう基もと福よし

色も香もさそな妙なる法の場に木末なからの花の手向は

〔作者〕 園基福。元和八（一六二二）年二月一六日生、元禄一二（一六九九）年十一月一〇日没、七八歳。公卿。園家一四代当主。儀同は、准大臣。貞享三年、従一位・准大臣となる。官位は従一位・准大臣。明正天皇・後光明天皇・後西天皇・靈元天皇・東山天皇と、五帝にわたり仕えた。靈元天皇の外伯父。

〔語釈〕 ○色も香も〓花などの色もかおりも。花の香といえ、和歌では梅、橘などを連想するが、ここでは桜のそれである。「色も香もおなじ昔にさくらめど年ふる人ぞあらたまりける 紀友則」（古今集・春・五七）。 ○さそな〓全くそのとおりだね。いかにも。まったく。 ○妙なり〓神秘的なほどにすぐれている。靈妙だ。「ならひこし妙なる法の花ゆゑに君

にとはるる身とぞ成りぬる 前大僧正聖忠」（新後撰集・釈教・六三〇）。法の場〓仏法を説く場。 ○木末〓こぬれ。梢。 ○手向〓神仏に幣など供え物をする。こと。ここでは桜の花を供え物とする。

〔訳〕 色も香りもまったく神秘的なほどに優れていることだ。この仏法を説く場である極楽寺に、梢についたままの手向けのごとく、みごとに咲いている桜は。

〔解説〕 「妙なり」は、仏教関係の文に用例を見、釈教歌にも『続拾遺和歌集』第一九、権大僧正乗雅の、「きえやすき我が

身にかへて尋ねみむたえなる法のみちしばの露」などの用例を見る。極楽寺の桜の美しさを表現する語としてふさわしいものといえよう。手向けは普通旅の安全を祈って捧げるものであるが、ここではお供え物の意である。幣は手づから神仏に捧げるものであるが、極楽寺に見事に咲く桜は梢についたままの手向けの幣のようだと見立て、そのみことな美しさを称えたのである。

二二一 かの国とこ、をさらでも花の庭

法橋昌純しやうしゅん 〈花・春〉

〈作者〉 里村昌純。連歌師。慶安二（一六四九）年生、享保七（一七二二）年二月八日没、七四歳。里村南家。昌程の子。兄弟に昌陸（一一一三参照）、周旋（五一一七参照）がいる。延宝三年から享保四年まで柳営連歌に出仕する。編著に連歌式目注釈書『拾螢抄』、『老の周諄くりご』、『里村家連集』などがある。

〈語釈〉 ○かの国＝彼の国。彼岸。極楽浄土。「おくれさきだち行くは彼の国 / 我よりも人のちからの渡し舟 救済」（菟玖波集）。 ○ここ＝此処。彼岸。ここでは「極楽浄土」と同じ名の極楽寺をいう。 ○さらでも＝そのようでなくても。

ここでは極楽浄土で無くてもこの意。 ○庭＝ここでは桜の咲いている極楽寺の庭。

〈訳〉 彼岸の極楽浄土と、此岸の極楽寺と同じ「極楽」ではなくても、極楽寺はその名にふさわしくみことな花の庭である。〈解説〉 極楽寺は、廻廊が周囲を覆い、中に堂宇が存在する構造の点で、山上の本殿と共通しており、この庭前において神事が行われるのはやはり山上と同じである。また、後の『八幡山名所案内記』によれば、「廊内数百の桜は八景之一」とし、多くの桜が植えられていた。

二二二 色や香かに九品こくのしななる八重桜

紹兆しやうちやう 〈八重桜・春〉

〈校異〉 底本は下五「八アキマ 桜」とするが、昭和本によって「八重桜」と校訂した。

〈作者〉 里村紹兆。別号、紹甫。連歌師。里村北家。紹巴—玄仲—玄祥—紹兆と代々続く。「元禄十二年正月十一日連歌御会」に一座する（一一一四、紹尹参照）。

〈語釈〉 ○九品＝くぼん。ここのしな。九種類。ここでは桜の風情がいろいろあるという意を、極楽寺に因んで仏教の九品往生などを効かせて用いた。九品とは、凡夫ぼんぷが生前に積んだ功德の違い、またそれに応じて異なる浄土往生の仕方の九種類

を言い、観無量寿經に説かれる。「よしあしの人を分かじと花はちす九しなまで咲きかはるなり 兼空上人」(新拾遺集・釈教・一四九六)。

〈訳〉 ここ極楽寺の八重桜は、九品往生よろしく、それぞれの色や香りがあり、趣のある風情である。

二一三 たのしきを植て桜や寺の庭

宗真 そうしん 〈さくら・春〉

〈作者〉 生没年等未詳。延宝ころから里村南家の昌純(二一一一参照)、由純(三一八参照)、惟中(三一六参照)らと連歌興行に一座している。

〈語釈〉 ○たのし〓楽しい。「楽しい」の「楽」は、極楽寺の「楽」を効かせる。また、「き」に桜の「木」をかける。

○桜〓「さくら」に「咲く」をかける。

〈訳〉 「極楽寺」の「楽」は楽しいという字である。その楽しい「木」の桜を植えて、満開になった姿は、まさしくここが極楽浄土であることを思わせる。そんな寺の庭であることだ。

〈解説〉 「楽」の字をめぐって頓知を働かせた句作りである。

二一四 つとめぬにいたるは花のところ哉

別峯山 さんけん 山彦 〈花・春〉

〈作者〉 「橋本行客」の漢詩に「別峯山 山彦座元」(七―八参照)とする。八幡に於いて「別峰」は、男山の西、平野山周辺をいうが未詳。

〈語釈〉 ○勤め〓仏道を修行すること。勤行。 ○至る〓極点に達する。行きつくこと。 ○ところ〓所。桜の花所で、極楽寺のこと。

〈訳〉 厳しい修行をしないうちに、たどり着いた所は、ここ桜の花所の極楽寺であった。まさに極楽浄土だ。

〈解説〉 本句は、次のような和歌などをパロディ化した。「極楽ははるけきほどときしかどつとめていたるところなりけり 仙慶法師」(拾遺集・哀傷・一三四三)。即ち、極楽浄土は遠く隔たった所にあると聞いているが、勤め(修行)をきちんとしないと至ることはできない所なのだ。ところが、本句は、その認識を逆転させ、機知的に捉え、ここ極楽寺は、その名の通り、勤めらしい勤めをしなくても極楽浄土に至るところなのだと言い立てた。このような突飛な発想は談林俳諧の好むと

ころである。同時に、自らの修行実践（自力）によって悟りを得ようとする「難行」に対し、仏の本願力によって浄土へ導かれるとする「易行」の教義（他力本願）に通じるか。法然や親鸞らの浄土教の広がりの中で、石清水八幡宮寺の一堂宇である極楽寺を舞台に、「易行」の立場を思わせる俳諧が生まれたことは示唆的である。

二一五 たぐへ見ん七重のうへ木八重桜

宗春（八重桜・春）

〈作者〉 西山宗春。連歌師。寛永一九（一六四二）年生、享保八（一二二三）年九月晦日没、八二歳。西山宗因の息。寛文一〇年、宗因薨髪後、大阪天満宮宗匠の家職を継ぎ、天満宮恒例の千句を再興する。連歌は里村南家の昌程門で、俳諧に手を染めることはなかった。編著に『連歌文字撰』『連歌仙三十六人』などがある。後の昌林編連歌発句集に宗因、宗春、昌察の『西山三籟集』がある。なお、宗春の呼びかけで句を寄せた者に昌札（六一一七参照）、惟中（三一一六参照）、宗吟（四一一八参照）、守之（八一七参照）、義真（七一八参照）、正俊（五一二〇参照）がいる。

〈語釈〉 ○たぐへる＝並ばせる。添わせる。「かさねては乞ひえまほしき移り香を花橘に今朝たぐへつつ 西行」（山家集・恋・五八七）。○七重のうへ木＝七重の植木。七重は、七つかさなること。転じて、山吹など花卉が多い花木の総称。また、「うへ」に「植え」と「上」を掛ける。上は、加えるの意。○八重桜＝八重咲きの桜で、花色は淡紅・紅など。大島桜、山桜などよりやや遅れて開く。ぼたんざくら。

〈訳〉 添わせて見たいものだ。七重の花木に加えて、八重桜を。

〈解説〉 「七重八重」の数字の重なりを花木、桜に用いて知的な句作りである。「七重八重花は咲けども山吹のみのひとつだになきぞあやしき 兼明親王（後拾遺集・雑・一一五四）。「いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重にほひぬるかな 伊勢大輔」（詞花集・春・二九）。「九重にみたらぬ物や八重桜 諸光」（毛吹草）。

二一六 桜にも夕栄ねかふ西日かな

重則（さくら・春）

〈語釈〉 ○夕栄＝夕映え。あたりが薄暗くなる夕方頃、かえって物の色などがくつきりと美しく見えること。夕陽の光をうけて美しくはえること。○西日＝西に傾いた太陽。夕陽。ここでは「西」に西方浄土を効かせる。

〈訳〉 桜にも凡夫にも夕陽を願う、そんな美しい西日であるよ。なぜなら、極楽往生を祈願する西日なのだから。

《解説》「西日」の「西」に西方浄土を効かせ、ここ極楽寺は、極楽浄土に通う名の付いたところであるから、桜も凡夫も浄土へ赴くことを祈願するのであると言い立てた。

二一七 これを見よ寶の植木花の庭

昌格 しょうかく 〈花・春〉

《語釈》○宝の植木＝極楽浄土にあるという宝のなる樹。また、それを模して飾り付けた造り木。「あだに散る花見るだにもあるものを宝の植木思ひこそやれ 花山院御歌」（続古今集・釈教・八一〇）。

《訳》これを見なさい。まさしく極楽浄土にある宝の木だ。極楽寺の庭は桜が見事に咲きほこっている。

《解説》本句は、花山院御歌を端的に俳諧表現としたものとみることができ。勿論、ここが極楽を体現した極楽寺であるとする暗黙の了解があることは言うまでもない。いずれにせよ、桜を仏法における宝とみなした。「これを見よ」の口語的な表現も俳諧的である。

二一八 引雲や佛の御手の糸桜 ひくも ほとけ みて

盛澄 せいじよう 〈糸桜・春〉

《語釈》○引雲＝雲が棚引いている様子。ここでは、阿弥陀如来などの仏が来迎するときの雲が、裾を引いている様子。

○御手＝仏の手の尊称。仏の指先から糸が出て、または五色の糸を持つともいわれ、凡夫を救うという、その御手。「御手」と「糸」は縁語。「南無阿弥陀ほとけのみ手に掛くる糸の終り乱れぬ心ともがな 法円上人（新古今集・釈教・一九二四）。

○糸桜＝枝垂れ桜。ここでは、「糸」に名号の糸（仏を奉るために用いる五色の糸）を掛ける。「糸」と「引」は縁語。

《訳》如来様をお連れくださる雲が裾を引いているように棚引く雲だ。御仏の手から放たれる糸のように糸桜が咲いているではないか。

《解説》古くから阿弥陀来迎図の中尊の手中から五色の糸を引き渡し、臨終の者がこの糸を握って西方極楽浄土に往生しようと呼ぶことが行われた。これを「糸引如来」と呼ぶ。金戒光明寺や禅林寺の来迎図にその例があり、文献では、応和四（九六四）年の延暦寺延昌の『日本往生極楽記』があり、その他に藤原道長（栄花物語）、建礼門院（平家物語）などがみられる。平安中期から来迎思想が儀式化し、迎接会や迎え講が行われ、また来迎図、迎接曼荼羅が浄土経美術として盛んに描かれるようになった。更に、仏と糸でつながることが願望とされるようになった。現在、本尊と五色の糸でつながるよう

にした堂宇が各地に数多見られる。

二一九 花の紐とく事安し法の場（のりば）

橋本主馬 秀信（しゅうしん） 〈花・春〉

〔作者〕 石清水八幡宮の神人に橋本氏がいるが未詳。主馬は馬寮の長官だが、ここでは通称。

〔語釈〕 ○花の紐とく＝花の蕾が開くこと。經典などの書物を開くお紐解きなどにたとえた表現。「もも草の花のひもとく秋の野を思ひたはむれ人な咎めそ よみ人知らず」（古今集・秋・二四六）。 ○とく＝解く。ここでは、法を「説く」の掛詞として使われている。 ○安し＝安らか。平穩なこと。 ○法の場＝のりのにわ。説教・法会、または仏法の修行などを行うところ。「春ごとになげきしものを法のには散るがうれしき花もありけり 藤原伊綱」（千載集・釈教・一二三九）。

〔訳〕 ここ極楽の名をもつ寺では、桜の花が咲いて安らかである。それもその筈、仏の教えが説かれ、悩みや苦しみが解かれる場なのだから。

〔解説〕 法は、仏教の教えを多義的に表した語彙である。法の雨は、仏法が衆生をあまねく教化して恵を与えることをいい、法の海は、仏法の広く深いことを大海にたとえていう。法の花は、蓮の花をさすが、ここでは極楽浄土に因む極楽寺に咲く桜に言い成した。現実には無いことを言い立てるのは、談林の句作りである。

二二〇 かゝる時神も御幸の花の庭（にわ）

直條（なおえだ） 〈花・春〉

〔作者〕 柏村直條。「はじめに」参照。

〔語釈〕 ○かかる時＝このような時期。ここでは桜の咲く時期をさす。 ○御幸＝行くことを敬つていう語。ここでは石清水八幡宮の神が行くこと。

〔訳〕 桜の咲く頃、それはまさしく神までもお出でになる。そんな極楽寺の美しい花の庭である。

〔解説〕 極楽寺は頼宮殿と並立する堂宇であった。神が御幸するのは、九月一五日の仲秋の名月の夜に執り行われる放生会の際であるが、極楽寺の庭に咲く花の美しさにひかれて八幡神がお出でになるという。神仏習合の宮寺であったことを再認識させてくれる。

二二二 同

なをさりに西のむかへをまたて今日名にあふ寺の花や見るらん
な おざり むかえ またで あう いちえい

《語釈》 ○なをざり〓深く心にとめないさま。本気でないさま。いいかげん。通り一遍。○西のむかへ〓西方浄土からの、

阿弥陀如来の迎え。「八十あまり西のむかへを待ちかねてすみ荒したる柴の庵ぞ 西日」(新古今集・雑・一六七〇)。

《訳》 通り一遍に西方浄土からの、阿弥陀如来の迎えを待たないでも、今日まさにその名の通りの極楽浄土の寺の花を見ることである。

《解説》 極楽寺という名を持つだけに、そこに咲く桜は浄土のもののようにであると賞美したのである。

二二三 同

ちぎり置く花もときわの色をみん寺は佛の国のひかりに
ちぎり ほとけ

宣阿
せん な

《作者》 香川宣阿。正保四(一六四七)年生、享保二〇(一七三五)年九月二日没、八九歳。名は景繼。通称は堯真。別号に梅月堂。周防国岩国藩士。延宝元(一六七三)年上洛。儒学を木下順庵(貞幹、七七七参照)らに、和歌を清水谷實業(四一一〇参照)らに学ぶ。なお、『八幡八景』では「大乘院鐘」に発句(八一・一六参照)が出る。二条家流の地下(清涼殿に昇殿が認められない人)の宗匠家梅月堂をおこし、有職、兵学にも通じた。著作に『草庵和歌集蒙求諺解』などがある。

《語釈》 ○ちぎり置く〓約束しておくこと。ここでは、毎年桜が咲くことを約束しているかのような意味。「ちぎりおく花とならびの岡のべにあはれいくよの春をすぐさむ」(兼好法師集・二〇)。○ときわ〓常盤。常緑樹の葉が、年中その色を変えないことから、永久に変わらないさま。○色〓風情。趣。○国の光〓仏の国、浄土の威光。

《訳》 約束をしているかのように毎年咲く桜もかわらぬ趣をみせるだろう。極楽寺は、仏の国、浄土の威光で光り輝いている。《解説》 和歌では、「契り置く」は男女の恋仲を言うこともあるが、釈教歌として、死後に極楽浄土の世界に行くことが約束されている意で用いられることも多い。この一首は、極楽寺では、咲く花が常盤のように常に(毎年)咲きほこっている

かの国をこゝにみ法の庭の面はらふ跡より花ぞ散しく

《作者》 柏村直條の母は、万武。寛永一七年二月二三日生、寛文二年九月八日没、二三歳。没時、直條は二歳、後に里村昌純に嫁す妹は一歳であつた。直條は「はじめに」参照。

《語釈》 ○かの国〓ここでは極楽浄土のこと。 ○こゝ、〓極楽寺。 ○み法の庭〓みのりのにわ。「みのり」に「見」るを

かける。説教、法会、仏法の修行などを行う場所。法場。「わしの山みのりの庭にちる花をよしののみの風の嵐にぞ見る 藤原良経」（秋篠月清集）。「男山秋のなかばののりの庭月はこの夜の光のみかは 有長朝臣^(ママ)」（夫木抄・卷二三・五一六六）。

○面〓情景。

《訳》 彼の極楽浄土をここ極楽寺の法場の情景に重ねて見ることよ。掃う後から後から桜の花が散り敷くなかに。

《解説》 極楽寺の庭に散り敷く桜の花の様子と「極楽寺」という名から、ここはまるで極楽浄土のようだと謳う。

説法のみやこなりとや花も猶かみのかみなる色に咲らん

《作者》 柏村直條。「はじめに」参照。

《語釈》 ○説法〓仏教の教法を解き明かすこと。 ○みやこ〓都。中心となる所。ここでは、極楽寺が説法の中心であるという。 ○かみのかみなる〓上代の昔。むかしむかし。 ○色〓興を添える趣。

《訳》 ここ極楽寺は、説法の中心となる所だという。それ故に、桜の花もやはり上代の昔から変わらず趣深く咲いているのだろう。

《解説》 極楽寺が説法の間として長く存続することを誇りとし、それにふさわしい風情で桜も咲き続ける様子を謳い上げた。極楽寺と桜を並べて華やかに祝す一首。「かみ」を重ねることで、眼前の景に時間の深まりを添えている。

第三景 猪鼻坂雨

猪鼻坂雨解題

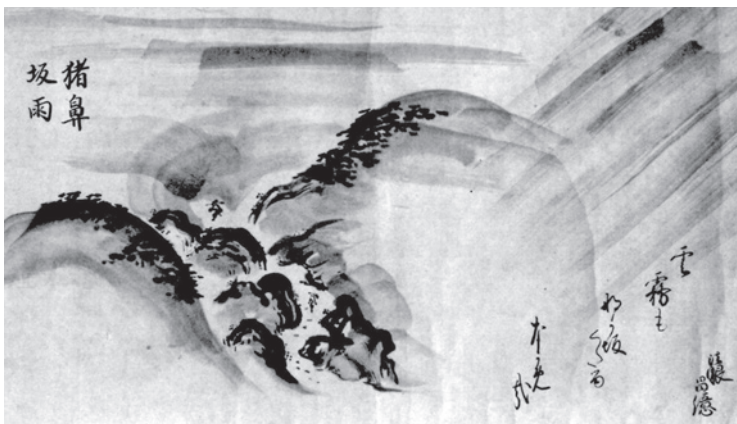
『考古録』巻九に「猪鼻坂」の項目があり、「二鳥居より上神幸橋を渡す谷迄の少北より西に登る坂路をいふ、古道なり（中略）其形猪の鼻に似たる故に斯名付く」とある（表紙・裏表紙の「八幡山案内絵図」参照）。旧暦八月一日に催される放生会の際、神輿を下らせたとある。但し、急坂なので、神輿を打ち落したり、御綱が切れたりすることもあったともいう。また、江戸時代になって復活した安居神事に際し、宝樹である松を荒菰に包み、人夫に担がせたり綱で引いたりして、「笛鼓の囃風流を盡して曳進む、此巖の狭間を攀登る」とあり、「危き事古道故に大坂在と雖も改めすと云伝ふ」ともある。「大坂」という広い坂道があるが、神事においては猪鼻坂を使用したということである。「南都八景」の「雲居坂雨」は、猪鼻坂同様に急坂で難所であったということである。藤原為重の歌に、「村雨の晴れ間に越えよ雲居坂三笠の山はほど近くとも」とある。

『考古録』猪鼻坂の項に、『八幡八景』の勘解由小路韶光の漢詩と中御門資熙の和歌が紹介されている。

「雨」は歌材として『万葉集』以来数多く詠まれ、春雨・五月雨・夕立・長雨・時雨など四季とりどりの雨の題に分かれている。また、連歌俳諧も同様である。

漢詩においても、李嶠の「雨」（和漢朗詠集）などが、玄宗皇帝の龍池とともに知られる。

長楽鐘声花外尽 長楽の鐘の声は花の外に尽き
龍池柳色雨中深 龍池の柳の色は雨の中に深し
漢詩九首、和歌七首、発句一〇句が撰集される。



『発句絵巻』

三― 猪鼻坂雨

勘解由小路 韶光

午鳩呼罷日朦朧

午鳩呼罷みて日朦朧たり

石磴荷來蓑笠風

石磴に荷來たり蓑笠の風

一雨山頭又山脚

一雨山頭又山脚

依然畫棟挿晴空

依然として画棟晴空に挿す

《作者》 勘解由小路韶光。寛文三年（一六六三）―享保一四年（一七二九）、六七歳。公卿。烏丸光雄の子。参議勘解由小路資忠の養子となる。正二位権大納言。

《押韻》 朧・風・空（上平声一「東」韻）

《語釈》 ○鳩＝八幡宮ゆかりの鳥であり、鳩は八幡神の神使である。

○朦朧＝うす暗く、今にも雨が降りそうなさま。

○石磴＝石の坂。石段。 ○一雨＝ひとあめ。雨が一降りすること。

○山頭＝山の頂上。 ○山脚＝山の麓。 ○画棟＝

彩色した棟木。 ○晴空＝はれた空。晴天。青天。

《訳》 昼の鳩が鳴き止んで日はうす暗くなり、風のなか石道を蓑と笠をつけた人が荷を運んでくる。山の上から山裾まで全山を雨がひと降りしたが、雨が止みまたものごとく神社の彩色した棟木が青空に挿したように美しく映える。

三― 同

前相國紹珉

猪鼻坂頭崖壁幽

猪鼻坂の頭崖壁幽かなり

陰雲漠々礙雙眸

陰雲漠々双眸を礙く

西風呼起脩然雨

西風呼び起こす脩然の雨

一洗行人慰暮愁

一洗し行人暮愁を慰む

《校異》 転句「脩然」は、底本「脩然」とするが、昭和本によつて改めた。

《押韻》 幽・眸・愁（下平声一「尤」韻）

《語釈》 ○頭＝あたり、そば。 ○陰雲＝暗い雲・雨雲。

○漠々＝雲が一面にたれこめて薄暗いさま。

○礙＝さまたげ

る。 ○脩然＝はいさま、にわかであるさま。 ○一洗＝残らず洗いますぐ。

〔訳〕 猪鼻坂のあたり壁のように切り立つ崖はうす暗くなり、雨雲が一面にたちこめ視界をさえぎる。西風が誘い雨がざつとひとしきり降り、あたりを洗いすぐように雨が止むと旅人は夕暮れの愁いを慰めることである。

三三 同

前臨川等院

溪聲奏樂宮商響

けいせい がく そう
溪声樂を奏し宮商響さ

雨脚過山水畦霑

うきやく ま
雨脚山を過ぎて水畦霑う

輦路今猶緑陰茂

れんろ いまなおよりいんしげ
輦路今猶緑陰茂り

靈鳩呼友幾涼炎

れいきゅうとも
靈鳩友を呼びて幾ばくか炎を涼す

〔押韻〕 霑・炎（下平声一四「塩」韻）

〔語釈〕 ○宮商Ⅱ五音（宮・商・角・徵・羽）の中の基本となる宮・商の音。転じて音楽。○雨脚Ⅱふりそそぐ雨。

○水畦Ⅱ水田。○輦路Ⅱ帝の乗り物が通る路の意だが、ここでは八幡神の神輿の通る猪鼻坂。○靈鳩Ⅱ靈妙不思議な鳩。

八幡神の神使であるゆえにいう。

〔訳〕 谷川が音楽をかなでるように響いて流れ、雨が山を通り過ぎて水田は潤う。神輿の通る猪鼻坂は今もなお樹木の陰が深く、靈妙な鳩が友を呼びいくばくか暑さが収まり涼しさを覚えることだ。

三四 同

心嶽和尚

雲横坂路雨凄々

くも はんろ
雲は坂路に横たわり雨凄々

山北水南望更迷

さんぼくすいなんのぞ
山北水南望めば更に迷う

待月誰來上方寺

つき ま
月を待ちて誰か上方の寺に来たる

蓑衣樵子下前溪

さい しゅうしぜんけい
蓑衣の樵子前溪を下る

〔作者〕 心嶽宗欽。寛永一五年（一六三八）～元禄二年（一六九八）、六一歳。大徳寺二四六世。

〔押韻〕 凄・迷・溪（上平声八「齊」韻）

〔語釈〕 ○凄々Ⅱ寒々しいさま、さびしくいたましいさま。○上方寺Ⅱ山寺。

〈訳〉 雲は猪鼻坂に横たわり雨が寒々と降り、北の山南の川を眺めても景色が分らないほどである。夜になり雨が上がり月の昇るのを待つて誰かが山寺に來たのかと思うと、蓑を着た木樵が前の谷を降りてゆくのであった。

三一五 同

鵬天座元

雨満山腰猪坂長

雨は山腰に満ちて猪坂長し

何人著屐度青蒼

何人か屐を著けて青蒼を度らん

祇看雲霧冥々處

祇だ看る雲霧冥々の処

盤折藏為黑面郎

盤折に藏るるは黑面郎為り

〈押韻〉 長・蒼・郎（下平声七「陽」韻）

〈語釈〉 ○山腰Ⅱ山の中腹と麓とのあいだ。山の腰。

山や道路の曲がったさま。 ○黒面郎Ⅱ猪の異名。

○屐Ⅱ底に齒のついた下駄状の履物。

○青蒼Ⅱ天。空。

○盤折Ⅱ

〈訳〉 雨は山の腰に満ちて猪鼻坂は長く続いている、いったい誰が下駄を履いて空を渡ることができようか（いやできはしない）。雲や霧が立ち込め辺りがただ薄暗く見えるところ、曲がりくねった坂道に猪が潜んでいる。

三一六 同

震旦沙門雪應和尚

飄然勝槩擁神宮

天然の勝概神宮を擁し

能首遺形八景中

能く首ず形を八景の中に遺す

雲雨似巫猶不定

雲雨巫に似て猶定まらず

瀟々永夜和松風

瀟々として永夜松風に和す

〈押韻〉 宮・中・風（上平声一「東」韻）

〈語釈〉 ○震旦Ⅱ梵語の音訳。秦の地の意味。中国のこと。

○勝概Ⅱすぐれた趣き、よい景色。

○巫Ⅱ巫山のこと。中

国四川省の山で、付近を長江が流れ舟旅の難所「巫峡」がある。『文選』宋玉の「高唐賦」に記す「巫山雲雨」の故事が名高い。楚の懷王が夢に巫山の神女と契ったが、神女が去るに臨み、自分は巫山の辺りに住み、「旦には朝雲となり、暮には

行雨となる」と語ったという。○瀟々^{しやうしやう}雨がさびしく降る様。○永夜^{えいや}秋や冬の夜のように夜のながいこと、またそのような夜。

〔訳〕猪鼻坂からの眺めは天性の勝れた景色が神社をまもり、八幡八景のなかでもまず第一にあげられよう。雲雨の立ち籠める様子は巫山のように変化定まりない、この長い夜に雨がさびしく降り松籟にまじることである。

〔解説〕巫山は長江の舟旅の難所である三峡のひとつ巫峡の近くにある。高く聳え、険しい巖が重なり、天日を隠すという。詩は、『文選』所収宋玉の「高唐賦」を踏まえ、雲が垂れ込め雨に煙る猪鼻坂の様を、雲雨に暗く変幻極まりない巫山の様子にたとえる。

三十七 同

雨過男山泥路長

あめ おこやま す
雨は男山を過ぎ泥路長く

崖煙谷霧暗羊腸

がい えんくわ ようちようくら
崖煙谷霧暗羊腸暗し

赤猪鳴鼻一軍亂

せきぢよはな な
赤猪鼻を鳴らし一軍乱れ

嚙却播州麿坂王

ばんしやうかこさかおう
播州麿坂王を嚙却す

〔作者〕小野必大。寛永一九年（一六四二）〜元禄一四年（二七〇一）、六〇歳。中国風に野必大とも名乗った。人見姓を通称とした。江戸前期の本草学者、食物研究家。幕府の侍医随祥院元徳の子。食物本草の書『本朝食鑑』（一六九七）を刊行した。

〔押韻〕長・腸・王（下平声七「陽」韻）

〔語釈〕

○羊腸^{やうちよう}路がまがるくねるさま。○麿坂王^{かごさかのおうじ}麿坂皇子。仲哀天皇の皇子。『日本書紀』、『古事記』（香坂王）に記

述がある。麿坂王は仲哀天皇の死後、神宮皇后が後の応神天皇を生んだため皇位をめぐって対立した。王は同母弟の忍熊皇子とともに播磨で兵を集めるが、勝敗を占う狩のときに突然赤い猪に襲われて殺された。

〔訳〕雨は男山を過ぎて泥の路が長く続き、崖に煙が谷に霧が立ち籠めて曲がりくねった道はうす暗い。その猪鼻坂の景色を見ると赤い猪が鼻を鳴らして現れ一軍が乱れ、播州の麿坂王を嚙んで退けてしまった故事が思われることである。

〔解説〕男山八幡宮は皇室を守護する社である。作者は「猪鼻坂」の名から、神功皇后を殺害しようとした麿坂王を襲い食い殺し、皇室を守った猪を連想した。

野必大^{やひつだい}

三―八 同

海靈座元かいれいざげん

風翻石燕雨縱橫

かぜ せきえん ひるがえ あめ
風は石燕を翻し雨は縱橫

萬壑雲凝天未晴

ばんがくも てんいま は
萬壑雲凝りて天未だ晴れず

舊是秋來神幸路

むこれあらいしんこう みち
旧是秋來神幸の路

黃塵洗盡滿山清

こうじん あら まんざんきよ
黃塵洗い尽くして滿山清し

〔押韻〕 晴・清（下平声八「庚」韻）

〔語釈〕 ○石燕＝燕に似た模様がある石。風雨にあえばよく飛ぶという。ここでは、風に軽々と飛ぶ石を石燕に喩える。

○壑＝谷。 ○秋來＝秋。來は語末にそえる助字。 ○神幸＝神がお出かけになること。ここでは、放生会の際に猪鼻坂を

神輿が下ることをいう。和語。 ○黃塵＝黄色の土ほこり、土けむり。俗世を象徴する。

〔訳〕 風は石を飛ばし雨が横に斜めに激しく降る、谷という谷には雲が集まり空はまだ晴れない。古來猪鼻坂は秋に神輿が
お通りになる路であり、雨は俗世の土埃をすっかり洗いつくし山全体が清々しい。

三―九 同

圭杜多けいとた

山雨淒涼猪鼻寒

さんうせいりやう いのはなさむ
山雨淒涼として猪鼻寒し

怪岩奇石霧中蟠

かいがんきせき むちゆう わだかま
怪岩奇石霧中に蟠る

濕衣險滑頻來往

しつゐけんかつしき らいおう
濕衣險滑頻りに來往するも

神在德高不路難

かみあ とくたか みちかた
神在り德高くて路難からず

〔作者〕 未詳。昭和本に「圭瑞應 豊之月桂寺」とある。

〔押韻〕 寒・蟠・難（上平声一四「寒」韻）

〔語釈〕 ○淒涼＝ものさびしい。つめたい。 ○怪＝「怪」の俗字。

〔訳〕 山に降る雨はものさびしく猪鼻坂は寒い、奇妙な形の岩や石が霧の中にいすわる。濡れた衣で險しく滑りやすい坂を
人々がしきりに行き來するが、神の德は高くその恩恵を受け行路を難しとしない。

三一〇 同

中御門資熙

岩根^{いわね}ふむ猪のはな坂^{さか}にふる雨は神^{かみ}の御幸^{みゆき}の道やきよむる

〔作者〕 中御門資熙。寛永一二（一六三五）年二月二六日生、宝永四（一七〇七）年八月二一日没、七三歳。正二位。権大納言をへて、元禄六年議奏。霊元天皇の信任を得たが、元禄一二年東山天皇に罷免された。

〔語釈〕 ○岩根踏む＝進み行くに険しい様子。岩根は、地面に根を下ろしたような岩。「岩根ふみかさなる山をわけすて花もいくへの跡の白雲 藤原雅経」（新古今集・春・九三） ○御幸＝上皇、法皇、女院などの外出。なお、天皇のそれは「行幸」と表記する。ここでは神の御出をいう。

〔訳〕 岩を踏んでゆくような険しい猪鼻坂に降る雨は、神様のおでましの道を清めようとしているのか。

三一 雲霧もなか坂^{なかがさか}くたるなかめ^{ながめ}かな

法眼昌億^{しやうおく} 〈霧・秋〉

〔作者〕 里村昌億。また、瀬川氏。連歌師。万治三（一六六〇）年生、享保一一（一七二六）年二月二四日没、六七歳。里村南家。昌陸（一一一三参照）の嫡男。初め、昌頓、昌敦、天和元（一六八一）年、昌億に改める。元禄八（一六九五）年に家を継ぐ。元禄一〇年、法眼に叙せられる。

〔語釈〕 ○雲霧も＝雲や霧も。「も」に「ながめ」に掛けた「長雨」や猪鼻坂を放生会の際には下る鳳輦（神輿）を含める。○なが坂＝長坂。猪鼻坂は難所なので「長」とした。「なが坂」の「なが」と「ながめ」の「なが」を繰り返して、リズム感がある表現。○くだる＝坂を「くだる」と、雨が降るの意の「くだる」を掛ける。また、猪鼻坂が放生会の際、鳳輦を担ぎ降りる坂であることを踏まえれば、それも「くだる」のである。○ながめ＝眺め。「長雨」^{ながめ}を掛ける。

〔訳〕 雲や霧も、そして、長雨も、放生会の際には鳳輦もこの長い坂にそって下り降りる眺めである。

〔解説〕 「ながめ」が眺めと長雨を掛けていることは、和歌の伝統をふまえたものである。そして、雨の降る情景だけでなく、猪鼻坂が放生会の際、鳳輦を担ぎ降りる坂であることから、それも下る、そんな眺めである、と感慨深く詠む。

三一二 雲^{のほり}のほり春雨^{くたるとる}たる御坂^{みさか}哉

昌坪^{しやうへい} 〈春雨・春〉

〔作者〕 瀬川昌坪。連歌師。生年未詳、宝永五（一七〇八）年没。初名は時伯。号は朽檣軒。瀬川昌佐の孫。時春（六一一六

参照)は子。延宝二(一六七四)年、幕府に出仕。元禄二(一六八九)年から柳営連歌の第三をつとめ、法橋となる。著作に「道の枝折」「連句註釈」など。また、元禄一四年四月一二日興行の里村紹巴(北家)百回忌追善「三吟之千句」に、紹山(四一―一六参照)、其阿(八一―一五参照)と同座する。

《語釈》 ○春雨Ⅱ春の季節に静かに降る雨。春の芽吹きを促し、生命の再生をもたらす慈雨。また、国土を潤す雨。「大空にあまねくおほふ雲の心国つちうるふ雨くだす也 京極為兼」(風雅集・雑・一六八七)。○のぼるⅡ上る。昇る。登る。雲がのぼると坂をのぼるとを掛ける。○くだるⅡ下る。降る。春雨が降るの意の「くだる」と、坂を「くだる」とを掛ける。○御坂Ⅱ猪鼻坂のこと。敬意を表す表現になっているのは、猪鼻坂が放生会の際には鳳輦が往復し、安居会では松の宝樹を担ぎ上げるなど、神事に関わるからである。

《訳》 雲は上り、その雲が春雨となって降り下り国土を潤す。そんな御坂であることだ。

《解説》 雲は上り、雨は下るという対比表現に猪鼻坂を上り下りすることを掛ける俳諧的な趣向がみられる。

三一三 雨に猶日も長坂のあゆみかな

安重 あんちゆう 〈日永・春〉

《語釈》 ○日も長坂Ⅱ「日も長」いの日永と「長坂」の猪鼻坂とを掛ける。「長」という表現から、放生会の歴史的な「あゆみ」を想起させる。○あゆみⅡ物事の運び。ここでは、放生会の神事を重ねてきた歴史を意図している。

《訳》 日永で春の一日が長く思われるのに、雨によって一層長く思われる一日、猪鼻坂を歩み、歴史を重ねた放生会に思いが至ることだなあ。

《解説》 応仁、文明の乱によって中断した放生会が、約二〇〇年を経て、霊元天皇の延宝七(一六七九)年に再興され旧儀に復した。この放生会の歴史的な歩みを感慨深く詠んだ。

三一四 坂越る脚音遠し春の雨

林山 りんざん 〈春の雨・春〉

《語釈》 ○脚音Ⅱ足音。「雨脚」を響かせる表現。

《訳》 猪鼻坂を登り、坂を越える足音が遠くなった。柔らかな春雨によって足音が小さくなったのである。

《解説》 猪鼻坂を越える人の歩みを、足音の聴覚で表現したところが一句の趣向である。

三一五 音す、し坂越かゝる雨の足

梅雪 〔すゞし・夏〕

〔語釈〕 ○音Ⅱ雨音。雨が降る音で、省略した表現。 ○すゞしⅡ暑苦しくなくて気持ちがいい様子。雨が降って、雨音までも涼しい。雨と猪鼻坂を評価する気持ちを含ませる。「おのづから涼しくもあるか夏衣日も夕暮れの雨のなごりに 藤原清輔」(新古今集・夏・二六四)。 ○かゝるⅡ動作・作用が始まりそうになること、また、始まってその途中である様子。「暮れかかるむなしき空の秋をみておぼえずたまる袖の露かな 藤原良経」(新古今集・秋・三五八)。 ○雨の足Ⅱ雨足。雨脚。雨が降りながら通り過ぎていくこと。「越かゝる」から「足」とした。

〔訳〕 雨の音がすがすがしく聞こえ、涼しい。猪鼻坂を越えようとした辺りで降る、そんな雨である。

〔解説〕 「雨の足」は、杜甫、白居易などの唐詩に用いられる「雨脚」を日本で訓読したもの。中古に至り仮名文字で「あめのあし」とした。菅原道真の『菅家文草』の「八月十五日夕待月」にある「金輪の碧虚を度るを見ず、雨脚念々雲族々」の「雨脚」は雨が強く、頻りに降る意味であるが、後の「あまあし」は、もっぱら雨の降る様子に限られる。

三一六 坂越て白雨しらぬ夕日かな

惟中 〔白雨・夏〕

〔作者〕 岡西惟中。初め、松永氏。寛永一六(一六三九)年生、正徳元(一七一)年一〇月二六日没、七三歳。幼名、平吉。別号、一時軒など。因幡国鳥取の士族の家に生れる。俳諧の初出は明暦四(一六五八)年刊『鸚鵡集』。以後、一雪・維舟(重頼)・立圃らの撰集に入集。宗因流俳諧の自由奔放な滑稽精神と奇抜な寓意的表現の正当性を主張した。延宝六(一六七八)年、大坂に移居。宗因(梅翁)・西鶴・任口らと交流した。特に、宗因の子、宗春(二一五参照)に親しい。和歌、連歌、漢詩、書道などに通じるが、儒学は林羅山の孫弟子である。なお、林信篤(一一七参照)は羅山の孫である。

〔語釈〕 ○白雨Ⅱしらさめ。はくう。夕立。俄雨。驟雨。「白雨しらぬ」の擬人的表現も俳諧的であるが、雨が降ったのを「知ら」ぬといい、ざっと強く降る雨が白く見えることから「白」を掛けて言葉のしやれを楽しみがある。夕立の降り方は、強く、短時間に通り返るのが特徴である。「夕だちの手がらは水のきれめ哉 重方」(毛吹草、以下同)「夕だちは道化ぶりたる天気哉 貞盛」「夕立の足やいつくも達者ぶり 作者不知」。

〔訳〕 猪鼻坂を越えるとそれまでの夕立が嘘のように晴れ上がり、夕日を見ることだ。

〔解説〕 地形的に見て、猪鼻坂は男山の東側にある。その坂を越えると、夕方であれば西日を拝める位置に立つことになる。

極楽浄土が西方にあることを想い浮かべ、「日想観」なる修行を行う場となるのである。

三一七 誘はれて一坂すゝし雨のあし

恒道 〈すゝし・夏〉

《校異》 底本は上五「誘われて」とするが、昭和本によって改めた。

《語釈》 ○一坂Ⅱ一は、この辺り一帯の意味。猪鼻坂一帯。

《訳》 誘われてやって来た猪鼻坂一帯は、雨が降って涼しいことだ。

《解説》 梅雪の句（三一五）と同様の「すゝし」「雨のあし」を用いた句。梅雪に誘われたか。暑くて空気が乾いた折など一雨くれればよいと思うことがある。猪鼻坂は急坂で、雨が降ると難儀をするが、この度は涼しさと清々しさを得るとした。

三一八 はや暮て一坂遠し秋の雨

由純 〈秋の雨・秋〉

《作者》 黒川由純。生没年等未詳。里村昌純（二一一参照）門。また、風早實種（二一九参照）らと関係した以下の連歌がある。延宝四（一六七六）年「連歌難陳判」に由純難、兼寿陳、實種判。「元禄二年六月十三日阿形順的会」漢和百韻に由純、昌純等同座。「昌純三近等漢和百韻」に由純同座。

《訳》 早くも日が暮れたのに、猪鼻坂は難所でなかなか進めない。さらには秋の雨の降り続いていることだ。

《解説》 「日暮れて道遠し」という慣用句がある。『史記』の「伍子胥列伝」の「吾、日莫れて途遠し、吾、故に倒行して之を逆施す」による。日は暮れたのに、前途の道のりはまだまだ長いが、何がなんでも急ぐということはない、の意。「徒然草」には「一生は雑事の小節にさへられて、空しく暮れなん。日暮、塗遠し」とある。由純は、この慣用句から「道」を「坂」に取りなして句作りをした。

三一九 登る日に豊坂下る時雨哉

道守 〈時雨・冬〉

《語釈》 ○登るⅡ日がのぼる。「豊坂下る」と対比したあしらい表現。○豊坂Ⅱ「豊栄」に掛けて猪鼻坂をいう。豊栄は、太陽がのぼり美しく輝くさま。また、石清水八幡宮が豊かに栄えることを寿ぐ。「曇りなくとよさか登るあさひには君ぞ仕へん万代までに 源俊頼」（金葉集・賀・三三三）。

○下る＝坂をくだる、おりる。時雨が降るの意の、「くだる」を掛ける。○時雨＝山に囲まれた地域の通り雨で、京都で生まれ、完成した美意識である。降りみ降らずみの降り方からは、定めなき世、無常を象徴するが、この句の時雨は、季節のあしらい。「神無月降りみ降らずみ定めなき時雨ぞ冬の初めなりける 詠み人知らず」（後撰集・冬・四四五）。「世にふるもさらにしぐれのやどりかな 宗祇」（新撰菟玖波集）。「笹の葉に西日のめぐる時雨かな 才麿」（婦多津物）。

〔訳〕 登る日は光り輝き、豊坂の猪鼻坂には時雨が降りくだることだ。

〔解説〕 「登る」と「下る」の対比表現に趣向がある。また、「豊坂」に「豊栄」を掛ける工夫が見られる。神事をなす猪鼻坂は「豊坂」であると同時に「豊栄」である。

三一〇 ぬれて行ん坂も雲居の花の雨

直條 〔花の雨・春〕

〔作者〕 柏村直條。「はじめに」参照。

〔語釈〕 ○雲居＝遠く、または高く離れた所。ここでは、猪鼻坂を登り切った男山の頂。○花の雨＝桜に降り注ぐ雨。桜の咲くころに降る雨。また、桜の花が散る様子を雨に見立ていう。「花の雨」は、延宝二（一六七四）年の『俳諧桜川』に春の題として出るが、近世前期の用例は少ない。「ねぶらせて養たてよ花のあめ 貞徳」（犬子集）。

〔訳〕 濡れて行こう。猪鼻坂も男山の桜も濡らしている花の雨の中を。

三一 同

公文所 法眼院卓

等閑のなめならず猪の鼻の坂にふり来る村雨のそら

〔作者〕 紀院卓。公文所は、石清水八幡宮の公的文書を扱う役所。紀氏は代々これを司った。

〔語釈〕 ○等閑＝深く心にとめない様子。かりそめ。いい加減。○村雨のそら＝村雨は、叢雨。にわか雨。夏にわかに激しく降ったり弱く降ったりすることが多い。「晴れゆくかただよふ雲の絶間より星みえそむる村雨のそら 宮内卿」（玉葉集・雑・二二八一）。

〔訳〕 猪鼻坂に降るにわか雨の空は、かりそめのいい加減な眺めではありませんよ。

〔解説〕 猪鼻坂は、放生会の鳳輦を下らせる神の道であり、等閑な所ではなく、そこに降る雨もまた等閑にはできないのである。

三一二二 同

長治

峯^{みね}高^のくのほる袂^のぬる、かな猪の鼻坂の^{あき}焔のむら雨

〔語釈〕 ○のほる〓ここでは男山の峰へと登る。「のほるべき跡をぞ祈る男山うづもれはつる峰のしら雪 前中納言有光」
〔新拾遺集・神祇・一四〇〇〕。

〔訳〕 男山の高峰へと登る折の猪鼻坂では、秋の村雨に袂を濡らすことよ。

〔解説〕 袖に降る時雨は、和歌では物思いに沈むこと。ここでは、袂が村雨に濡れるとし、猪鼻坂を登る景とした。昭和本では、「むら雨」を「急雨」と表記しており、猪鼻坂の急斜面の気分が出ている。

三一二三 同

光重

かきくもり雨ふり下る猪の鼻の岩^{いわ}ほの^{こけ}苺の緑添^{そい}行

〔語釈〕 ○かきくもる〓空が急に暗くなる。曇ること。「月夜には来ぬ人待たるかきくもり雨も降らなんわびつつも寝んよみ人知らず」(古今集・恋・七七五)。 ○岩ほ〓巖。大きな岩。「わが君は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで よみ人知らず」(古今集・賀・三四三)。 ○苺〓「苺」は「苺」に通じる。「苺」には「こけ」と「いちご」の意味がある。ここでは苔の意味。 ○添ふ〓つけ加わる。増して、多くなる。

〔訳〕 空が急に暗くなり雨が降るとともに鳳輦が下る猪鼻坂には、巖の苔の緑がますます増してゆくことだ。

〔解説〕 猪鼻坂は、放生会の鳳輦が下る坂道であった。そこに雨が降ると、巖の苔の緑が増す。石清水の威光もますます増すのである。

三一二四 同

光良

ふみなれて岩^{いわ}ほさかしき猪の鼻の雨にも仕^{つかう}ふ神^{みやびと}の宮人

〔校異〕 初句は底本に「路なれて」とするが、昭和本によつて改めた。

〔語釈〕 ○なれる〓慣れる。たびたび行なつてそのことに慣れること。

○仕ふ〓仕える。目上の人のそばにいて用をする。

○さがし〓険し。山や坂がけわしい。険阻である

〔訳〕 岩の坂の険しい路だが、踏みなれて、雨が降ろうとも神に仕える宮人であることだ。
〔解説〕 猪鼻坂は鳳輦が下るところであれば、雨の中でも奉仕する心構えであると詠む。

三一二五 同

直成なおしげ

雨にたにはこふ歩みはるの鼻の榮行神のめくみをやる

〔作者〕 柏村直成。真直まな。貞享四年三月九日生。直條の長子。江戸に遊学する。会疑堂と号する。

〔語釈〕 ○だに＝さえ。 ○榮行＝「雄徳山松」――一二語釈参照。当該の三句、四句は、「猪鼻の坂」と「榮行く」の

「さか」を掛けている。 ○しる＝知る。体験する、感じる。

〔訳〕 雨のなかでさえ猪鼻坂をゆくこの歩みに、猪鼻坂の「さか」ではないがますます榮える神の恵みを知ることだろうか。

三一二六 同

直條なおえだ

なへて世にうるをふ民も石清水るの鼻の雨に天を見ん

〔作者〕 柏村直條。「はじめに」参照。

〔語釈〕 ○なべて＝並べて。総じて。「なべて世のはかなきことをかなしとはかかる夢みぬ人やいひけむ」（建礼門院右京大夫集・二二二）。 ○うるをふ＝うるほふ。潤う。底本は「うつろふ」を墨書き訂正する。

〔訳〕 総じて雨が降ると田畑に水が行き渡り潤う民であるが、石清水の急な猪鼻坂で雨にあうと、思わず天を仰いでしまうよ。
〔解説〕 猪鼻坂は、急な坂道なので、雨が降ると足元が滑りやすく、通行が困難になるのである。『南都八景』の「雲居坂雨」でも同様の趣向である。

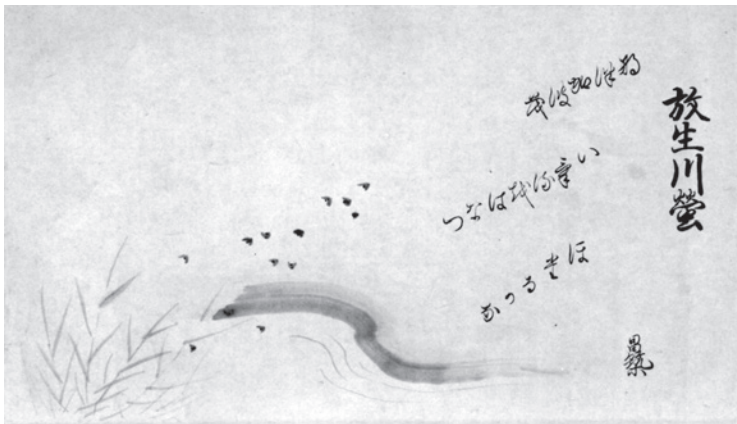
霹靂へきれきたる毛鞭もうへん井底せいていの龍 時に乗じて変化へんげし雲と従う 文章博士菅原秀長朝臣

村雨の晴れ間に越えよ雲居坂三笠の山は程近くとも 権中納言 藤原爲重

第四景 放生川蛭

放生川蛭 解題

放生川について、『考古録』巻二一には、「中世已来専放生河と称するは、今云上ハ飼屋橋より、下ハ全昌寺前の石橋迄の中間をさせり、東照神君一社へ被^{（徳川家康）}成下^二御條目に、霊地とさへ被^三仰渡^二て、猶浚へ申べきの旨、其式の第一条に挙給へるも、深御慮の被^レ為^レ在事也」と記す。すなわち、放生川は、飼屋橋から石橋（全昌寺橋とも）の間、（表紙・裏表紙の「八幡山案内絵図」には一部がみえる）、その間約五百メートルを流れる川を指し、徳川家康が石清水八幡宮に命じた条目に、この川は霊地ゆえに、川浚えを第一義にすべき事を命じ、それは神慮によるものだとしている。天下泰平を祈る放生会を行う神聖な川であることを、徳川將軍自ら認識し、川が清浄に保たれることを命じたのである。男山東麓に流れる放生川は、地形上、水が滞留しやすい構造で、濁り江である。しかし、その濁りに神徳があり、澄むことがあれば凶事とする。「石清水雜記云、此河常に濁れり、若大變有る時ハ清と見ゆ」（『考古録・第一一』）。また、「御覽候へこの小河の。水の濁も神徳の。誓は清き石清水の。末は一つぞ」（謡曲・放生川）、「和光の塵もにぎり江の。河水にうかぶ鱗は。実も生けるを放つかと深き誓もあらたにて。恵ぞ繁き男山。榮行く道の有難さよ」（謡曲・女郎花）など、川の濁りを神徳と讃える。ところで、「八景」に川と蛭が登場することはあるのか。一一世紀に成立した『瀟湘八景』には、蛭は登場しない。一四世紀後半に成った『南都八景』には「佐保川蛭」が登場し、一六世紀末に生まれた『近江八景』には蛭は無い。蛭は、後の「八景」には多出するが、用例としては早い。蛭がとりあげられたのは、『八幡八景』が『南都八景』に倣うものであり、日本人になじみのある詩情を感じさせてくれるからであろうか。日本人に諳んじられるものとして、和泉式部の



『発句絵巻』

物思へば沢の螢もわが身よりあくがれ出づるたまかとぞ見る
（後拾遺集・雑・一一六二）
がある。また、『枕草子』の次の文章がある。

夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、ほたるの多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

車胤の螢雪の功（晋書）も馴染みのあるところである。

家貧にして常には油を得ず。夏月には則ち練囊に数十の螢火を盛り、以て書を照らし、夜を以て日に継ぐ。

なお、「螢」は様々な異称をもつ。丹鳥、丹良、丹夜、熠燿、夜遊女、宵燭、即照、夜光、暉夜、宵行、景天、腐草、火虫、銀星など。『八幡八景』では、「丹鳥」「宵行」「夜光」が詠まれている。

漢詩九首、和歌五首、発句一〇句が撰集される。

四―一 放生川螢

一乗主人真敬

放川似帶繞神丘

放川帶に似て神丘を繞り

萬點螢光照兩眸

萬点の螢光兩眸を照らす

回首水天同一色

首を回らせば水天同一色

可中直見數星流

可中直見る數星の流るるを

〔校異〕 作者は、底本「直敬」とするが、昭和本によって「真敬」に改めた。

〔作者〕 一乗院宮真敬法親王。慶安二年（一六四九）―宝永三年（一七〇六）、五八歳。後水尾天皇の第一皇子。奈良興福寺、京都清水寺の別当を務めた。

〔押韻〕 丘・眸・流（下平声一一「乙」韻）

〔語釈〕 ○神丘〓神宮を戴く丘。男山をいう。 ○兩眸〓二つの瞳。ここでは眼前の意味。 ○水〓川。木津川。放生川から

振り返ると木津川が眺められる。 ○可中〓あたかも。ちょうどその時。折しもうまいぐあいに。 ○直〓ただ。〔但〕に同じ。〔訳〕 放生川は帯のように男山を巡っており、あたりを飛ぶ多くの螢の光が目の前に浮かぶ。振り返ると木津川も空もさか

い無く夜の一色に包まれている、折しも幾つかの星が流れるのをただ見ることだ。

四一二 同

正脉梵竺二

流星拱北放生川

流星北に拱す放生川

明滅高低舂水連

明滅し高低し秋水に連なる

恣與遊魚得其所

遊魚と其の所を得るを恣にし

任他不照讀書賢

他に任せて讀書の賢を照らさず

〈押韻〉 川・連・賢（下平声一「先」韻）

〈語釈〉 ○流星＝流れ星。螢をたとえる。

○拱北＝衆星が北極星に向かうこと。『論語』為政に「北辰の其の所に居りて

衆星の之に共うがごとし」。ここでは螢の飛ぶ様を表現したもの。

○讀書賢＝書を読む賢人。『晋書』の「車胤伝」の「螢

雪の功」の故事を踏まえる。晋の車胤は家が貧しく油が得られないため螢の光で讀書した。

〈訳〉 夜空の星々が北極星に向かうように放生川に無数の螢が、光を灯し消しまた高く低く秋の川の流れに沿って飛んでいる。螢は遊魚と同じく自由に飛びまわり、自らの役目を他に任せて讀書する賢人を照らさないのである。

四一三 同

前臨川妙悦

放生川潛曳吟箒

放生川の潛吟箒を曳けば

數點螢光入夜濃

数点の螢光夜の濃きに入る

休向波間矜照火

波間に向かいて照火を矜る休かれ

恐令魚隊誤漁鉦

恐らくは魚隊をして漁鉦と誤らしめん

〈校異〉 起句「吟」は底本「吹」とするが、昭和本によつて改めた。

〈押韻〉 箒・濃（上平声二「冬」韻）

〈語釈〉

○潛＝水辺。岸。ほとり。

○吟箒＝詩人の杖。

○休＝勿・莫に同じ。禁止をあ

らわす。

○漁鉦＝漁火。鉦は、灯火の意。

〔訳〕放生川のほとりに詩を詠もうと杖をついて訪れると、数匹の螢が夜の濃い闇のなかを飛んでいる。螢よ波間で自分の光を誇つてはならない、魚の群れが漁火だと見間違つてはこまるから。

〔解説〕 転句、結句。魚の群れが螢の光を漁火と錯覚し、魚の群れを恐れさせるのは、生き物を放つ「放生川」にそぐわない。殺生にもつながる行為であるので、己の光を誇つて照らすのをやめよ、というのである。

四一四 同

乾舟和尚

萬古長江幾歷年

萬古の長江幾か年を歴たる

遊魚撥刺放生川

遊魚撥刺たり放生川

神風時吹流螢散

神風時に吹き流螢散じ

恰似星河落九天

恰も似たり星河九天より落つるに

〔作者〕 乾舟妙一。寛永八年（一六三一）〜元禄二四年（二七〇一）、七一歳。別号は海萍、鼎堂、朝蓬。大徳寺二四八世住持。

〔押韻〕 年・川・天（下平声一「先」韻）

〔語釈〕 ○萬古＝永久。いつまでも。 ○長江＝長い川。 ○幾＝いくばく。どれほど。 ○遊魚＝水中を泳ぐ魚。 ○撥

刺＝魚の躍る音。「潑刺」に同じ。 ○神風＝神が吹かせるという風。ここでは、男山八幡宮から吹き降りる風のこと。

○星河＝天の河。銀河。 ○九天＝天の最も高いところ。おおぞら。

〔訳〕 古より流れるこの長い川はどれほど年を経たことだろうか、放生川に魚は跳ね躍っている。折しも神域から風が吹いて流れ飛ぶ螢が散り乱れ、まるで銀河が空から落ちかかったようである。

四一五 同

周天座元

點水隨風箇々輕

水に点じ風に随い箇々に輕し

燿然似喜放魚情

燿然として喜ぶに似たり放魚の情

河邊只爲天恩闊

河辺只天恩の闊きが爲に

免得車囊閉此生

免れ得たり車囊此の生を閉ざすを

〔校異〕 起句、底本は「箇々」とするが、昭和本によって「箇々」に改めた。

〔押韻〕 輕・情・生（下平声八「庚」韻）

〔語釈〕 ○点しやう輕くふれる。 ○耀然ようぜん光り輝く様子。 ○天恩てんおん造化の恩、天子の恩をいう。ここでは男山八幡宮の神の恩。

〔訳〕 ○車囊しやのう車胤が螢を入れた袋のこと。車胤の螢は四一二の語釈参照。
〔訳〕 水にふれ風にしがたてて螢は各々輕やかに飛ぶ、放たれた魚が喜んで自由に泳ぐように螢も光り輝いている。川辺にはただ神の恵みが広大であるために、螢は車胤の袋に生を閉ざされることを免れたのだ。

四一六 同

楊柳影斜ようりゆうかげなな已落暉すでらつき

橋頭橋尾きょうとうきょうび草芳菲くさほうひ

放生河畔ほうじやうかはん晚風冷ばんふうひやうひ

冉々ぜんぜん流螢點客衣りゅうけいかくい

〔校異〕 底本の作者名は「晦嚴」とするが、昭和本によった。

〔押韻〕 暉・菲・衣（上平声五「微」韻）

〔語釈〕 ○落暉らつき夕日。落日。 ○橋頭橋尾きょうとうきょうび橋のあたり一面。橋のたもと。 ○芳菲ほうひ草花が繁茂していること。

○冉々ぜんぜん弱々しくまた輕やかに螢の飛ぶさま。 ○客衣かくいたびごろも。客は旅人の意。

〔訳〕 柳は枝を垂れすでに夕日が斜めに差しており、橋の辺り一面には草が繁茂している。放生河畔は夕暮れの風が冷たく、はかなくまた流れるごとくに飛ぶ螢が私の旅衣にとまることだ。

四一七 同

晴川せいせん一帶いったい宮牆きやうかうを遠めく

如在れい靈威みず與水長なが

熠燿ゆうよう流螢影りゅうけい相照あいて

壽妙院じゆみやういん泰山たいざん惊涇きやうかう

晦嚴かいげん禪師ぜんじ

點衣猶認曩時光

衣に点ずるは猶曩時の光を認むるがごとし

〔押韻〕 牆・長・光（下平声七「陽」韻）

〔語釈〕 ○ 晴川せいせん 晴れて遠くまで見渡せる川。 ○ 一帯いつたい ひとすじ。 ○ 宮牆きゅうけう 宮殿の周囲の垣根。ここでは八幡宮を擁する男山の麓をいう。 ○ 熠燿えつぎやう 螢が明るく光を放つさま。 ○ 曩時のうじ 昔日。「曩」は先、昔の意。

〔訳〕 晴れわたり遠くまで見渡せる川が一すじ男山の麓をめぐり、八幡宮の靈威と川はともに長く時を経て続いている。夜になり螢が光を放って流れるように飛び互いに照らし合う、衣にとまる螢は古来変わらぬこの光を放っていたのだと感ずることである。

〔解説〕 放生川に螢が飛び交い、畔に立つ作者の衣に光を放つてとまる。作者は神域の川に飛ぶ螢は昔からこのように飛んでいたのだらうと、螢を機縁に遙かな時間に思いを馳せている。

四一八 同

玉田和尚

得處得時多夜光
處ところを得え時ときを得え夜光やこう多し

有誰相聚入紗囊
誰たれか相聚あひあつめて紗囊さのうに入るもの有らん

桂輪沉後臨川上
桂輪けいりん沈しずみし後川上のちせんじやうに臨のぞめば

廣漢衆星落頡頏
廣漢こうかん衆星しやうせい落ちて頡頏きつこうたり

〔校異〕 底本は承句「沙囊」とするが、昭和本によって「紗囊」と改めた。

〔押韻〕 光・囊・頡・頏（下平声七「陽」韻）

〔語釈〕 ○ 相あい 動詞の上に置き、動作に対象があることを示す。 ○ 夜光やこう 螢の別称。 ○ 紗囊さのう すすぎぬの袋。 ○ 桂輪けいりん 月つきの別称。 ○ 川上せんじやう 川せんのほとり。 ○ 廣漢こうかん 広々とした銀河。漢は天の川、銀河の意。 ○ 頡頏きつこう 鳥などが飛び上がり、また舞い降りるさま。

〔訳〕 放生川の螢は場所と時を得て自由に飛び交い夜ともなれば多くの光を灯している、ここには晋の車胤のように螢をあつめて薄絹の袋に入れるものなど誰がいようか。月が沈んだあと川の畔に立って眺めると、銀河の星々が川に落ちたかのやうに多くの螢が舞い上がったり降りたりしている。

四一九 同

悚山座元

幾放群鮮屢賽神

幾たびか群鮮を放ち屢賽神あり

夜光熠燿等同塵

夜光熠燿として等しく同塵

是非烽火非漁火

是烽火に非ず漁火に非ず

却怪流星落水濱

却つて怪しむ流星の水浜に落つるか

《作者》 悚山座元。生没年未詳。庵号、巢林庵。

《押韻》 神・塵・濱（上平声一一「真」韻）

《語釈》 ○群鮮Ⅱ数多くの魚。 ○賽神Ⅱ神にささげるお札祭り。ここでは石清水八幡宮の放生会をいう。 ○夜光Ⅱ螢の

別称。 ○熠燿Ⅱ光があざやかなさま。 ○同塵Ⅱ仏菩薩が威光を和らげ俗世に仮の姿を現すこと。和光同塵。ここでは石

清水八幡宮の仏菩薩が螢の姿となったかのごとく光を放つて飛ぶ様子。放たれた魚が自由に泳ぎ回るように螢が光を放つて

思いのままに飛ぶことをいう。 ○烽火Ⅱのろしの火。

《訳》 石清水八幡宮の放生会には幾たびも多くの魚を放ってきたが、螢もそれに応ずるように光を点じ思いのままに飛び交っている。その螢火はのろしの火でもなければ漁火でもない、流れ星が水辺に落ちたのかといぶかしむことである。

四一〇 同

清水谷 亞槐實業

玉と見る生るを放つ河辺にはもえて流るゝ水の螢も

《校異》 底本の四句目は、「もへて」とするが、昭和本により「もえて」とした。

《作者》 清水谷實業。慶安元（一六四八）年生、宝永六（一七〇九）年没、六二歳。公卿、歌人。靈元上皇歌壇の中心として活躍し、狂歌もよくした。官位は、正二位、権大納言。亞槐は、大納言の唐名。元禄二年、権大納言に昇る。靈元上皇歌壇の中心として活躍し、禁中・仙洞歌会の所役をつとめる。漢学を熊沢蕃山に学び、堂上四天王のひとりに数えられる。著作に「高雄紀行」がある。

《語釈》 ○玉Ⅱ玉のように美しいものをたとえる。ここでは、玉からは魂が連想され、河辺に飛ぶ螢が思い浮かぶ。「物おもへば沢の螢も我が身よりあくがれいづる魂かとぞみる 和泉式部」（後拾遺集・雑・一一六二）。 ○河辺Ⅱ川に流れは縁

語。○生るを放つ＝生きとし生けるものの魚鳥などを解き放つこと。石清水八幡宮神事の放生会で、秋に放生川において魚鳥を放つて開催される。謡曲「放生川」の「さればこそ放生会とは。生けるを放つ祭ぞかし」の詞章を踏まえる。○水の螢＝漢語「水螢」を和語としたもの。水辺に飛ぶ螢。「一声の山鳥は曙雲の外 万点の水螢は秋草の中 許渾」（和漢朗詠集）。「春をだによそなる谷の光には水の螢をみるもはかなし（作者無記載）」（藤川五百首・四・一四五）。

〈訳〉生き物を放つこと放生川では、川辺に光を放ち燃えて流れるように飛ぶ螢も、玉のように美しい魂だと思つて見るとだ。

四一一 同

見野けんしよ

いさぎよき川瀬の波に通夜かけをうつして螢とふなり

〈語釈〉○いさぎよし＝潔い。清浄な様子。特に、放生川は濁り江ながら清浄であることが求められている。○通夜＝夜もすがら。つうや。一晩中。夜通し。昭和本に「よもすがら」と表す。○かげ＝ここでは、螢のひかり。水面に螢の光が映つて見える様子。「飛はたる影をうつして佐保川の浅瀬に深き心をぞ知る 前内大臣三条公忠」（南都八景）。

〈訳〉清浄な放生川の瀬の波に一晩中、おのれの光を映して螢が飛ぶことである。

〈解説〉螢二十日に蟬三日、と蟬三日ほどではないが、命の短い螢である。生き急ぐかのように夜通しひかりながら飛ぶのである。螢が川瀬を飛ぶのは、光る螢、ゲンジボタル、ヘイケボタル等の習性であるが、川瀬の清浄さが螢の命の凄味を受け止めているようである。

四一二 同

義徳ぎとく

男山麓の河に影うつす螢も神のめぐみうくらむ

〈語釈〉○影＝「放生川螢」四一一語釈参照。

〈訳〉男山の麓の放生川に光を映して飛ぶ螢も、男山の神の恵みを受けていることだ。

〈解説〉男山の神の恵みは、人々には勿論であるが、螢にまでも及ぶのであると寿ぐ。

四一三 同

昌築母しやうぢくはは

川水の濁りにしまぬ夏虫なつむしの影にも神のひかりをぞしる

《作者》 里村昌築の母は、直條の妹まへ真。里村昌純に嫁す。寛文二年八月二七日生、享保三年七月二五日落、五七歳。昌純は、二一一参照。昌築は、四一一五参照。

《語釈》 ○濁りにしむ＝濁りに染む。放生川は男山の東麓に位置し、流れの淀む地理的な構造がある濁り江である。放生川蚩解題参照。「蓮葉の濁りにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく 僧正遍昭」(古今集・夏・一六五)。○夏虫＝蚩の異名。「つつめども隠れぬものは夏虫の身よりあまれる思ひなりけり よみ人知らず」(後撰集・夏・二〇九)。○影＝「放生川蚩」四一一語釈参照。○ひかり＝ここでは神の威光。威勢。威徳。

《訳》 川の水の濁りに染まらぬ蚩の光に、ここ放生川だけに神の威光を知ることだ。

《解説》 放生川は、旧暦八月一日に放生会の神事が行われる場所である。故に、そこに飛び交う蚩にも神の威光が及ぶとした。なお、放生川の濁りには神徳があるとする。放生川蚩解題参照

四一四 同

直條なおえだ

そのかみに誰か放ちて此川こののたへぬ流れに蚩飛とびかふ

《作者》 柏村直條。「はじめに」参照。

《語釈》 ○そのかみ＝いにしえ。むかし。○たへぬ流れ＝絶えることのない流れ。ここでは放生川の流れを賀する。「五十鈴川たえぬ流れのそこ清み神代かはらず澄める月影 伏見院」(続千載集・神祇・九一〇)。

《訳》 その昔に誰が蚩を放ったものであろう。その昔から魚鳥を放つ放生川の途絶えぬ流れに今も蚩が飛び交っていることだ。

《解説》 この川の流れが、文字通り水の流れを表すと同時に歴史的な推移を表すものとして捉えられ、その神性を寿いでいる。

四一五 同

夏川も生るを放つ宵行哉

法橋 昌築 しょうく 〈夏川、宵行・夏〉

〈作者〉 里村昌築。連歌師。生没年未詳。里村南家。昌純（二一一参照）の息。昌陸（一一一三参照）は伯父。「元禄十一年正月二十四日昌築等何舟百韻」に其阿（八一五参照）、昌億（三一一一参照）。「享保五年正月十一日御城之御会句集」に其阿、仍民（紹山・四一一六参照）等と同座。「享保七年正月十一日昌億等御城御会何船百韻」に昌億、其阿、仍民等と同座などがある。

〈語釈〉 ○夏川〓ここでは、夏の放生川。 ○生るを放つ〓生きとし生けるものの魚鳥などを解き放つこと。石清水八幡宮神事の放生会で、秋に放生川において魚鳥を放つて開催される。謡曲「放生川」の「さればこそ放生会とは。生けるを放つ祭ぞかし」の詞章を踏まえる。 ○宵行〓螢の異称。「詩経に熠燿タル宵行トイヘリ。宵行ハ即螢也。」（大和本草・一四）。他称に、丹鳥、丹良、丹夜、熠燿、宵燭、即照、夜光、暉夜、景天、腐草、火虫、銀星など多彩である。なお、直條の「丹鳥」の句（四一二三）参照。

〈訳〉 ここ放生川では、秋に放生会が行われるが、夏の放生川もすでに、生きとし生ける螢が、正しく放たれたように命を燃焼させて飛び交っていることだ。

〈解説〉 当該句は、元禄七（一六九四）年ごろに昌陸、昌純らによって選定された『発句絵巻』に収録されている（雄徳山松解題及び放生川螢解題参照）。

四一六 撲袖もこ、は流れのほたるかな

紹山 しょうざん 〈ほたる・夏〉

〈校異〉 底本は、下五「軒かな」とするが、昭和本により「ほたるかな」とした。

〈作者〉 里村紹山。連歌師。明暦二（一六五六）年生、享保一三（一七二八）年七月六日没、六九歳。後に仍民と号する。里村北家の仍春の息。里村南家の昌陸（一一一三参照）の息とも。寛文九年以降に成立の里村昌純（二一一一参照）著「新式抄」の巻末に「紹巴三代玄的孫仍春息仍民 享保十三年七六卒 年六十九歳 始号紹山休雲院漢阿」とある。

〈語釈〉 ○撲〓うつ。打つ。たたくように動かす。ここでは、袖で叩くようにして螢を追う様子。 ○流れ〓放生川の流れと、螢が流れるように飛ぶ様子を掛ける。 ○流れのほたる〓漢語の「流螢」を訓読した表現。流れるように飛ぶ螢。

杜牧（八〇三―八五二）の詩「秋夕」に「銀燭秋光画屏冷やかなり 輕羅小扇流螢を撲つ」がある。また、『八幡八景』の漢詩にも「流螢」（四―四、四―七参照）がある。また、「星流」（四―一）、「流星」（四―二、四―九）などの類似表現もある。

〔訳〕 流れるように飛ぶ螢を袖で扇いだり叩いたりもするが、畏れ多くもここは放生川の神聖な流れに飛ぶ螢である。

〔解説〕 「流螢を撲つ」の用例が杜牧の詩にあり、それを倣ったものか。江戸時代には、螢狩りの風情として、扇あるいは団扇で螢を撲つことが行われていた。『都名所図会』（朱雀篇）には、宇治の川辺にて螢狩を楽しむ風景が描かれるが、手に虫籠を持つ者の姿もあり、扇や団扇で螢を捕らえたものであろう。但し、放生川はそもそも殺生を禁じられているので、螢を捕えるのではなく、扇いだり追ったりすることであると詠んだ。

四―一七 此川に光りをはなつほたる哉 この かな

違順 いじせん 〈ほたる・夏〉

〔校異〕 底本は、中七「光りを離つ」とするが、昭和本により「光りをはなつ」に校訂した。

〔語釈〕 ○はなつ＝放つ。螢が光を放つと放生会の放つの掛詞。

〔訳〕 秋の放生会で魚鳥類を放つこの放生川に、夏、螢が光りを放っていることだ。

〔解説〕 秋に行われる放生会の祭事と夏の日常における螢の光景とを対比的に描く。「光り」は螢の光とともに放生会に光を当てて称揚する気持ちが込められている。

四―一八 川の名のいけるたくひの飛螢 たぐい とぶほたる

宗吟 そうぎん 〈螢・夏〉

〔語釈〕 ○いけるたぐひ＝生ける類。生きとし生けるもの。あらゆる生物、生命。「誓の海のうろくづの。生きとし生ける物として。豊なる世に住まふ」。（謡曲・放生川）。「生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」（古今集序）。また、



『都名所図会』

修辞上は、放生川の「生」を掛ける。

《訳》 川の名が放生とあるように、生きとし生けるものの類、つまりあらゆる生命が放たれているものの一つとして、螢が飛び交うのだ。

《解説》 川の名は放生川である。生きとし生けるものを放つのは、魚や鳥だけではなく螢もそうなのだよと論しているようである。螢や放生会の魚鳥に寄せて、仏教的な思いに浸ることもある。「善導の御影に似たる螢かな 作者不知」（毛吹草）。「螢火は石仏にも御光かな 近吉」（毛吹草）。

四一九 川風に花散まかふ螢哉

宗誠（そうせい）
《螢・夏》

《語釈》 ○まがふⅡ紛う。よく似ていてまちがう。似通う。

《訳》 川風に、花が舞い散るかのように、ほたるが舞い華やかである。

《解説》 通常、風によつて散らされるのは桜である。それが、この句では、川風によつて散らされるのは螢なのだとなえている。螢の季語は夏であるが、この句では、春、川風に桜が舞うように、螢が舞っているようだと言想的に詠んでいる。一句はふくよかだが、桜が散る様子を螢の光に重ねると、どこか哀しい雰囲気漂わせる。

四二〇 水よとみ宵行流る、川辺哉

宗賢（そうけん）
《宵行・夏》

《作者》 渡辺宗賢。生没年等未詳。『西山三籟集』に名が見える。

《語釈》 ○よどむⅡ淀む。流れがとどこおり水がたまること。ここでは、放生川の水が淀み濁るのであり、八幡神の徳を現したものとされる。川が澄むとむしろ凶兆である。放生川螢解題参照。なお、修辞上は、淀むと流れるが対比的に用いられている。

《訳》 放生川の水は神徳を現して淀み、螢は流れるように飛ぶ。そんな川辺であることだ。

《解説》 徳川幕府は、八幡の神領域に対して殺生の禁制や放生川の清浄を命じている。男山東麓に流れる放生川は、地形上、水が滞留しやすい構造である。放生川螢解題参照。

四一二 螢飛うろくつ躍る川邊哉

英儀 螢・夏

〔語釈〕 ○うろくつ＝鱗。鱗を持つものの総称。魚の異称。

〔訳〕 螢が飛び、魚が躍り跳ねている放生川の川辺に生命の跳躍を見、神徳を感じることだ。

〔解説〕 鱗は、「誓の海のうろくづの。生きとし生ける物として。豊なる世に住まふ事。偏に当社の御利生なり」（謡曲・放生川）や、「和光の塵も濁江の河水に浮かぶ鱗は実も生るを放つかと深き契ひもあらたにて恵みぞ茂き男山栄行道のありがたさよ」（謡曲・女郎花）など、男山の神徳をたたえる象徴である。英儀の句では、生命の讃歌を率直に歌い上げている。螢が自由に飛び交い、魚が力いっぱい跳ねているのも、八幡神の徳である。

四一二 かけもむべ 清き川辺の宵行かな

信清 宵行・夏

〔語釈〕 ○かけ＝光。螢の光る姿。 ○むべ＝宜。諾。うべ。なるほど。まことに。「吹くからに秋の草木のしをるればむ

べ山風を嵐といふらむ 文屋康秀」（古今集・秋・二四九）。 ○清し＝穢れや汚れがなく、清浄なこと。

〔訳〕 この清浄な放生川では、まことに螢の光も水面に映る姿も清浄であるよ。

〔解説〕 「かけ」は光を指すと同時に、物が映った影でもある。放生川は清浄なのだから、螢の光も、川面に映った影も清浄なのだと寿いでいる。「うき草の風にただよふ沼水にかけさだまらで飛ぶ螢かな 前大納言為尹」（新統古今集・雑・一六七七）。

四一三 うろくつも藻に隠れ得ぬ丹鳥かな

直條 丹鳥・夏

〔作者〕 柏村直條。「はじめに」参照。

〔語釈〕 ○藻＝藻類のこと。また、水中に生じる植物の総称。和歌では、姿を隠すものとされる。「濁り江に生ふる萱菰身

隠れてわが恋ふらくは知る人ぞなき」（躬恒集）。 ○丹鳥＝螢の異称。晋の車胤が螢を集めて書を照らし読んだ故事をふまえる次の詞章などによる。「昔は丹鳥を聚めて寸陰を十五年の間に競ふ 今は画熊を迎へて手を三百盃の後に分たむとす

源順」（和漢朗詠集）。

〔訳〕 魚も藻にその姿を隠すことができない。なぜなら、水面近くを飛ぶ螢の光に照らされているからだ。

《解説》 蛍の光りは「藻に隠れ」ようにする魚の姿を暴いてしまう、魚にはやつかいなものだと言っている。和歌における藻は姿を隠すものとされるが、当該句も同様の発想に基づいている。これに魚の嘆きという俳諧的な趣向を施した。

四―二四 影なれや水の底にも飛^か螢^{ぼな}

由治^{ゆうち} 〈螢・夏〉

《語釈》 ○影＝光を放つ蛍の姿が水にうつって影となる様子。「濁り江の澄まむことこそ難^{かた}からめいかでほのかに影をだに見ん」（伊勢集）。 ○なれや＝ここでは詠嘆の意を表す。

《訳》 影なのだ。水の底にも蛍が飛んでいるように見えるのは。

《解説》 水面近くを飛ぶ蛍の影が水面に映り、さながら水の底に蛍が飛んでいるように映ると機知的に詠んだものである。

「水の底を飛ぶ」と非現実的な様子を言い立てた趣向である。

第五景 安居橋月

安居橋月 解題

『考古録』巻二に「安居橋」の項があり「田中家伝来の古図に拠に放生河反橋より川上の方に、高欄玉葱宝珠等壯観備りたる如く画る橋、三所に渡せり」とある。「田中家伝来の古図」がいつの頃のものなのか定かではないが、この橋が架かる以前は「五位橋」と称せられて、「安居橋」の名は比較的新しいとされる。また、その名より「安居神事」との関わりがあり、宝樹である松の太夫を人夫に担がせ山上に曳き進む際にこの橋を渡ったと思われる。但し、同書に「又一図に安居参勤橋と書るもあり、此橋に就て安居神事の事を付会したる説は、強言にて信用しがたし」とある。

先行する「八景」で「橋と月」がテーマとなるものは見られないが、月は秋を象徴する景物として必ず用いられている。ちなみに、『瀟湘八景』では「洞庭秋月」、『南都八景』では「猿沢池月」、『近江八景』では「石山秋月」がある。

『考古録』の「安居橋」の項の末尾に、花山院持實の漢詩と中院通躬の和歌が紹介されている。

表紙、裏表紙の「八幡山案内絵図」には、石清水八幡宮の宿院（頓宮）に放生川が流れ、安居橋と高橋が描かれる。図にある通り、放生川の上流には安居橋（平橋）、下流には高橋（反橋）が架けられている（川の流れは左から右）。ちなみに、高橋は、「古者神橋なる故、不浄を禁て往来はせざりけむ、今も安居橋と共に、破損の時に將軍家より修造を加へらる、例也（中略）又葱宝珠十二本、青銅にて鑄替在しハ安居橋と同時寛保三年なり、各橋名を記」（『考古録』）とあり、破損の時は將軍家より修造を加えられた。徳川將軍家にとって安居橋（平橋）と高橋（反橋）はともに重要な橋と位置付けられていたことは間違いない。



『発句絵巻』 昌陸画

漢詩一〇首、和歌六首、発句一〇句が撰集される。

五十一 安居橋月

亞槐持實
あかいもちざね

月白風清緑水長

月は白く風は清くして緑水長し

一天晴色滿秋光

一天晴色秋光満つ

千年勝地不虛美

千年の勝地は虚美ならず

皓々相憐橋上霜

皓々として相憐れむ橋上の霜

〈作者〉 花山院持實。寛文一〇年（一六七〇）〜享保一三年（一七二八）、五九歳。公卿。花山院家二五代当主。亞槐は大

納言。元禄六年、権大納言に任ぜられ、元禄七年、従二位となり神宮伝奏となる。霊元天皇に仕えた。

〈押韻〉 長・光・霜（下平声七「陽」韻）

〈語釈〉 ○一天〓空全体。おおぞら。 ○秋光〓秋の景色を意味する語であるが、ここでは秋の月光をいう。『懷風藻』文

武天皇「詠月」に「水下りて斜陰碎け、樹除りて秋光新し」。 ○虚美〓実がなくうわべだけの美しさ。 ○霜〓ここでは

橋の上に差す月光を喻える。李白「静夜思」の「牀前に月光を看る 疑うらくは是れ地上の霜かと 頭を挙げて山月を望み

頭を低れて故郷を想う」を踏まえる。 ○憐〓感動する。

〈訳〉 月は白く輝き風は清らかに吹き青い水が長く流れゆく、秋の夜空は晴れわたり月光が隈無く照らしている。古くから

の景勝地であるこの地は真の美が備わる、皓皓と照り橋に置く霜かと見まがう月光に心を動かされることである。

〈解説〉 結句、月に照らされた橋上の霜は、橋の上に差す月光をたとえたものである。作者は、安居橋に差す明るく白い月

光を、霜が降りたのかと思ひ、その美しさに感動している。

五二 同

江沙祖縁

百尺長橋呑澗水

百尺の長橋澗水を呑み

一輪明月出雲衢

一輪の明月雲衢を出づ

俱涵清影翠波冷

俱に清影を涵し翠波冷やかに

恰似蒼龍弄寶珠

恰も蒼竜の宝珠を弄ふに似たり

《作者》 江沙祖縁。別宗祖縁。万治元年（一六五八）～正徳四年（一七一四）、五八歳。相国寺一〇三世住持。朝鮮通信使の接伴僧を務める。

《押韻》 衢・珠（上平声七「虞」韻）

《語釈》 ○澗水Ⅱ谷川。○雲衢Ⅱ雲の通い路、ここでは雲のこと。○涵すⅡ浸す。映る。影を落とす。

《訳》 百尺もの長い橋が小川を呑むように掛かり、一輪の明月が雲を出て輝く。橋と月がともに影を落としみどりの波は冷やかに、あたかも蒼い竜が宝珠を弄んでいるかのように見える。

五二三 同

前臨川秉光

鳩峯高處月成輪

鳩峯高き処月輪を成す

獨立橋邊眺望頻

独り橋辺に立ちて眺望すること頻りなり

不是英才題柱客

是英才の柱に題する客ならず

定知乘興賦詩人

定めて知る興に乗じて詩を賦する人ならん

《押韻》 輪・頻・人（上平声一一「真」韻）

《語釈》 ○鳩峰Ⅱ男山の頂上「鳩ヶ峰」をいう。○題柱Ⅱ柱に題す。柱に詩を書きしるす。橋柱に詩を題することは司馬

相如の故事を踏み、功名に対する自負をいう。漢の司馬相如は都長安に旅立つ際、成都の昇仙橋に立身出世の志を記した（華陽国志・蜀志）。

《訳》 男山の鳩ヶ峰の空高く輪のように月が浮かび、橋の傍らに立ってひとりで頻りに月を眺めている人がある。これは司馬相如のように英才が橋柱に立志の詩を記しているのではなく、きつと興に乗じて詩を吟じる人であろう。

五―四 同

虎嶺和尚
こがねおしょう

菩薩應身曾照臨

菩薩の応身曾て照臨す
ぼさつ おうしんかつ とうりん

道通万世聖恩深

道は万世に通じて聖恩深し
みち ばんせい ふう せいおん かく

安居橋上一輪月

安居橋上一輪の月
あんこ ばし ちういちりん つき

永使行人觀本心

永く行人をして本心を觀ぜしむ
なが こうじん ほんしん かん

〈押韻〉 臨・深・心（下平声一二「侵」韻）

〈語釈〉 ○万世＝永久。万代。万古。 ○応身＝衆生を救うため、その対象に應じて姿を変えて現れる仏身のこと。報身。

○照臨＝賓客が訪ねてくること。ここでは八幡大菩薩が現れること。 ○聖恩＝天子の恩恵。皇恩。 ○本心＝仏教で、すべての生き物にそなわる清浄な心。

〈訳〉 ここ男山にはかつて八幡大菩薩の化身が現れた、その道は万代に通じて今に至るまで帝の御恩をも深く賜っている。安居橋の上空にかかる一輪の月は、古来旅人に衆生の本心たる清らかな心を觀じさせてきたことである。

五―五 同

妙心寺 無著和尚
みょうしんじ むじくおしょう

仙闕稜層月露濃

仙闕稜層月露濃かなり
せんけつりようそうげつろ こまろ

青冥擲杖步銀虹

青冥に杖を擲ちて銀虹を歩く
せいめい つえ なげう ぎんこう ある

鵝珠沈在澄波底

鵝珠沈みて澄波の底に在り
がしゆしず ちようは せどこ あ

唸入如來禁網中

吟じて入る如來の禁網中
ぎん によらい きんもうちゅう

〈校異〉 結句「網」は、底本「綱」とするが、昭和本によって改めた。

〈作者〉 無著道忠。承応二年（一六五三）～延享元年（一七四五）、九三歳。臨濟宗妙心寺の住持となる。仏典、漢籍などの校勘を行った。『金鞭指街』・『正法眼蔵僭評』・『黄檗外記』などの著書がある。

〈押韻〉 虹・中（上平声一「東」韻）

〈語釈〉

○仙闕＝仙人の住んでいる宮城。ここでは男山八幡宮をいう。

○稜層＝

山の高くそびえるさま。

○青冥＝青い

空。

○銀虹＝月光に照らされて銀色に輝く虹。ここでは虹は安居橋のこと。

○鵝珠＝鵝鳥の飲み込んだ珠。ここでは、

黄色い珠のような月をいう。 ○禁網Ⅱおきて。法律。「如来禁網」は仏の法理をいう。

《訳》 仰ぎ見ると男山八幡宮は仙人の宮城のごとく山は高くそびえ月夜に露が深い、安居橋を渡ると杖を捨てて空をゆき銀色の虹の上を歩くような気分になる。黄色い珠のような月が澄んだ波の底に映り、興に乗って詩を吟じると仏の真理の世界に入ってゆくようだ。

五一六 同

雷峯

一片長虹横大溪

いつべん ちやうこうたいけい
一片の長虹大溪に横たわり

褰裳不涉便東西

も かか わた すなわ とうざい
裳を褰げて渉らず便ち東西す

最憐秋半月明夜

も こと あわれ あきなか げつめい よる
最も憐むは秋半ば月明の夜

好倚欄檻新句題

よし らんかん よ
好し欄檻に倚りて新句を題せん

《押韻》 溪・西・題（上平声八「齊」韻）

《語釈》 ○褰裳Ⅱ裳の裾を掲げる。 ○便Ⅱそのまま。つまり。 ○東西Ⅱあちこちに行くこと。 ○好Ⅱよし。それならば。

《訳》 長い虹のような橋が大きな谷に横たわる、景色がよいので私は袴の裾を掲げてすぐには渡りきらず行ったり来たりしている。最も心動かされるのは秋半ばの月の明るい夜だ。よし、手すりによりかかって新しい句を書きつけることにしよう。

《解説》 実際の放生川は小川であり、そこに架かる安居橋も小さな橋であるが、それを長虹・大溪と大仰に表現し、漢詩独特の世界をつくっている。

五一七 同

細川桃庵源元通

南山輦路送神辰

なんざん れんろ かみ たつ おく
南山の輦路神を辰に送る

一半秋光月滿輪

いっはん しゅうこうつきりん
一半の秋光月輪を満たす

幾歲放生橋下水

いくさい ほうじやう かいしやう か みず
幾歳の放生橋下の水

清流寒影躍金鱗

せうりやう かんえい きんりんおと
清流の寒影に金鱗躍る

《作者》 細川元通。生年未詳。享保八年（一七二三）没。源は本姓。江戸幕府医官。番医・奥医・御匙・法眼を務める。

『訂正東医宝鑑』に跋を書き、著書に『剛斎年譜』がある。元通以降は代々細川桃庵を名乗る。

〈押韻〉 辰・輪・鱗（上平声一一「真」韻）

〈語釈〉 ○南山〓京都の南にある山で男山を指す。 ○輦路〓帝の乗り物が通る道。ここでは放生会のとくに鳳輦の通る猪鼻坂をいう。 ○辰〓東南東の方角。 ○一半秋光〓仲秋の月光。一半はなかば。

〈訳〉 安居橋に立つて眺めると男山の神が辰の方角、輦路である猪鼻坂をお降りになる、仲秋の月光は輝き満月である。この橋の下の方で幾歳の間放生会に魚を放ってきたことか、清い流れに寒々とした月影が映り金色に鱗を光らせて魚が跳ねることである。

〈解説〉 八月一日に行われる放生会に、安居橋に立つて鳳輦が猪鼻坂を降るのを見ているのである。転句・結句は、この神事は幾年を経て行われてきたのかと遥かに思いをはせ、放生会に放たれ、月光の映る水面に泳ぎ跳ねている魚に目を移している。

五十八 同

観山上人
かんざんしょうにん

安居橋上月安輪

あんごばしづつきやす
安居橋上月安らかに輪り

輪影落江水底鱗

りんえいこう
輪影江に落つ水底の鱗

此地曾無題柱客

ちこかつ
此地曾て柱に題する客無く

倚欄惟有賦詩人

らん
欄に寄りて惟だ詩を賦する人有りしのみならん

〈作者〉 観山。昭和本に、「淀福田寺先住」と記す。

〈押韻〉 輪・鱗・人（上平声一一「真」韻）

〈語釈〉 ○輪影〓月光。 ○鱗〓車輪。ここでは月。 ○題柱〓立身出世への志をいう。本章漢詩五―三の語釈参照。

〈訳〉 安居橋の上に立つと空には月がおだやかに円くかかり、その影は川に落ちて水底に輪のような月が映る。この地は今まで名を高めようと橋に詩を書きつける旅人は無く、ただ風流を愛し欄干によりかかり詩を詠む人がいただけなのだろう。

五一九 同

全昌寺 環溪座元

氷輪轆上一條虹

氷輪轆上一条の虹

影入流波浸碧空

影は流波に入りて碧空を浸す

好是九旬宗廟下

好し是九旬宗廟の下

神光相映往來通

神光相映え往來に通ず

〔作者〕 生没年未詳。全昌寺は、放生川にかかる石橋の前にあつたが現存しない。（裏表紙参照）

〔押韻〕 虹・空・通（上平声一「東」韻）

〔語釈〕 ○氷輪Ⅱ月の異称。○轆Ⅱまわる。めぐる。○上Ⅱ側。○九旬Ⅱ夏安居の期間。また、安居。四月一五日か

ら七月一五日までの九〇日間。○宗廟Ⅱ天子や諸侯が祖先を祭った建物。ここでは男山八幡宮をさす。

〔訳〕 水に映る月と安居橋はまるで氷輪のそばに一筋の虹が架かっているようであり、月光は流波に入り碧い空を映している。すばらしいことだ 安居の男山八幡宮の下は、神々しい光が月光に映えて往來を照らしている。

五二〇 同

正隠

安居橋上月彷徨

安居橋の上月彷徨す

無垢無塵清浄光

無垢無塵清浄の光

映徹襟懷成独笑

襟懷に映徹して独笑を成す

昭々皎々一天長

昭々皎々一天長し

〔押韻〕 徨・光・長（下平声七「陽」韻）

〔語釈〕 ○彷徨Ⅱさまよう。○無垢Ⅱ煩惱の汚れなく清らかなさま。○無塵Ⅱ無垢。塵は煩惱をいう。○映徹Ⅱ映り

とおる。照り輝く。○襟懷Ⅱ心中の考え。むねのうち。○昭昭Ⅱ明るいさま。○一天Ⅱ空一面。

〔訳〕 安居橋の上空に月はさまようごとくに浮かぶ、煩惱のけがれの無い清らかなその光よ。月の光はわが心にまで映り徹っておのずとひとり笑まれる、明るい光が空一面にひろがり秋の夜は長い。

五―二 同

中院なかにん通躬みちみ

かけて世にあふくやわたの麓とや月も曇らぬ前の川はし

〔作者〕 中院通躬。寛文八（一六六八）年五月二日生、元文四（一七三九）年二月三日没、七二歳。右大臣。従一位。父の中院通茂に歌学を受け継ぎ、霊元天皇の歌壇で重きをなす。漢学を熊沢蕃山に学ぶ。昭和本に「中院中納言」とあり、通躬が中納言であつたのは、元禄五年から同一六年迄（一度退位して再任されている）のことで、二五歳から三六歳の時である。

〔語釈〕 ○かけて＝すべからく。橋の縁語。 ○あふぐ＝仰ぐ。尊ぶ。 ○やわた＝やはた。八幡山。男山。 ○川はし＝川橋。ここでは安居橋。（表紙・裏表紙絵図参照）

〔訳〕 すべからく世の中に尊ばれるという八幡山の麓であるよ。その麓の前には安居橋がかかっており、そこから見る月は曇ることなく澄み切っている。

〔解説〕 「月も曇らぬ」と眼前の景をいうと同時に、月を遮る雲がない、つまり差し障るものがなく、人の迷妄を破ることをいう。真如の月。「花ちらで月はくもらぬ世なりせば物を思はぬわが身ならまし 西行」（風雅集・一八五七）。

五―二 同

直重なおしげ

おとこ山たのみをかくるはしの上に月もやわらく光見すらし

〔作者〕 柏村直重。宗得齊、柏亭、一清庵。直條（はじめに）参照の祖父。「大乘院鐘」発句（八一―二四参照）に出る。息に直能（宗仙、一―二七、七―一五参照）がいる。

〔語釈〕 ○かくる＝頼みを掛けると、橋を架けるの掛詞。

〔訳〕 男山の頼みを掛けて架かる安居橋の上に月が出ている。そのため月も和らいだ光を見せているらしい。安居橋の月は人を暖かく見守ってくれるのに違いない。

五―三 同

兼重けんちゆう

千代かけて替らす照す橋の上の月の光そわきてさやけき

〔語釈〕 ○千代〓千年。長い年月。永久。「ながらへてけさぞ嬉しき老いの波八千代をかけて君につかへむ」(建礼門院右京大夫集・三五六)。 ○かける〓年月を掛けると、橋を架けるの掛詞。 ○わきて〓格別に。取分け。「月影は同じひかりの

秋の夜をわきて見ゆるは心なりけり よみ人知らず」(後撰集・秋・三二六)。 ○さやけし〓清らかだ。澄んでいる。けが
れがない。「久かたの月の桂のをとこ山さやけきかげはところがらかも ト部兼直」(続古今集・神祇・七〇〇)。「秋風にた
なびく雲の絶え間よりもれ出づる月の影のさやけき 藤原顕輔」(新古今集・秋・四一三)。

〔訳〕 長い年月にわたって変わらず照らす月の光であるが、とりわけ安居橋の上の光は清らかであることだ。

〔解説〕 石清水では旧暦八月一日に安居会が行われ、その折に安居橋の上で月を見れば、一層清々しさが増すとしたもの
である。なお、兼重の歌は、次の仲秋の名月の歌に通う。「いつとても月見ぬ秋はなきものをわきて今夜のめづらしきかな
藤原雅正」(後撰集・秋・三二五)。

五―四 同

光敬こうけい

千早振神の行幸も今宵そと月のしらゆふかくる川はし

〔校異〕 底本の三句目は、「今今そと」と判読されるため、昭和本により「今宵そと」とした。

〔語釈〕 ○千早振〓勢いの強力で恐ろしい神の意で、「神」およびこれに類する語にかかる枕詞。 ○行幸〓みゆき。天皇

の外出をいう。臨幸。上皇、女院などでは御幸。ここでは、鳳輦が山上から安居橋に降りてくることを指す。 ○しらゆふ〓

白木綿。楮の皮をさらしたりして白い紐状にしたもの。幣帛へいはくとして神、しめなわなどにつけ、神事に用いる。ここでは、月
光が白木綿のように見える様子。「住吉の浜松がえに風吹けば浪のしらゆふかけぬまぞなき 藤原道経」(新古今集・神祇・
一九一三)。 ○かくる〓掛ける。心に留まる。心に掛けると橋を架けるの掛詞。

〔訳〕 神々しい鳳輦が山上から放生川はうせいがわのふもとへ動座する今宵、川浪に映る月影がしらゆうのように見える、そんな安居橋
であることだ。

〔解説〕 石清水八幡宮における安居会の神事が行われる夜の月光を白木綿に見立てた。

五―一五 同

世々よよかけて照そうそふ月は石清水清き流れの末すえの川はし

尚誠しょうせい

〔作者〕 底本に作者名は記されていないが、昭和本に「尚誠」とする。「月弓岡雪」発句（六一二二）に出る。

〔語釈〕 世々よよ代々。長い年月。「世々かけて」は、幾代にもわたつて絶えることがないさま。「君をまもるかも川浪代々かけてすむ水がきも猶ぞ久しき 飛鳥井雅世」（新続古今集・神祇・二二〇〇）。○かけてよ年月を掛けると橋を架けるの掛詞。○照りそふよ光や輝きが増す。○流れよ川の流れと歴史的な時間の流れとを含んでいる。

〔訳〕 長い年月に渡つて月が輝きを増し照らす石清水八幡宮、その傍らに清らかに流れる川の末に架かる安居橋よ。

〔解説〕 清らかに照り輝く月の光が、石清水とその附近を流れる川、安居橋を照らし、神域の趣をますます清浄なものにしている。「猶てらせ世々にかはらず男山あふぐ峰より出づる月影 源通光」（続後撰集・神祇・五四五）。

五―一六 同

神わわざわざに仕る雲の上うへ人も月をやめめづる秋の川橋

直條なおえだ

〔作者〕 底本に作者名は記されていないが、昭和本に「直條」とする。「はじめに」参照。

〔語釈〕 ○神わわざわざ神に関わる行事、神事。「名草山とるや神の尽きもせず神わわざわざしげき日のくまの宮 紀俊文」（風雅集・神祇・二一四〇）。○雲の上人うへ禁中にいる人、高貴な人をいうが、ここでは放生会に勤仕する上卿をいう。○めづめづ愛でる。心ひかれる。

〔訳〕 神事にお仕える上卿でさえも秋のよき夜は安居橋で月を愛でているのか。

〔解説〕 雲の上人の「雲」には禁中の意味を含む。ふだんは禁中に仕えるが、秋のよき月にひかれて安居橋で立ち止まるといふのである。疑問の表現をすることで、安居橋の月の風情を伝えようとする。「も」が効果的に用いられている。

五―一七 同

川橋かわはしやのそむそむたくたくひも夏の月

周旋しゅうせん

〈夏の月・夏〉

〔作者〕 里村周旋。生没年等未詳。太泰律師（昭和本による）。昌陸（一一一三参照）の弟（昭和本による）。福井久蔵著

『連歌の史的研究』によれば「周施」とし、昌陸の叔父になる。なお、「安居橋月解題」にあげた『発句絵巻』に「周施」と署名する。元禄三年五月「賦何船連歌」（連歌俳諧研究・八一号）に昌陸、昌純（二一一一参照）、昌億（三一一一参照）、由純（三一一八参照）、宗真（二一一三参照）らと出座する。なお、里村南家の系譜に出ないことが多い。

〔語釈〕 ○川橋Ⅱ川に架けた橋。放生川に架かる安居橋（表紙・裏表紙絵図参照）。「うち渡す佐保の川橋なか絶えて下枝をつたふ岸の青柳 藤原道家」（夫木抄・雑・九三七五）。○のぞむⅡ望ましいと願う。月を「望む」と川橋に「臨む」を掛ける。○たぐひⅡ種類などが同じような物事。同類。ここでは、秋の月はもちろん、夏も同様にという意味。○夏の月Ⅱ短夜のはかなさや夕方の涼しさの情をこめる。「ほととぎす鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ残れる 藤原実定」（千載集・夏・一六一）。

〔訳〕 八幡八景のひとつの川橋である。この安居橋に望ましいものは、秋の月と同様に夏の月であることだ。

〔解説〕 和歌における月は、歌枕を用い、明月に照らし出された秋の夜景の風趣を眺望して詠むところに主眼があった。周旋の句では、秋の月はもちろん、夏の月も同様に賞美されるものであると主張する。

五一一八 山かけて月や高橋ふもと川

長澄（月・秋）

〔作者〕 真野長澄。生没年等未詳。『西山三籟集』に名が見える。

〔語釈〕 ○かけるⅡかけ渡す。月が「掛かる」と橋が「架かる」の掛詞。○高橋Ⅱ安居橋に並んで下流の放生川にかかる反橋（表紙・裏表紙絵図参照）。高橋の「高」に月が「高」くかかることを掛ける。○ふもと川Ⅱ男山の麓を流れる放生川。

〔訳〕 男山には月が高く掛かり、高橋がふもとの放生川に架かっていることだ。

〔解説〕 当該句は、「かけて」「高」に掛詞を駆使した句づくりである。ただ、安居橋は平橋で、それと並んで下流に架かる高橋は反橋である。高橋は見栄えがよく目に付きやすく、他国の長澄は誤認したものであろうか。

五一一九 川はしやよるはこえしの秋の月

方盛（秋の月・秋）

〔作者〕 服部方盛。生没年等未詳。『昌程発句集』に名が見える。

〔語釈〕 ○よるはこえじⅡ夜は越えじ。帰る人などをひき留めること。惜別の情をこめる。ここでは橋が月をひき留める意。次の歌などの詞章を踏まえる。「夕暮れの籬は山と見えなむ夜は越えじとやどりとるべく 僧正遍昭」(古今集・離別・三九二)。「夢路にも夜は越えじとみるばかり枕のちりよ山とだになれ 藤原隆祐」(新統古今集・恋・一三二五)。

〔訳〕 この川橋は、夜、月を素通りさせない。そんなすばらしい秋の月であることだ。

〔解説〕 遍昭の「夕暮れの」の歌は、「夕暮れ時のまがきは山に見えてしまえばいいなあ。そうすればあなたも夜には越えないで、きつとここに宿をお取りになるはずだ」が歌意。このような和歌の詞章をふまえて、「秋の月」(仲秋の名月)がすばらしいため、すんなり橋を越させないことだとした句である。

五二〇 今宵たれ月袖にせん橋の上

正俊 〔月・秋〕

〔作者〕 土橋正俊。生没年等未詳。『西山三籟集』に名が見える。

〔語釈〕 ○今宵たれⅡ今宵誰。近世後期、誰は「だれ」ともいう。次の歌などの詞章を踏まえる。「こよひたれすゞふく風を身にしめて吉野の嶽の月をみるらん 源頼政」(新古今集・秋・三八七)。「こよひたれ真菅かたしきあかすらんそがの河原に千鳥鳴くなり 後京極摂政前太政大臣」(新統古今集・冬・六六一)。○袖にするⅡ粗略にする、冷淡にあしらうの意の慣用句。

〔訳〕 名月の今宵、この橋の上で、一体誰が月を粗略にするであろうか。誰もありはしない。

〔解説〕 正俊の句は、和歌の「こよひたれ」の詞章を踏まえながら、「袖にせん」と俗語を交えて詠んだところに趣向がある。なお、頼政の歌は後の芭蕉にも影響を与え、「今宵誰吉野の月も十六里」(元禄七年八月一五日)と詠んでいる。

五二二 月今宵所からかもはしの上

守經 〔月今宵・秋〕

〔語釈〕 ○月今宵Ⅱ月は今宵。月が最も輝くのは今宵、仲秋の名月であると、時間を極める。○所がらかもⅡ場所柄だなあ。その場所の特色であるよ。仲秋の名月の場所を、男山の安居橋と極める。次の歌を踏まえる。「大納言通方よませ侍りける石清水山歌合に社頭月といふことをよめる / ひさかたの月の桂のをとこ山さやけきかげはところがらかも ト部兼直」(続古今集・神祇・七〇〇)。

《訳》 月は、この安居橋の上で見る今宵こそが一層ひきたって見える。まことに場所柄もふさわしいことだ。

《解説》 月を見るなら、時は「今宵」の仲秋である。月を見るのに相応しい「所柄」なら男山である。これを受けて守経は、男山の中でも、放生川に架かる安居橋だと極めていいる。和歌をふまえた俳諧らしいウィットに富むものである。

五―三 此はしや空に渡すと水の月

正胤（しょういん） 〈月・秋〉

《校異》 底本は、上五「此川や」とするが、昭和本により「此はしや」と校訂した。

《語釈》 ○此はし〓ここでは安居橋のこと。謡曲「石橋」の詞章などを踏まえる。「石の橋。まづ御覽ぜよ橋もとに。歩み望めば此橋の。面は尺にも足らずして。下は泥梨も白浪の。虚空を渡る如くなり。（略）誰か此橋を渡るべき」。清涼山の石橋は、この世と文殊菩薩の浄土とを渡すもので、人が容易に渡れるものではない。なお、「橋」と「渡す」との縁語で仕立てる。○水の月〓放生川の水に映った月。放生川は地形的に流れが滞りやすく、月が川面に映る。

《訳》 この安居橋こそが川面に映る月を天空に渡すというのである。

《解説》 橋は、通常、そこを渡って対岸に渡る人のものである。だが、ここでは、川面に映る「水の月」を天空に渡すためのかけ橋で、非現実の世界を言い立てる。次の鵲の橋なども非現実的な趣向である。「かささぎのわたせる橋に置く霜の白きをみれば夜ぞふけにける 大伴家持」（新古今集・冬・六二〇）。

五―三 橋もりよ水は幾代の秋の月

梨杏（りきょう） 〈秋の月・秋〉

《語釈》 ○橋もり〓橋守。ここでは安居橋の番人。○水〓水の流れ。ここでは放生川の流れ。川の流れに歴史的な時間の流れを重ねる。○幾代〓どれくらいかの年月。また、長い年月。

《訳》 橋守よ、川の水はどれほどの長い年月、流れてきたことか。今宵、秋の名月もまた長い年月の間、輝きつづけていることだ。

《解説》 次の歌の宇治橋になぞらえて、安居橋の歴史の流れを重ねている。「としへたる宇治の橋守こととはん幾代になりぬ水のみなかも 清輔朝臣」（新古今集・賀・七四三）。「ちはやぶる宇治の橋守こととはん幾代すむべき水のながれぞ 藤原俊成」（長秋詠藻）。

五―二四 川はしは月まつ渡す霧間哉

久友 〈月、霧・秋〉

〔作者〕 西脇久友。生没年等未詳。『西山三籟集』に名が見える。

〔校異〕 底本は上五「川はしや」を「川はしは」に墨書き訂正する。

〔語釈〕 ○霧間＝霧の絶え間。霧のひま。謡曲「玉葛」の「川音きこえて里つゞき。奥もの深き谷の戸に。つらなる軒を絶々の霧間に残す夕かな」などがある。なお、俳諧『伊勢山田俳諧集』、慶安三（一六五〇）年成立の寄合に「霧間よりそろりとのぞくみせの内 / 目やみも市にたてる山本」もある。

〔訳〕 霧が晴れている僅かの隙に、安居橋は真つ先に月を渡すのである。

〔解説〕 月を眺めるに、霧は雲同様に邪魔になる。そこで、雲間ならぬ霧が晴れている僅かの間に、ここ安居橋では先ず月を渡し、橋の上にある月を見させることとした句である。「安居橋月」の題詠に沿って、差し障りがあっても先ず月を渡し、重責を全うすると橋を擬人化したところがこの句の手柄である。

五―二五 夜は長し月もやすらへ橋の上

安栖 〈夜長、月・秋〉

〔作者〕 真島安栖。生没年等未詳。『西山三籟集』に名が見える。

〔語釈〕 ○休らふ＝立ち止まる。佇む。「秋の夜の有明の月の入るまでにやすらひかねて帰りにしかな 太宰帥敦道親王」（新古今集・恋・一一六九）。「うちなびき春は来にけり青柳のかげふむ道に人のやすらふ 藤原高遠」（新古今集・春・六九）。

〔訳〕 夜は長い。人はもちろん、月も立ち止まってほしい。安居橋の上にかかった時にとどまってくれ。

〔解説〕 秋の夜長にじつくり時間をかけて月見をするのである。なお、芭蕉も『俳諧七部集』に「雲折く人をやすむる月見哉」（春の日）と詠んだ。雲の晴れ間に見える月に、人々は足を止めるのである。

五―二六 澄渡る穂幾めぐり橋の月

直條 〈穂、月・秋〉

〔作者〕 柏村直條。「はじめに」参照。

〔語釈〕 ○澄渡る＝濁りがなく、澄むこと。また、光がすみずみまでとどくこと。「渡る」「めぐり」「橋」は縁語による句作り。「月影の澄みわたるかな天のはら雲吹きはらふ夜はの嵐に 源経信」（新古今集・秋・四一一）。○幾めぐり＝いく

たび。何回。「いくめぐりすぎゆく秋にあひぬらむ変はらぬ月のかげをながめて 小侍従」(新勅撰集・秋・二九四)。

《訳》 澄渡っている秋の月は、幾たびも巡り巡って人の世を照らし、今も橋の上に輝いていることだ。

《解説》 直條の句は、長い年月にも変わることのない安居橋の月を詠むのであるが、上五の「澄渡る」に、雑念や迷いのなくなる意味合いが感じられ、仏教的な言説をふまえた「真如の月」が連想される。明月の光が闇を照らすように、真理が人の迷妄を破ることをいうものである。この「真如の月」は釈教に限らず、神祇にもみられる。なお、石清水八幡宮は神仏習合である。「これは鳴御祖明神の御歌となむ／三笠山雲居遙かに見ゆれども真如の月はここに澄むかな」(風雅集・神祇・二一〇四)。

第六景 月弓岡雪

月弓岡雪 解題

『考古録』巻七に「繼弓岡」の項目があり、次の記載がある。

今三鳥居在所の辺をいふと、沙門惠覚盛輪院愛染明王の勧進文中に、此名見えたり、繼弓と書り、元禄年間柏村直條が推挙の八幡八景に、月弓岡と書、按に倭名抄に槻を訓せり、強木弓の義也、唐韻に槻堪^レ作^レ弓と註せり、八幡宮は弓箭神にて坐は此所の名に呼か、或云、愛染明王の坐に依て名を負せる^{おほ}（略）

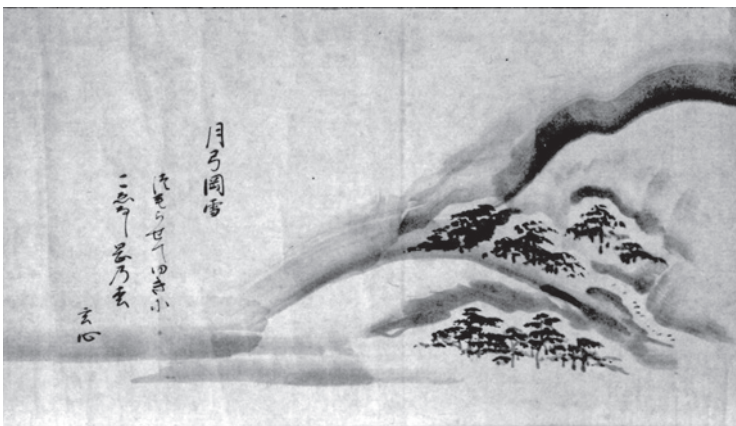
右の記述によれば、月弓岡は三の鳥居周辺となり、「月」は本来「槻^{つき}」（けやきの古名）で、弓を作るに堪える槻が生い茂っており、八幡宮が弓箭の神であることから、槻から弓を作った岡ということになる。また、三の鳥居近くに愛染明王が鎮座する愛染堂があったことでも知られる。愛染明王は弓を手にする仏像である（表紙・裏表紙の「八幡山案内絵図」参照）。

ところで、月弓岡の辺りに香炉峰があるという（考古録、慶応二年序『八幡山名所案内記』）。雪の景ならば、白居易の「香炉峰下新卜山居」（和漢朗詠集）が思い出される。

遺愛寺の鐘は枕をそばだてて聴き

香炉峰の雪は簾をかかてて看る

また、『枕草子』にも引用されているところである。和歌では、雪は冬の代表的景物であり、深山・山里・人里・海辺の降雪・積雪の情景や風情を朝・夜・宵に詠まれることが多い。社頭の雪、暁に初雪を見、雪に埋もるる古里の詠が好まれる。そして、降る雪がモノトーンで静寂な世界をもたらすものとして日本人の感性に働きかけてきた。なお、『南都八景』では「三笠山雪」である。



『発句絵巻』 昌陸画

漢詩八首、和歌六首、発句九句が撰集される。

六一 月弓岡雪

前大僧正道恕

天山既白月如弓

天山てんざん既にすで白くしろ月弓つきゆみのごとし

片々六花舞大空

片々へんぺんたる六花りつか大空たいくうに舞まう

巧弄化生神女手

巧たくみに弄ろう化か生しやう神女しんじよの手て

曉來幻出水晶宮

曉來ぎやうらい水晶宮すいしやうきうを幻出げんあつす

《作者》 道恕。寛文八年（一六六八）〜享保一八年（一七三三）、六六歳。真言宗の僧。法印大僧正、安井門跡となる。狩

野永納に画を学ぶ。

《押韻》 弓・空・宮（上平声一「東」韻）

《語釈》 ○天山＝天山山脈、あるいはその山をいう。李益の「從軍北征」に、「天山雪後海風寒し」。また李白の「塞下曲」に「五月天山の雪、花無くして祇だ寒さ有り」とある。天山は一名、雪山、白山という。ここでは積雪の男山をそれになぞらえる。○片々＝ひらひらと軽く飛ぶさま。○六花＝雪の別名。○幻出＝まぼろしのようにでる、ぼんやりと現れる。○水晶宮＝水晶で作った宮殿。雪景色の八幡宮をたとえたもの。

《訳》 男山はすでに雪が白く積もり空には弓のような月がかかり、雪がひらひらと大空に軽やかに舞っている。雪はたくみに翻りつつ変化して女神の手となって、曉には水晶の宮殿をまぼろしのごとく出現させたことだ。

六一 同

碧梧下散人惟參

遙射晴窓月半弓

遙はるかに晴窓せいそうを射いて月つきは半弓はんきゆう

晚風吹雪興無窮

晚風ばんふう雪ゆきを吹ふきて興きう窮きゆうまり無なし

岡頭殿閣如群鶴

岡頭かうとう殿閣でんかく群鶴ぐんかくのごとく

玉樹瓊林西又東

玉樹ぎよくし瓊林けいりん西にし又また東ひがし

〈押韻〉 弓・窮・東（上平声一「東」韻）

〈語釈〉 ○晴窓Ⅱ晴れた空の見える窓。明るい窓。

いう。 ○玉樹Ⅱ雪を被り玉のように美しい樹。 ○瓊林Ⅱ雪を被り玉のように美しい林。

〈訳〉 半月が遙かに輝き明るい窓を照らす、夕方の風が雪を吹いてこのうえなく趣深い。男山の頂と社殿は雪に覆われ多くの鶴が群れるようであり、あたり一面に玉のような樹や美しい林が広がっている。

六―三 同

前臨川玄中

月弓佳境幾吟望

月弓の佳境幾か吟じ望む

況又雪花添瑞光

況んや又雪花瑞光に添うるをや

非絮非鹽何所似

絮に非ず塩に非ず何の似る所ぞ

怪看白鳳集高岡

怪しみて看る白鳳高岡に集まるかと

〈校異〉 結句「白鳳」は、底本「白風」とするが、昭和本によって改めた。

〈作者〉 中山玄中。天龍寺二〇九世。幕府の朝鮮書契御用（以酹庵輪番）を務める。

〈押韻〉 望・光・岡（下平声七「陽」韻）

〈語釈〉 ○瑞光Ⅱめでたい光。吉兆の光。

○雪花Ⅱ雪の花、すなわち花のように美しい雪。 ○絮Ⅱ柳のわた、柳絮。柳

の実が熟し、その白毛が綿のように乱れ飛ぶもの。中国の晩春の風物詩である。

〈訳〉 月弓岡のこの佳き地に幾たびか景を眺め詩を吟じてきたが、今はまして雪が月弓岡を照らすめでたい月光に加わるのでなおさら趣深い。降る雪は柳絮でもなく塩でもなくいったい何に似ているのか、白鳳が高岡に集まっているのかといぶかしむことである。

〈解説〉 転句の雪を柳絮と塩に見立てるのは、『世説新語』の「言語第二」謝安の逸話を踏まえる。謝安が寒い日に子供たちと文章について論じていると雪が降ってきた。謝安が雪は何に似ているのかと問うと、兄の子の胡兒は「塩を空中に撒けば差擬すべし」と言い、兄の娘は「未だ柳絮の風に因って起こるに若かず」と答えたという。我が国の詩では、平安時代の勅撰漢詩集『経国集』大枝永野の「詠雪」に、「散絮風に因りて起こり、凝塩氣の任に来る」とある。

六一四 同

湘南座元

漫天飛雪逐風狂

漫天の飛雪風を逐いて狂い

路涉月弓蹤既亡

路に月弓を涉れば蹤既に亡し

玉樹參差無寸土

玉樹參差として寸土無く

人間亦自有崑岡

人間も亦自ら崑岡有り

〔押韻〕 狂・亡・岡（下平声七「陽」韻）

〔語釈〕 ○漫天Ⅱ天にはびこる、広くゆきわたる。

○狂Ⅱ氣勢がはげしいさま。猛烈なさま。

○參差Ⅱ長短高低入り交

じつてふぞろいのさま。並び続くさま。

○人間Ⅱ人の世、世間。

○崑岡Ⅱ崑崙山のごとき岡。崑崙山は中国の西方にあ

ると考えられた靈山。美玉を産するという。雪の積もった月弓岡を珠を産する崑崙山にたとえた。

〔訳〕 空一面に雪が飛び交い風を追うように激しく舞い、月弓岡を通り過ぎると足あとがすべて消えてしまった。見渡すと

雪が積もり美しい玉のような樹が乱立しわずかな土も見えない、人の世にもおのずと玉を産する崑崙山のごとき月弓岡があることだ。

六一五 同

鰲雲和尚

冬日躋攀詩料加

冬日躋攀すれば詩料加わる

月弓岡雪映南涯

月弓岡の雪南涯に映ず

廟前未到如神在

廟前未だ到らざるに神在すがごとし

巖樹皚然白幣花

巖樹皚然たり白幣の花

〔作者〕 鰲雲。天正一六年（一五八八）～延宝八年（一六八〇）、九一歳。妙心寺塔頭麒麟祥院の僧。妙心寺住持二二三三世。

〔押韻〕 加・花（下平声六「麻」韻）

〔語釈〕

○躋攀Ⅱよじのぼる。

○詩料Ⅱ詩を作る材料。

○皚然Ⅱ真つ白、清く白いさま。

○幣Ⅱ神にささげる礼物の

絹。

〔訳〕 冬の日男山に登ると詩の材料が多い、男山の南に位置するこの月弓岡に雪景色が映える。その景色はお社に着かない

前にすでに神がおわしますかのようにであり、いわおや樹は雪で清らかに白く神にささげる白幣となっている。

六一六 同

廬山別傳

月似彎弓照靈岡

つきはわんきうに似て靈岡を照らし

神光射雪明灼々

しんこうゆきを射て明灼々たり

廣寒時失水晶臺

こうかんときうなすいどうだい

爭使姮娥是處索

いかにか姮娥をして是の処を索めしむる

〈押韻〉 灼・索（仄入声一〇「葉」韻）

〈語釈〉 〇彎弓わんきう 弓をひきしぼる。

〇灼々 光が輝くさま、明らかなさま。

〇廣寒 〇廣寒宮。月中の宮殿の名。

失 〇時節を失う。季節外れ。

〇水晶台 〇水晶でできた高い建物。月光に照らされた降雪の月弓岡をたとえる。

〇姮娥 〇月世界に居る美人。もと羿の妻。羿が西王母に請うて得た不死の薬を盗んで飲み、仙人となって月中に奔り、月の精になったという。（淮南子）

〈訳〉 弓を引きしぼったような月が靈なる岡を照らし、神々しい光が雪に差し明るく輝いている。その月弓岡の様は月中にある廣寒宮が季節外れに水晶台として出現したようであり、月中に住む姮娥に廣寒宮と見誤らせ迷わせるほどである。

六一七 同

公方家儒者 野桃園 人見又兵衛

欲下層巒問月弓

そくらんをくだと欲して月弓を問う

同雲凍合各西東

どううんとうごう おおのせいたう

高岡耀德八垣外

こうこう ようとくはちえん げど

白鳳翔飛白玉宮

はくほうてうひ はくぎやうきう

〈作者〉 小野桃園。寛文一〇年（一六七〇）〜享保一六年（一七三二）、六二歳。本姓は小野、人見氏。号は桃園。通称又

兵衛。人見竹洞の長男。將軍綱吉の死後、その葬送から一周忌までの儀式を命ぜられた。

〈押韻〉 弓・東・宮（上平声一「東」韻）

〔語釈〕 ○層巒そうらん 重なり合つてそばだつ峯。 ○同雲 雪雲。どんよりして一つ色であるからいう。 ○高岡 月弓岡をさす。 ○八垣 八重垣に同じ。幾重にもめぐらした垣。

〔訳〕 重なりそばだつ峯を下りようとして月弓岡をたずねると、雪雲が凍え覆い東西に広がっているばかりである。ふと見ると高岡の輝ける神徳は八重垣の外にまでとき、その様は白鳳が白玉でできた宮殿を翔り飛んでいるようである。

六一八 同

六出輕飛粧月弓

六出りくしゅつかる輕と飛げつ粧あう月弓よそおを粧うう

岡頭瑞色自天公

岡頭こうとうの瑞色ずいしよく天公てんこうよりす

神宮佛閣無差別

神宮じんくう仏閣ぶつかく差別さべつすること無なく

都是瓊林瑤樹中

都すべて是瓊林けいりん瑤樹ようじゆの中なか

〔作者〕 大柱は常德寺の僧。生没年等未詳。『考古録』によれば、常德寺は、かつて男山の西麓、橋本の西遊寺（現存）の西隣にあつた曹洞宗の禅寺である。室町時代の中期、將軍足利義尚（常德院）に付き従う陣僧の春庭座元によつて開創された。寺の名はそれにちなむ。一峰和尚の時に、橋本に移されたという。一峰和尚は、豊臣秀吉と誼を通じたとのこと。文化一〇年（一八一三）に一度は焼失した。

〔押韻〕 弓・公・中（上平一「東」韻）

〔語釈〕 ○六出りくしゅつ 雪の異称。 ○天公 天帝。造物主。

○瓊林けいりん 雪を被つて玉のように美しい林。

○瑤樹ようじゆ 玉のように

美しい樹。

〔訳〕 雪が軽く飛び月弓岡を粧う、丘の上のめでたい雪の輝きは天から賜つたものである。神宮も仏閣も差別すること無く、全てが雪を被き玉のように美しい樹林のなかにあることだ。

六一九 同

庭田 金紫光祿大夫重條

くもりなき名に引かれてや雪も猶光なおをみかく月弓の岡

〔作者〕 庭田重條。慶安三（一六五〇）年生、享保一〇（一七二五）年没、七六歳。従一位、権大納言。金紫光祿大夫は、

正三位中納言。昭和本に「重條卿庭田中納言」とある。重條が権中納言の時期は、貞享元年から同四年、三五歳から三八歳の時である。

《語釈》 ○くもりなし〓雲などがからず晴れて澄んでいる様子。曇るは、月、光（影）、磨くの縁語。「くもりなき月日の光幾めぐり同じ雲ゐにすまんとすらん 二条為子」（玉葉集・賀・一〇九二）。 ○くもりなき名〓第四句に「光をみがく」とあり、志賀の歌枕の「鏡山」をいうが、ここでは月弓岡にとりなす。「鏡山くもらぬ秋の月なれば光をみがく志賀の浦なみ 安嘉門院高倉」（新後拾遺集・秋・三九〇）。「さざ波やちりもくもらずみがかれて鏡の山をいづる月影 藤原定家」（拾遺愚草・秋・二二六二）。 ○引く〓引き寄せる。弓の縁語。 ○光をみがく〓光り輝く様子。月光によって月弓岡の雪が磨かれ輝く様子。

《訳》 くもりのないという鏡山の名に引き寄せられたのであろうか。ここの月弓岡の雪は月の光で更に磨かれることだ。

《解説》 白く輝く雪が、月の光によってさらに磨かれたとし、その地が「月弓の岡」であると、この地を讃えた一首である。

六一〇 同

寛藤

此夕雲も晴行月弓の岡白妙に雪ぞつもれる

《語釈》 ○白妙〓梶の木の皮の繊維で織った白い布をいうが、ここでは、雪の白さを賞美して表現したもの。「ゆふしでの風に乱るる音さえて庭白妙に雪ぞつもれる 藤原公通」（新古今集・神祇・一八九〇）。

《訳》 この夕べは、雲が晴れわたり、月弓岡には白妙の雪が降り積もっている、この景色のすばらしいことよ。

六一一 同

還了

神垣のいつくはあれと月弓の岡へにかくる雪の白ゆふ

《語釈》 ○いつく〓斎く。心身を清めて神に仕える。ここでは清浄なさま。 ○白ゆふ〓白木綿。木綿は幣。木綿四手。木綿垂。神事、祭祀のとき、櫛に櫛から製した糸や紙を垂らす。ここでは、月弓の岡に降る雪を白木綿に見立てた。「くれなゐにみえし梢も雪ふれば白木綿かくる神無備の森 藤原忠通」（詞花集・冬・一五七）。「安居橋月」の五―一四参照。

《訳》 神垣はまことに清浄であるが、月弓の岡辺に降り積もった雪は、白木綿をかけたようにさらに清浄である。

六一三 同

是精 入江彦左衛門

跡たれてまもらむ御代も久堅の月弓の岡にふれるしら雪

〔語釈〕 ○跡たる＝跡を垂る。「垂迹」の訓読。本地である仏や菩薩が衆生を救うために、仮に神となつてこの世に現れること。「あとたれて幾世になりぬ神風や五十鈴の川の古き流に 藤原有家」(続拾遺・神祇・一四〇八)。○久方の＝月にかかる枕詞。久しいの意をこめる。

〔訳〕 帝のお治めになる世を守ろうと八幡神が現れたこの月弓の岡に、清浄な雪が降っていることだ。

〔解説〕 国家鎮護・都守護の神である石清水八幡宮の神域にふさわしいものとして、清浄な白雪の降る月弓の岡の景を讃えている。また、垂迹の神石清水八幡宮を詠んだ藤原行清の歌に、「をとこ山あとたれそめし袖の上のひかりとみえてうつる月かげ」(続拾遺集・神祇・一四一四)、「建仁元年十二月石清水社歌合の後鳥羽院御製に 八幡山跡たれそめししめの内になほよろづ世と松風ぞ吹く」(新続古今集・神祇・二〇九二) などがある。

六一三 同

直成母

光あひて人ことおしき月弓の岡にぞ積る木々の白雪

〔作者〕 柏村直成(三一二五参照)の母。直條の妻。寛文一一(一六七二)年八月二日生、宝暦二(一七五二)年一月三日没、八二歳。貞享元年、一四歳にて嫁す。

〔語釈〕 ○光あふ＝白雪と月光が光りあうこと。「月弓岡」から月光を言う。○人ことおし＝人こと愛し。人がたいそう

いとしく思われる。「人もをし人もうらめしあぢきなく世を思ふゆゑにもの思ふ身は 後鳥羽院」(続後撰集・雑・一二〇二)。

〔訳〕 白雪は月光と光りあつて、人がたいそういとしく思われる。ここの月弓岡の木々に積ったそんな白雪である。

〔解説〕 樹木に雪が降り積もる様子は、和歌に詠まれている詩材である。「雪降れば木ごとに花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきて折らまし 紀友則」(古今集・冬・三三七)

六一四 同

神垣^{かみがき}やあたりの岡は松^{まつ}松^{すき}の木々にもかくる雪のしらゆ^{しらゆう}ふ

直條^{なおえだ}

〔作者〕 柏村直條。「はじめに」参照。

〔語釈〕 ○かくる＝掛ける。垂らす。「木綿掛^{ゆうか}く」は慣用句。ここでは、松や杉の木に雪が降りかかる様子を白木綿に見立てた。○しらゆふ＝「月弓岡雪」六一一参照。

〔訳〕 月弓岡辺りの神垣の松や杉の木々に降りかかる雪の景色は、神事の白木綿のようである。

〔解説〕 松や杉の樹に雪が降り積もった様子を、神事に用いる白木綿に見立てる一首の発想は、先行する和歌にあるが、月弓岡だけではなく、周辺の樹木にまで神威が及ぶようであると視野を広げた。

六一五 月弓罡雪發句

玄心^{げんしん} 〈雪・冬〉

つもらせて雪に聲^{こゑ}なし岡^{まつ}の姿

〔作者〕 里村玄心。連歌師。元禄九（一六九六）年没。里村北家。玄俊の子。紹尹（一一一四参照）の兄。『発句絵巻』の「月弓岡雪」は当該句が載録されている。他に「名におふやも、のこびある花のかほ 玄心」（犬子集）、「薫ぬる風や扇のじやかう骨 玄心」（毛吹草）など。

〔語釈〕 ○雪＝「見わたせば松の葉しろきよしの山いくよつもれる雪にか有るらむ 兼盛」（拾遺集・冬・二五〇）。「風の聲をからする物や松の雪 道二」（毛吹草）。『俳諧類船集』には、「雪」の付合語として、寒^{さむ}る松風が出る。○声＝音。ものの気配。

〔訳〕 月弓岡の松に雪を積もらせて、その松を覆う雪に音は無く、静寂に包まれた岡であることだ。

〔解説〕 雪や岡の松を擬人化し、倒置法で表現している。男山に降る静寂に包まれた雪の世界を「雪に声なし」と表現したところが俳諧である。つまり、雪の持つ中古、中世的なイメージを近世的にとらえ直したと言える。

六一六 神のます岡邊や雪もしら幣^{にぎへ}

時春^{じしゅん} 〈雪・冬〉

〔作者〕 瀬川時春。連歌師。元禄一三（一七〇〇）年一〇月五日没。別号、桂林庵。昌佐の子。昌坪の父（三一―一二参照）。

柳宮連歌に出仕する。「言の葉の上に立けり花桜 時春」(豊国連歌発句集)、付句に「蟬なく山の空のすゞしさ 時春」(諸家月次聯歌抄)など。

〔語釈〕 ○ます〓坐す。いらつしやる。 ○しら幣〓白幣。しらにぎて。幣束へいそくを敬つていう語。神前に供える幣帛へいはくの一種で白いもの。御幣ごへい。おんべい。みてぐら。ぬさ。雪を御幣に見立てた句もある。「神垣の御幣なるらし竹の雪 永次」(毛吹草)。「此たびの雪や幣帛へいはく手向山 友勝」(崑山集)。また、「しら」は、雪の白と白い幣を掛ける。

〔訳〕 神がいらつしやる岡辺である。ゆえに、雪もそれに相応しく神に供える白い幣ぬさのように見えることだ。

〔解説〕 「このたびはぬさもとりあへず手向山紅葉の錦神のまにまに 菅原道真」(古今集・羈旅・四二〇)は紅葉を幣に見立てるが、時春の句は、降る雪を白幣に見立てた句である。

六一七 出いでて月しらま弓ゆみはれ岡の雪

昌札しょうさつ 〈雪・冬〉

〔作者〕 西山昌札。昌察。宗因の孫、宗春(二一一五参照)の子。後の昌林編連歌発句集に宗因、宗春、昌察の『西山三籟集』がある。

〔語釈〕 ○しらま弓〓白真弓。漆を塗らぬ白木の檀材まゆみで作った弓。白木の白と雪の白を掛ける。また、「弓」「月」「張る」は縁語。「水に影はりかへられや月の弓 定時」(毛吹草)。「見る人の目も張弓か三日の月 昌意」(同)。○はる〓張る。ここでは弓を張ったような月のこと。弓張月。

〔訳〕 月よ出て、白真弓のように張れ。月光に照らされて白さを増す月弓岡の雪である。

〔解説〕 一句中に、「月」「弓」「岡の雪」を詠みこんでおり、「月弓岡雪」という題に寄せた折句的な表現であると言える。また、古来より和歌の技法である枕詞「白真弓」を詠み込んだことが趣向である。

六一八 光あひぬ月ももと末岡すえの雪

素幽そゆう 〈雪・冬〉

〔校異〕 昭和本では、中七が「月のもと末」となっているがここでは採用しない。

〔作者〕 豊前国久保の人。「宿におりてくるよしもがな糸桜 久保素幽」(豊国連歌発句集)など。

〔語釈〕 ○光あふ〓光合う。ともに光る。照り合う。 ○もと末〓本と末。上と下。

〈訳〉 月の光も岡の雪の輝きも、上下呼応するように光合うことだ。

〈解説〉 石清水八幡宮では神樂が行われ、「もと末」として、神樂の元方と末方のイメージから表現されたとも言える。「ふけぬるかまゆみつきゆみおしかへしうたふ神樂のもと末のこゑ 二条為世」(続千載集・神祇・九二〇)

六一九 月弓につきてうるはし今朝の雪

順的 じゆんてき 〈今朝の雪・冬〉

〈語釈〉 ○月弓Ⅱ月弓岡のこと。槻弓を掛ける。 ○付くⅡ身や心によく合う。 ふさわしい。「月弓」と「付きて」の「つき」とが掛詞で、「月」「付き」の同音くり返し表現となっている。 ○うるはしⅡ輝くばかり美しい。

〈訳〉 槻弓を張ったように雪が積って、月弓岡の名にふさわしく、まことに美しい今朝の雪景色であることだ。

〈解説〉 実景を詠みながら、月弓岡に積った雪を、弓が張ったような形に見なして比喩的な表現を趣向した。

六一二 秋の色やこと月弓の岡のゆき

宗作 そうさく 〈ゆき・冬〉

〈語釈〉 ○秋Ⅱふさわしい時期。時宜。ちょうどその時。ここで「秋」を用いたのは、月のあしらいとしてのことである。 ○色Ⅱ美しい容姿。面白い趣。 ○ことⅡ殊に。きわだっているさま。

〈訳〉 時宜にかない、きわだって冬の興趣を引き立てている月弓の岡の雪である。

六一二 神代より今も御調や岡の雪

尚誠 しょうせい 〈雪・冬〉

〈語釈〉 ○神代Ⅱ神が統治し、活動していたという、人の世に先立つ時代。 ○御調Ⅱ神に供えるもの。「御調つむおほくら山はときはにて色もかはらずよろづ世ぞ経む よしのぶ」(拾遺集・神樂・六〇四)。

〈訳〉 神代より今に続くまでも、神に供える御調であることだ。ここ、月弓岡の雪は。

〈解説〉 雪は、土深くしみ込んで地下水となり野辺を潤す。五穀豊穰の基となるものである。ましてや、ここ月弓岡に降る雪は、石清水八幡宮の神に捧げるものとして特別な御調であると謳ったものである。

六一三 江の暮の名もや埋まん岡の雪

正従（雪・冬）

《校異》 底本の上五は「テキマツの暮」とあるので、昭和本によって校訂した。

《語釈》 ○江の暮＝江は、男山に隣接する木津川を指す。また、江の暮は、『瀟湘八景』の「江天暮雪」をふまえている。
○埋む＝隠す。人目に付かない。

《訳》 木津川が暮れようとする時、辺りの木々や堂宇だけでなく、「江天暮雪」の名をも埋もれさせるのだろうか、そんな月弓岡の雪であることだ。

《解説》 夕暮れや雪はあらゆる物を埋もれさせる。ここでは、辺りの樹木や鳥居、堂宇などばかりではなく、「江天暮雪」の名をも埋もれさせると詠んだものである。「江の暮」「雪」とあれば『瀟湘八景』の「江天暮雪」が思い浮かぶのが当時の常といえる。月弓岡と木津川とを俯瞰的に捉え、夕暮れの雪景色を謳ったものといえる。

六一三 積りてや月を常なる岡のゆき

直條（ゆき・冬）

《作者》 柏村直條。「はじめに」参照。

《語釈》 ○積る＝年月が積もること。雪が積もることを掛ける。 ○月＝月光と年月とを掛ける。 ○常＝いつも変わらないでいるさま。永久不変。

《訳》 年月が積もるように降り積もった月弓岡の雪に、いつもと変わらず月が照らすことだ。

《解説》 直條の句は、「世の中は何か常なるあすか川昨日の淵ぞ今日は瀬になる 詠み人知らず」（新古今集・雑・九三三）を踏まえた句づくりである。地名の飛鳥と時間の明日とを掛け、「何か」の反語表現を用いながら、常ならぬものとして「常なる」を用いる。これを直條は、常ならぬという歌の常套的な世界観を敢えて言葉どおりの「常なる」とパロディ化した。

第七景 橋本行客

橋本行客 解題

「八景」の嚆矢となった『瀟湘八景』には「行客^{こうかく}」という題はなく、よく似たテーマとして「帰帆」がある。『南都八景』には「轟橋旅人」が、小倉実遠の和歌が、

うち渡る人目も絶えず行駒のふみこそならせとゞろきの橋

とあり、人通りの多い橋であった。その後、南山城の八景に限れば、『祝園八景』（享保一二年（一七二三））に「行人」がある。橋本が「行客」で括られるのは、港津だけでなく、街道が通る宿場町であったからである。当然往来する人は多い。

日本の「八景」に、行客や旅人、行人が見られるのは和歌に羈旅歌の部立てがあるように、古来、日本人が旅をテーマの歌を好んで詠んだからに他ならない。遷都、行幸とその従駕、転任、配流、修行、寺社参詣、遊山、湯浴みなど。旅中での感懐歌のほか、残留するものが旅先の身の上を思いやる歌もある。

『考古録』巻一二に「橋本町」の項があり、次のように紹介される。

雄徳山西麓淀河の東南、科手郷^{しなでこう}の内にて、往昔山崎橋彼地より此地へ懸渡されてより、此名を呼り（中略）、又橋本津とも古く云り、古者^は西国へ下るは山崎を出船の所として、今の摂津国大阪の如く堀江など、大河に連続せる一都会也（以下略）。

八幡八景は、石清水八幡宮神域の景が対象となるが、橋本の町も八幡庄内にあり、八幡山麓の町場を含めた八景となった。

漢詩八首、和歌六首、発句一〇句が撰集される。



『発句絵巻』 昌純画

〔参考〕

二〇一四年に始まった京阪電車橋本駅前の再開発によって橋本駅周辺は急ピッチに改造されつつあるが、一方では旧街道の面影も残しており、景観保存が課題となっている。写真の撮影は、二〇一三年頃。



七―一 橋本行客

橋本郵程路遠哉

乗傳冒曉共徘徊

玉虹衆客富多景

聚散若雲幾往來

はしもとゆうていみちとお
橋本郵程路遠きかな

でんのかあつきおか
伝に乗り曉を冒して共に徘徊す

ぎようこうかくおお
玉虹客衆く多景に富む

しゆうさんくも
聚散雲のごとく幾くか往來する

高辻なかつじ式部大輔しきぶのたゆうとよなが豊長

〔校異〕承句「冒」は、底本「昌」とあるが、昭和本によつて改めた。

〔作者〕高辻豊長。寛永二年（一六二五）―元禄一五年（一七〇二）、七八歳。権大納言式部大輔正二位。高辻家は、菅原道真の子孫である高辻是綱（一〇三〇―一一〇七）を祖とする堂上家である。

〔押韻〕哉・徊・來（上平声一〇「灰」韻）

〔語釈〕○行客＝旅人。 郵＝宿場。 ○乗伝＝駅馬に乗ること、またその馬。 ○玉虹＝美しい虹。ここでは橋の美称。

橋本には橋は絶えてなかったが、詩として橋を描いた。

〔訳〕橋本宿への道のりは遠いものであったなあ、宿に着き一夜を過ぎし馬に乗り朝早くから連れ立って見て回る。美しい

橋の上には旅人が多く景勝に富む、雲のごとく人が集まり散じるがいったいどれくらいの人々が行き交うことか。

七二 同

香雪兼頤

纔隔片雲橋本郷

纔かに片雲を隔つ橋本郷

可憐羈客自群芳

憐むべし羈客自ら群芳

腰包頭笠誰能辨

腰包頭笠誰か能く弁せんや

堵蟻相逢來往忙

堵蟻相逢い來往忙し

〈押韻〉 郷・芳・忙（下平声七「陽」韻）

〈語釈〉 ○可憐Ⅱああ。感動の気持ちをあらかわす語。

○群芳Ⅱ群衆。ここでは多くの旅人を言う。 ○腰包Ⅱ腰につける

袋、きんちやく。 ○堵Ⅱ道。

〈訳〉 ちぎれ雲の浮かぶ空のもとに橋本郷が見える、ああ、色とりどりの旅装を整えた旅人達の群がるごとき多さよ。腰に包みをつけ笠を被りいったい誰を見分けることができるか、道を往来する蟻が互いに出会いながらせわしく行き来しているようである。

〈解説〉 男山から橋本の里を眺めて詠んだ詩である。旅装を整えた人々が多く行き来する様を、せわしく動く蟻のようであると歌い、俗事に齷齪する人の営みに感慨を抱いている。

七三 同

臨川中収

遼見橋邊行客鬧

遼かに橋邊を見れば行客鬧がし

他郷千里思悠悠々

他郷千里思い悠々たり

可憐世上利名者

憐むべし世上利名の者

南去北來何日休

南に去り北より來たり何れの日か休まん

〈押韻〉 悠・休（下平声一一「尤」韻）

《語釈》 ○闊Ⅱさわがしい。にぎやかなさま。 ○他郷Ⅱよその土地。異郷。 ○利名Ⅱ名利に同じ。平仄を合わせる（二字目・六字目の平仄を同じにする）ために利名としている。

《訳》 はるかに橋の辺りを眺めやると多くの旅人でにぎやかである。彼らは故郷を離れはるばる遠い道のりをやって来たのかとしみじみと思うことだ。ああ、世間の名誉や利益を求める人たちよ、南に去り北からやって来ていつ休むことか。

七―四 同

春雨秋風橋本客

春雨秋風橋本の客

来々去々不暫休

来々去々暫くも休まず

等閑忘却家山路

等閑に家山の路を忘却し

名利塵中空白頭

名利の塵中に空しく白頭たらん

《作者》 陽岑宗昕。承応三年（一六五四）―宝永元年（一七〇四）、五一歳。大徳寺二六四世。

《押韻》 休・頭（下平声一一「尤」韻）

《語釈》 ○等閑Ⅱなおざりにする。いいかげんにする。 ○家山Ⅱ故郷。 ○塵中Ⅱけがれた世の中。 ○空Ⅱむなしく。いたずらに。 ○白頭Ⅱしらが頭。年老いてゆくこと。

《訳》 春雨が降っても秋風が吹いても橋本には旅人がたえず、来ては去り来ては去りしばらくも止むことがない。彼らはなおざりに故郷への路を忘れ去り、汚れた世に名誉と利益を求めむなしく年老いてゆくのだろう。

七―五 同

河津橋断舊蹤残

河津橋断えて旧蹤残る

萍水相逢子細看

萍水相逢いて子細に看る

滿目風光堪畫處

滿目の風光画処に堪えたり

鳩峯映浪艇登巒

鳩峯浪に映り艇巒を登る

《押韻》 残・看・巒（上平声一四「寒」韻）

隱溪和尚

陽岑座元

〔語釈〕 ○河津かしん 舟の寄る河の岸。渡し場。 ○旧蹤 旧遊の地。 ○萍水へいすい 浮草と水。転じて流浪しているものたとえ。

〔萍水相逢〕は、旅で偶然知り合いになることをいうが、ここでは、旅人である作者が再び橋本を訪れた意として解する。

○風光 ながめ。景色。 ○画処 画をかく処。 ○巒 峰

〔訳〕 旧遊の地橋本の渡し場は橋が落ちても昔のままに残り、旅人である私は再びこの地を訪れしげしげと眺めることだ。

見渡すかぎり景色は絵に描きたいほどに美しく、男山が波に映り川をゆく小舟がまるで峯に登るように見える。

〔解説〕 橋本に再び訪れた感慨を詠む。橋の落ちたままの橋本の景色が詩情を誘う。男山が影を映す川面に小舟の行き来する景色を、舟が山を登ると表現している。

七一六 同

即中和尚そくちゅうおしょう

一條古路順流開 いちじょうこうろなながしなが

多少雲遊行也回 たしょううんゆうゆまたかえ

遙自神祠庭上望 はるしんしていじやうのぞ

暗疑題柱動群來 ひそうたがはしらむれうご

〔押韻〕 開・回・來（上平声一〇「灰」韻）

〔語釈〕 ○多少 多いこと。 ○雲遊 いてもなく旅すること。 ここでは旅人を言う。 ○題柱 〔安居橋月〕五―三語釈参照。

〔訳〕 一筋の古い道が川の流れに沿って通じ、多くの旅人が自由に行つてはまた帰る。遙かに八幡宮の庭からそれを眺めていると、功名を得ようとして人々が群れを成しているのかと思えてくるのである。

七一七 同

錦里木貞幹 木下平之丞きんりぼくさだまさきのしたへいのすけ

百年涉世有橋横 ひゃくねんよわたきょうおう

南去北來如蟻行 みなみきたきたあり

山上石泉清似鏡 さんじょうせきせんきよかがみに

幾人至此照塵纓 いくたりここいたじんえい

〔作者〕 木下順庵。きのしたじゅあん 元和七年（一六二一）～元禄十一年（一六九九）、七九歳。号は錦里、氏は木下、名は貞幹（さだまさ・

さだもと）、通称は平之丞（允）。儒学者。京都錦小路の出身。加賀金沢藩前田利常に仕え、後幕府の儒官となり五代將軍徳川綱吉の侍講をつとめた。門下から新井白石・室鳩巢・雨森芳州などを輩出した。木下寅亮（二一七参照）の父。

〔押韻〕 横・行・纓（下平声八「庚」韻）

〔語釈〕 ○百年Ⅱ人の一生をいう。 ○涉世Ⅱ世をわたる。 ○石泉Ⅱ石清水八幡宮の石中から湧く清水の泉。 ○塵纓Ⅱじんえい塵のついた冠のひも。転じて俗世の官職。ここでは俗世の名利を求める人の心をいう。

〔訳〕 世の人々は一生を橋辺の俗世に過ごし、南に去り北より来てあくせくと蟻のごとくせわしげにうごく。男山の上に石から湧く泉は鏡のように清らかであるが、いったい幾人が山に登り世俗に汚れた自分を鏡にうつすごとく省みるだろうか

七―八 同

別峯山 山彦座元さんげんざげん

店檐櫛比江流てんえんしつびこうりゅう 店檐櫛比江流に傍う

水陸交加暫くも休すいりくかうかしほら 水陸交加暫くも休まず

去國襟懷幾度くこに 国を去り襟懷幾度なるかを知らん

馬蹄船脚路悠々ばていせんきくみちゆうゆう 馬蹄船脚路悠々

〔押韻〕 流・休・悠（下平声一一「尤」韻）

〔語釈〕 ○櫛比Ⅱくしの齒のようにすきまなく並ぶこと。 ○水陸Ⅱ水路と陸路。 ○交加Ⅱ入り交じること。 ○襟懷Ⅱ

心中の考え。むねのうち。

〔訳〕 店の軒が川に沿って隙間無く並び、水路と陸路が入り交じってしばらくも人の行き来の止むことがない。故郷を去ってからいくたびの年が経っただろうか、馬や船で行こうとも故郷への路ははるか遠くである。

七―九 同

竹内 刑部尚書惟庸たけのうち ぎょうぶしょうしゆいよう

聞渡る名のみ朽せて橋本の里は往來の舟よはふなりききわたるなのみくちせてはしほんのりはいきまのふねよはふなり

〔作者〕 竹内惟庸。寛永一七（一六四〇）年九月二日生、宝永元（一七〇四）年七月一九日没、六五歳。公卿。名は能治・

当治。俊治の子。仕えて従二位刑部卿に至る。刑部は司法官、尚書は文部官。昭和本には「惟庸卿三位」とある。天和三（一六八三）年従三位、元禄三（一六九〇）年三位に除せられている。家格は半家（堂上家）、家業は弓箭と笙と和歌。惟庸は冷泉派の歌人で歌に秀でていた。極官は正三位非参議であったが、孝治（惟庸の祖父）、惟庸、惟永は従二位に任じられた。江戸時代の家禄は一八七石。

《語釈》 ○聞渡る＝世間に知れ渡っていること。「渡る」は「橋を渡る」を掛けている。また、「渡る」と「橋」は縁語。

○橋＝「聞渡る名のみ朽せで橋」は、名前のみ残り、すでになくなっていく名高い橋。ここでは、橋本にかつてあった橋。「橋」と「橋本」は掛詞。また、「聞渡る名のみ朽ちせで」は橋の序詞。○橋本の里＝橋本の駅。京と大坂の境にある里。

京、大坂間の交通の要所で町は繁盛し、遊女も常住していた。○往来＝いきき。ゆきき。行ったり来たりすること。ここでは、橋本を行客（旅人）が行き来する。「山遠くしては雲行客の跡を埋む、松寒くしては風旅人の夢を破る 作者未詳」（和漢朗詠集）。○よはふ＝呼ばう。呼ばれる。何度も呼ぶこと。

《訳》 橋本の橋は朽ち果てても、「橋本」の地名は残り、知れ渡っている。そんな橋本の里は、行き来の舟があちこちに呼びかけて賑わっているよ。

《解説》 橋本の橋は、対岸の山崎とを結ぶ山崎橋である。山崎の油神人が石清水八幡宮に灯油を献上するためのものでもあった。古くは、神亀二（七二五）年に行基が再架橋している（行基年譜）。また、「山崎橋 延喜式（九二七成立）および文徳実録（八七九成立）に出たり。今は舟わたしとなる」（淀川兩岸一覽）とある。また、文禄元（一五九二）年に「山州橋本新造橋」と再興されている（惺窩先生文集）。このように橋本の橋は造営、消失を繰り返し、当該歌の成立当時は消失し、舟渡しであった。しかし、橋本の橋は、地名の「橋本」に残っているというのである。

なお、「名のみ朽ちせで」残るといふ表現は、摂津の長柄橋の故事を借用する。『住吉詣記』に「長柄といふ所につきぬ、いにしへは此所に橋ありて人の行き通ひしが今は橋の跡としては僅に古杭ばかりなり。誠やなき例に人の引くめるは理にぞ。朽ち果てし長柄の橋のながらへて今日に逢ひぬる身ぞふりにける 足利義詮」とある。和歌では、「世の中にふりぬるものは津の国の長柄の橋と我となりけり よみ人知らず」（古今集・雑・八九〇）。「朽ちもせぬ長柄のはしの橋柱久しき事の見えずも有るかな 平兼盛」（後拾遺集・冬・四二六）がある。

七一〇 同

好春こうしゅん

とたえなく人のゆきかふ橋もとは夕暮かけて駒いはふ也

〔校異〕 底本は二句目を「人の交かふ」とするが、昭和本により「人のゆきかふ」と校訂する。

〔語釈〕 ○とたえ〓途絶え。 ○夕暮かけて〓日の暮れるまで。「かけ」は時間をかけると橋を架けるの掛詞。 ○いはふ〓いばう。嘶ゆ。嘶える。馬が嘶く。馬が鳴く。

〔訳〕 途絶えなく旅人の行き来する橋本では、日の暮れるまで馬も鳴いている。賑やかで活気のあることだ。

〔解説〕 往來の絶えない賑わいのある様子は、『南都八景』の「轟橋旅人」も同様である。「打渡る人目も絶えず行く駒の踏みこそ鳴らせ轟の橋 小倉前中納言藤原定継」

七一 同

善阿ぜんあ

岸たかき川辺すゝしと旅人もしはし休らふ橋本の里

〔語釈〕 ○岸たかし〓底本初句「岸たかき」は、昭和本では「岸かけの」とする。岸の陰の涼しい場所の意ともとれるが、太閤堤などの名残として、岸の高い様子とする。 ○すずし〓暑苦しくなく気持ちがい。 「風ふけば川辺すずしくよる波

のたち返るべき心地こそせね 藤原家経」(詞花集・夏・七五)。 ○休らふ〓休息する。「ほととぎすしばし休らへ菅原や伏見の里の村雨のそら 藤原定家」(続千載集・夏・二六五)。

〔訳〕 岸が高く、川岸は涼しいと、旅人はしばらく休む橋本の里であることだ。

〔解説〕 「岸高き」というのは、宇治川の太閤堤の名残であろう。堤は川の右岸に、豊臣秀吉によって築造されたものである。秀吉は、文祿三(一五九四)年に完成した伏見城築城を契機として、宇治川・淀川等の付け替えなど大規模な治水工事を行った。堤は一六世紀末に築造されたのち、氾濫のため埋没した。

七一二 同

義次

誰^{たがため}に夕暮かけて橋本やいそぐ往来^{ゆきき}の人も絶^{たえ}せず

〔語釈〕 ○誰がために誰のために。「暮れはてぬ帰へさは送れ山桜たがために来てまどふとか知る 源俊頼」(千載集・春・六)。 ○夕暮かけて「橋本行客」の和歌(七一〇) 語釈参照。

〔訳〕 一体誰のために夕暮れまでにと急いでいるのだろうか。橋本は、そんな往来の人が絶えないところだ。

〔解説〕 「いそぐ旅人」を詠んだ歌がある。旅人は朝に、夕に忙しいものではある。「関が戸もはや明方の馬の音におどろかされていそぐ旅人 柳原資明」(新拾遺集・羈旅・七七六)。「清美がた関の戸ならで夕しほのささぬさきといそぐ旅人 正親町三条実継」(新続古今集・羈旅・九四四)。

七一三 同

院卓母

行^{ゆき}かへる袖も数多^{あまた}に遠近^{おちこち}の人打渡^{うちわたる}る橋本のさと

〔作者〕 紀院卓の母。名は帰白。直條の祖母が九三歳で身罷りし時、悼歌を贈る。院卓は、三一二参照。

〔語釈〕 ○袖Ⅱ行き交う人々を袖で表現した。「袖触れ合うも多生の縁」の成語も連想される。「旅人の袖吹きかへす秋風に夕日さびしき山のかけはし 藤原定家」(新古今集・羈旅・九五三)。 ○渡るⅡ橋の縁語。

〔訳〕 行く人や帰る人も数多く見え、遠方の人も近くの人も橋を渡ることだ。この橋本の里は。

〔解説〕 多くの人々の行き交うさまを、袖で表現した。行き交う人々の袖から、豊かな色彩感、遊女、人々の触れ合いなどが想像される。繁華な水辺の里橋本の賑わいを描写する。

七一四 同

直條

行^{ゆく}船^{ふね}もこゝに寄せよとうかれ女^{うかれめ}の掛^かる情^{なさけ}やはし本の里

〔作者〕 柏村直條。「はじめに」参照。

〔語釈〕 ○うかれ女Ⅱ浮かれ女。歌や舞で人を楽しませ、また売春をする女。遊び女。「宇加礼女 遊女」(十卷本和名類聚抄)。ここでは橋本の遊女。「うかれ女の浮かれて歩くたびやかた住みつきがたきものにぞありける 藤原季経」(夫木抄・抄)。

傀儡・雜・一六七〇三)。○かくる情けⅡ男女の情愛。情けをかける。ここでは、遊女が情けを売るのである。情けを掛けると橋を架けるの掛詞。

〔訳〕 川を行く船に向かい「ここに寄せよ」と遊女たちが情けをかけることよ。ここ橋本の里は。

七一五 同

今朝橋もとけし跡ある往来哉

宗仙 〔しも・冬〕

〔作者〕 柏村宗仙。昭和本に「直能 柏亭宗仙齋」とある。柏亭宗仙齋は直能の号である。宗得（直重）の子、直條の父。一一二七参照。

〔語釈〕 ○橋もとけしⅡ「はしもとけし」で、「橋本」と「霜とけし」の掛詞。○跡Ⅱ人が行き来した足あと。痕跡。

〔訳〕 今朝は、霜が解けた跡がある。たくさんの人が朝早くから行き来した橋本であることだ。

〔解説〕 往来の多さを霜解けで示し、「今朝の霜」の歌語に橋本を掛詞で詠みこんだ句である。「今朝の霜」を詠んだ歌に、「紅葉ばはおのがそめたる色ぞかしよそげにおけるけさの霜かな 慈円」（新古今集・冬・六〇二）などがあるが、当該句は霜が解けたところに焦点を移した。

七一六 旅人の道のはてなき春日哉

道武 〔春日・春〕

〔語釈〕 ○はてなしⅡ果てしない。際限がない。○春日Ⅱはるひ。春の日。

〔訳〕 ここ橋本を通る旅人にとって、道のりが果てしなく、一日の長い春の日であることだ。

〔解説〕 東海道は、五三次が定説だが、現在では大阪京橋に至る五七次説が有力になってきており、京都三条大橋と大阪京橋の間には伏見宿、淀宿、枚方宿、守口宿があった。四宿が開かれたのは、一七世紀前半ごろと考えられるが、京街道そのものは、豊臣秀吉が、文禄五（一五九六）年、淀川左岸に毛利輝元・小早川隆景・吉川広家などの諸大名に命じて、堤を築かせた。文禄堤、太閤堤とも呼ばれる。橋本は、文禄堤の上に整備された淀宿と枚方宿とをつなぐ宿場町として栄えた。

七―一七 里は川邊霞の底のゆき、かな

純安 〔霞・春〕

〔語釈〕 ○川辺＝橋本の里の前を流れる淀川の辺り。

○霞の底＝たちこめている霞の最も奥。「花はみな霞の底にうつろ

ひて雲に色づくをはつせの山 藤原良経（新勅撰集・春・一一四）。「くれて行く春の残りをながむれば霞のそこにありあけの月 式子内親王」（玉葉集・春・二八六）

〔訳〕 橋本の里は川辺にあつて、立ち込めている霞の奥に人々の往き来があることだ。

〔解説〕 「霞の底」という歌語に花や月ならぬ「ゆきき」を詠みこんだところがこの句の趣向である。

七―一八 行人をつゝ、みの上の霞哉

義真 〔霞・春〕

〔語釈〕 ○行人＝ゆくひと。こうじん。旅人。行客。「ゆく人を招くか野辺のはなすすき今宵もここに旅寝せよとや 平忠盛」（金葉集・秋・二三八）。○堤＝土手。堤防。「包み」の掛詞とされている。

〔訳〕 旅人を覆い隠すように包み、堤の上に立ち込める霞であることだ。

七―一九 橋は絶て霞を渡る往来かな

西遊寺 善譽 〔霞・春〕

〔作者〕 善譽は、現西遊寺の住職によれば、寛文四（一六六四）年生、寛延四（一七五二）年没で、西遊寺第一〇世の住職。表門や鐘樓堂の建立や田畑の買得に尽力があつたとのことである。西遊寺は、橋本の里にある、徳川家康からの朱印状を受ける名刹である。京阪電車橋本駅の大坂方面行きの改札口を出るとすぐにその姿を見せる。

〔語釈〕 ○橋＝橋本の里と対岸の山崎に掛かる橋で、山崎橋。七―九の解説参照。橋と渡るは縁語。○霞を渡る＝霞んだ

川を舟で渡る意の歌語。「あさぼらはけはまなのはしはとだえして霞をわたる春の旅人 藤原家良」（続後撰集・羈旅・一三六）。「心あてにむかひの里やながむらん霞をわたる淀の川船 藤原隆祐」（石清水若宮歌合 寛喜四年・二七）。「川橋は霞をわたる往来かな 宗春」（西山三籟集・三二七）。

〔訳〕 対岸の山崎と橋本の里をつなぐ橋は絶えてしまい、霞の中、渡し船で渡る往き来であることだ。

〔解説〕 本句は、造営と消失を繰り返した山崎橋の歴史的背景をふまえ、今、橋本と山崎を結ぶ橋は消失し、代りに渡し舟が霞んだ川に往来することだと思いをめぐらせている。

七二〇 うす雪は霜ともみちのゆき、哉

宗兼（うす雪、霜・冬）

《語釈》 ○うす雪は霜と「うすゆきはしもと」に「橋本」を掛ける。また、「雪」と往来の「往」を掛ける。○霜ともみち〓霜が降りると紅葉する。「紅葉はおのがそめたる色ぞかしよそげにおけるけさの霜かな 慈円」（新古今集・冬・六〇二）。「みち」に往来の道を掛ける。○ゆきき〓往来。行ったり来たりすることから、繰り返すこと。

《訳》 うす雪とは、霜が降り紅葉するのを繰り返したのちに降るものだ。

《解説》 うわべは、叙景句のように見せて、「雪」と「往き」、「もみち」と「道」、「は霜と」に「橋本」を巧妙に織り込んだ言葉遊びの句である。うす雪は、薄く降り積もった雪で白いものである。霜も白いが、似て非なるところに言及してみたのである。なお、雪は水蒸気が空中で氷形になったもので、霜は水蒸気が地表に接触した時に氷形になったものである。

七二二 春の川邊と、こほりなき往来哉

覚慧（春・春）

《作者》 昭和本では「覚恵」とあり、慧と恵とは同音である。

《語釈》 ○とどこおりなし〓滞ることがない。「氷」を掛ける。

《訳》 春の川辺。氷も解けて滞ることもない往来だ。

《解説》 春になったので、人の行き来が滞ることもなければ氷することもないと、掛詞を楽しみながら春の喜びを詠んだ句と言える。

七二三 船よはふ霧に聲ある川邊哉

鉤玄（霧・秋）

《語釈》 ○よばふ〓呼ばう。呼ばれる。何度も呼ぶ。昭和本では、「舟やよぶ」。「うちがはの河瀬も見えぬ夕霧にまきのしま人ふねよばふなり 藤原基光」（金葉集・秋・二四〇）。「山城のみのさとに妹をおきて幾たび淀に舟よばふらん 源頼政」（千載集・恋・八八七）。○霧〓川霧。平安時代以降は春立つものを霞、秋立つものを霧という伝統的季節美が成立した。

《訳》 あちらこちらで船を呼ぶ声が霧の中から聞こえてくる。橋本はそんな川辺であることだ。

《解説》 岸辺が霧で覆われているとき、声がする方向が船着き場である。橋本に渡し舟が行き交っていた時期、対岸の山崎

と橋本間は中州があり、そこを乗り継いで行き来していた。舟は乗客があれば舟を出したらしく、中州から或は対岸から大声を出して舟を呼んだ。鉤玄の句は、渡し舟か淀川を行き来する舟か定かではないが、声だけが便りであったことが想像される。

七二三 旅衣たびころもこぬ秋ときをしる川邊哉

利方りほう 〈こぬ秋・夏〉

《語釈》 ○旅衣Ⅱ旅にでること。「旅衣たち行く浪ちとほければいさ白雲のほどもしられず 法橋齋然」(新古今集・羈旅・九一五)。○こぬ秋をしるⅡ来ぬ秋で夏の季語となる。また、「秋」は時節。時節をわきまえて、知っているのは川辺、水の流れである。「年ごとに雲ちまどはぬかりがねは心づからや秋をしるらん 躬恒」(後撰集・秋・三六五)。「うつろはぬ何流れたるか竹のいづれの世にか秋をしるべき 読み人知らず」(後撰集・雑・一二七二)。

《訳》 旅立することしよう。季節はまだ秋ではないが、時節をわきまえているのは橋本の川辺である。

七二四 水は行ゆきて夏の日暮やどす宿り哉

直條なおえだ 〈夏・夏〉

《作者》 柏村直條。「はじめに」参照。

《語釈》 ○日暮すⅡ終日を過ぐす。○宿りⅡ旅先で泊まること。仮の宿り。

《訳》 目の前を水が流れてゆく夏の一日、そんな流れに人生を見るかりそめの旅の宿りであることだ。

《解説》 『論語』の「子、川の上ほとりに在ありて曰く、逝く者は斯かくの如きか。昼夜を舍やめず。」(子罕第九の一七)。また、鴨長明の『方丈記』の「ゆく河の流れは絶えずして、しかもとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人とすみかと、またかくのごとし。」などから無常を感じているのであろう。

第八景 大乘院鐘

大乘院鐘 解題

鐘は、「八景」に数多く登場する。『瀟湘八景』には「煙寺晚鐘」、『南都八景』には「東大寺鐘」、『近江八景』には「三井晚鐘」がある。南山城地域でも、『瓶原八景』（一七〇九年頃にまで成立）の「海住山鐘」、『祝園八景』（一七三三年成立）の「常念晚鐘」、『狛八景』（一八六〇年頃成立）の「松尾晚鐘」と続く。

他の詠題が専ら視覚に訴えるものであるのに対し、鐘の音は聴覚に訴えるものである。そのことで八景に変化をもたらし全体の調和がとれている。また、他の景物が花、月、雨や雪など四季を表現しているのに対し、鐘の音は、釈教の世界を描いているという点も意義深い。ちなみに、和歌の部立は四季、恋、神祇、釈教、羈旅、離別などである。漢詩では、「故蘇城外の寒山寺 夜半の鐘声客船に到る」（楓橋夜泊）の寒山寺の鐘や、「香炉峰下新卜山居」の遺愛寺の鐘が知られている。

大乘院は、表紙・裏表紙の『八幡山案内絵図』（慶応二年冬序）や、文化一一（一八一四）年の年紀を持つ「石清水八幡宮境内図」に記されているが、鳥羽伏見の戦いに際し、周囲一帯は灰燼に帰し、今は、善法律寺の境内に移された五輪塔に名残を残すのみである。傍らに記される観音堂や神宮寺、一の鳥居の位置関係から現在の京阪石清水八幡宮駅の辺りにあったものと思われる。

『考古録』巻一一に、「大乘院」の項目があり、往古より、近くに建つ神宮寺と同院が混同されることがあったとする。また、白河天皇の時代、社務、頼清法印が「丈六弥陀を本堂に安置す」とのこと。弘安四年（一二八二）、元寇に際し、興正菩薩（叡尊）が石清水に籠り、「異賊降伏祈願」を為した折、同院に一時住持し、そのこともあつて永仁六年（一二九八）には「武門懇祈道場之鈞札」を賜ったとある。



『発句絵巻』 昌純画

以来、「公武帰崇」する所となり、鎌倉將軍久明親王と執権北条貞時より「律院卅余所之一」に指定されるなど由緒正しい名刹として名を馳せたとのこと。

漢詩九首、和歌五首、発句一〇句が撰集される。

八一 大乘院鐘

向曙高樓日初旦

こうしやこうろう ひはじ
向曙高樓に日初めて旦

緇衣井々寺前鐘

しえいせいぜん かね
緇衣井々寺前の鐘

乍從霞外紅音發

たちま かがい こうおんはつ
乍ち霞外より紅音発し

吹下男山第一峯

ふ お おこやまだい ひとつほう
吹き下ろす男山第一峯

石山 羽林中郎將基董

《作者》 石山基董。寛文九年（一六六九）〜享保十九年（一七三四）、六六歳。公卿。石山家の祖。羽林中郎將は近衛の少中將。元禄四年に左中將、基董に改名もしている。従二位、権中納言に叙せられた。

《押韻》 鐘・峯（上平声二「冬」韻）

《語釈》 ○旦Ⅱあける。夜が明ける。

○緇衣Ⅱ僧の墨染めの衣。

○井井Ⅱ潔く静かなさま。

○紅音Ⅱ朝やけに響く鐘

の音を表した語。用例を見ない。

○霞外Ⅱ朝やけの向こう。「霞」は漢語では、朝焼け・夕焼けの意。

《訳》 夜明け方寺の高い建物に日は明るみはじめ、墨染めの衣を着た僧が清く静かに寺の鐘の前に立った。たちまち朝やけの向こうより鐘の音が聞こえ、風に吹き下ろされるように男山第一峯へと音が響いてゆく。

八一 同

大光明藏祖桂

緇廬近看出林端

緇廬近く見る林端を出づるを

樓上華鯨吼夜闌

樓上の華鯨夜闌に吼ゆ

正知大乘真教體

正に知る大乘真教の體

夢回曉月照前巒

夢は回り曉月前巒を照らす

《校異》 結句「曉」は、底本「晚」とするが昭和本によつて改めた。

《押韻》 端・蘭・巒（上平声一四「寒」韻）

《語釈》 ○緇廬＝寺院。 ○華鯨＝華は美称、鯨はつり鐘、またその音。釣鐘。 ○夜蘭＝夜が更けきつて明けようとする直前。 ○大乘＝大乘仏教。利他救済の立場から人間全体の救済を説く。ここでは大乘院をいう。 ○真教＝真実の教法。

《訳》 林の端から寺院が間近に見え、夜明け前樓上から吠えるような鐘の音が聞こえてきた。この鐘の音はまさに大乘の教

えを體現したものであると分かる、夢は覚めいつしか曉の月が前の峰を照らしていることだ。

《解説》 大乘院に響く夜明け前の後夜の鐘が、大乘仏教の真の教えを伝えるものであると詠む。結句は曉の月光が前の峰を

照らすという実景とともに、法の光（真如の月）が人の心を照らすことを響かせている。

八一 同

前臨川性湛

一構招提林色凝

一構の招提林色凝る

金鐘時動白雲層

金鐘時に動く白雲の層

洪音非超驚問夢

洪音超の問夢を驚かすに非ず

聞者直須悟大乘

聞く者直ちに須らく大乘を悟るべし

《作者》 月心性湛。天龍寺二一世。幕府の朝鮮書契御用（以酊庵輪番）を務める。

《押韻》 凝・層・乘（下平声一〇「蒸」韻）

《語釈》 ○構＝家屋を数える助数詞。 ○招提＝各地に遊行する僧、またその宿舍。ここでは大乘院をいう。 ○林色＝こ

こでは大乘院の周りの樹々の様子。 ○凝＝動きが止まり静まった様をいう。 ○金鐘＝黄金の鐘、鐘の美称。 ○洪音＝

大きな音。 ○超^{けう}衆鳥がむらがり飛ぶ。 ○間夢^{かんむ}閑夢に同じ。しばしの夢。

《訳》 動きが止まって静まった林のなかに建つ一字の寺院、鐘が重なる雲を背に時を告げて動く。群鳥の羽ばたきならぬ大きな鐘の音はしばしの眠りを覚ますのみならず、鐘の音を聞く者は直ちに大乘の教えを悟るにちがいない。

八―四 同

雄徳山邊古梵園

雄徳山^{ゆうとくさん}邊^{へん}古梵^{こほん}の園^{その}

華鯨殷々吼朝昏

華鯨^{かぎ}殷^{いん}々^{いん}朝昏^{ちうこん}に吼^は

大乘妙旨圓音裡

大乘^{だいじやう}の妙旨^{めいし}音を圓^{めく}らす裡^{うち}

覺破勞生槐國魂

覺破^{かくは}す勞生^{ろうせい}槐國^{かいこく}の魂^{たましい}

《作者》 南海宗琳。万治元年（一六五八）―正徳三年（一七一三）、五六歳。大徳寺二七九世。

《押韻》 園・昏・魂（上平声一三「元」韻）

《語釈》 ○古梵^{こほん}古寺。古刹。梵は梵刹の略。ここでは大乘院をいう。 ○華鯨^{かぎ}八―二語釈参照。 ○殷々^{いんいん}音が響きあ

ふれるさま。 ○妙旨^{めいし}すぐれた趣、味わい。 ○圓^{めく}めぐる。かこむ。 ○覺破^{かくは}人の迷いを破り悟ること。 ○勞生^{ろうせい}

苦勞の多い人生。 ○槐國^{かいこく}人生の榮華のはかないこと。槐国は、槐安国。蟻の国。唐の小説「南柯記」の「南柯の夢」の

故事をふまえる。唐の淳于棼が槐樹の下で昼寝をし、夢に槐安国に遊び、国王の娘と結婚し榮華を極めたという話。

《訳》 男山近くの古刹大乘院の庭から、鐘の音が殷々と朝夕に響く。大乘仏教の素晴らしい教えを伝えて鐘の音がめぐらし、
勞多くはかない人生の迷いを破り悟りへと導くことだ。

八―五 同

鯨音迴出白雲中

鯨音^{けいおん}迴^{はく}かに白雲^{はくうん}の中^{なか}を出^いで

隱映毘尼古梵宮

隱映^{いんえい}す毘尼^{びに}古梵^{こほん}宮^{みやう}

不待石牀華雨瑞

不待^{ふたい}石牀^{せきじやう}華雨^{かう}瑞^{ずい}を待^{まち}たずして

說摩訶衍徹長空

摩訶^{まか}衍^{えん}を説^ときて長空^{ちやうくう}に徹^{とお}る

師點首座

南海座元

〔押韻〕 中・宮・空（上平声一「東」韻）

〔語釈〕 ○鯨音げいおん 鈞鐘の音。 ○隱映いんえい 互いに美しく映えること。

○毘尼びに 毘奈耶びなや。戒律。

○石牀 石の寝台、石の

床。 ○華雨 花が雨のように降ること。神仏の加護のしるしとする。王維「乗如禪師と蕭居士と嵩丘蘭若に過る」詩に「雨花応に石床と共に平らかなるべし」。 ○瑞みづ 瑞兆。 ○摩訶衍まかえん 大乘仏教をいう。 ○長空 大空。

〔訳〕 白雲の中より鐘の音が響き出て、戒律を授ける古刹に美しく映える。その鐘の音は花の雨が平らかな石の床にふりそそぐという瑞祥を待たずして、大乘仏教の教えを説いて大空に響きわたる。

〔解説〕 転句には、『法華経』の「序品」の逸話がある。日月灯明仏が無量義など大乘の經典を説き、終えて結跏趺坐し無量義処三昧に入つて心身動じなかった。この時に天より曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼殊沙華・摩訶曼殊沙華が雨のように降つて、仏・大衆に散じ、普仏世界が六種に振動した。「華雨」は、我々を仏の道や悟りに導くものとしてのイメージを持つ語である。

八一六 同

別峯悦怡雲
べつほうえついうん

蒲牢高掛隣雲外
ほろうたか かり うんがい
こは おこやまけう や あか

吼破男山霜夜曉
おこやまけう や あか

多少道人眼處聞
たしょう どうじんがんしよ き

摩訶衍義悉明了
まかえん ぎ さいめいりやう

〔校異〕 結句「義」、底本は「義」とするが昭和本によつて改めた。

〔作者〕 悦怡雲。貞享五年没。（生年未詳一六八八）。黄檗宗の僧。隠元の直弟子鉄文道智の法を継いだ。

〔押韻〕 曉・了（仄上声一七「篠」韻）

〔語釈〕 ○蒲牢ほろう 鐘の異名。 ○多少 多いこと。 ○道人 仏門に入った人。僧。 ○眼處 要点。肝心なところ。

○摩訶衍まかえん 大乘仏教をいう。 ○明了 はつきりと理解する。

〔訳〕 大乘院の鐘は雲の端に接するように高く掛かり、男山の霜の降りた夜の明け方に吼えるように鳴り響く。多くの僧がその鐘の音に教えの眼目を聞き、大乘仏教の教義をことごとく悟ることであろう。

八一七 同

靈鴿鳴飛陰又晴

靈鴿鳴き飛びて陰り又晴る

大乘院裏報華鯨

大乘院裏華鯨報ず

人尋正道發淡省

人の正道を尋ね深省を發せんとするに

殷々風傳多少聲

殷々風は伝う多少の聲

《作者》 林信充。天和元年（一六八一）～宝曆八年（二七五八）、七八歳。江戸中期の朱子学派の儒学者。林家四代目。榴岡、復軒は号。信充は諱。七三郎は通称である。著書に『本朝世説』、『誌法蠡足』などがある。

《押韻》 晴・鯨・声（下平声八「庚」韻）

《語釈》

○靈鴿れいこ 石清水八幡宮の神の使いである鳩。

○華鯨かけい 八―二語釈参照。

○正道 仏の教え。特に法華經を言

う。○殷々 八―四語釈参照。○深省を發す 事（事に触れて）悟りを開く。杜甫「遊龍門奉先寺」詩に「覺めんと欲して晨鐘を聞く、人をして深省を發せしむ」。

《訳》 神の使いの鳩が鳴きながら飛び晴れたり曇ったりするなか、大乘院の鐘は時を告げて鳴る。人が仏道を求めて深い悟りの念を起こそうとすると、あたかもその機縁となるべき鐘の音を風が殷々と響かせて運んでくることである。

八一八 同

寺在杉山北麓邊

寺は杉山北麓の辺に在り

華鯨高響出雲煙

華鯨高く響き雲煙を出づ

匪唯調社中規則

唯だに社中の規則を調うるのみに匪ずして

驚破天長夜眠

驚破す人天長夜の眠

《作者》 廓翁鉤然。八幡神域にある神心寺一九世住職。神心寺中興の祖と称される。元禄五年（一六九二）に鐘樓を、同一〇

年頃に山門を建てるなど、修行の伽藍を次々に整え、洛南有数の禅苑たらしめた。（表紙・裏表紙参照）

《押韻》 邊・煙・眠（下平声一「先」韻）

《語釈》 ○杉山 神心寺。曹洞宗の寺院。山号は糸杉山。石清水八幡宮のある男山の北側山腹に位置する。○雲煙 雲、

復軒林信充 林七三郎

霞。○匪^に非に同じ。○驚破^{にんてん}^{にんてん} 驚かす。○人天^{にんてん} 人間と天上界のすべての生き物。衆生。○長夜眠^{にんてん} 人間が煩惱に

より悟りを開けず苦しみから抜けられないこと。

〔訳〕 大乘院は男山の北麓にある糸杉山神応寺の近くに位置し、鐘の音が雲や霞のなから高く響いてくる。その音はただに時を告げ境内の秩序を整えるばかりでなく、衆生の長い間の煩惱による迷いを破るものである。

八一九 同

蘭樂^{らんしやう}

遠望翠微暮靄輕

遠く翠微を望めば暮靄輕し

西風拂々入崢嶸

西風拂々として崢嶸に入る

只聞大乘鐘聲夜

只だ聞く大乘鐘聲の夜

已絶塵縁凡氣清

已に塵縁を絶ちて凡氣清し

〔押韻〕 輕・嶸・清（下平声八「庚」韻）

〔語釈〕 ○翠微^{すいび} 山のみどり。○西風^{せいふう} 西から吹いてくる風。西は仏土の方角を思わせる。○崢嶸^{そうこう} 高く険しいさま、

奥深いさま。○塵縁^{じんえん} 世俗的な煩わしい関係。

〔訳〕 遠くに山のみどりを眺めれば夕もやが輕やかにただよい、西風がなでるように高い山に吹いてくる。大乘院の鐘の音が聞こえるばかりの夜、すでに俗世の縁を絶つてわが凡俗の氣も清らかになることだ。

八二〇 同

武者小路 羽林實陰^{うりんざねかげ}

寺の名も高き御法の鐘の音にたれ長き夜の夢覺すらん

〔作者〕 武者小路實陰。寛文元（一六六一）年生、元文三（一七三八）年没、七八歳。西郊實信の子であるが、武者小路公種の養子となる。昭和本によれば、中将。羽林家は、武官の家柄で、近衛の少将・中将を経て大納言に進むことができるが、實陰は従一位准大臣に叙せられている。靈元上皇より古今伝授を受け、中御門・桜町兩天皇の歌道師範を奉仕した。著書は『初学考鑑』『芳雲集』など。

〔語釈〕 ○高し 大乘院の名も、御法も徳高く、鐘の音も高く響くという意味を掛ける。「をく霜の花をいつくし名も高し

ふりぬる寺の鐘の響きに 前大納言四辻入道善成」(南都八景)。○長き夜の夢〓長き夜は、凡夫が煩惱のために悟りに至らず、迷いから逃れ難いこと。無明長夜。そのような無明煩惱に覆われて、それと気付かないでいる人の世のはかなさを夢にたとえる。「ながきよの夢の春こそ悲しけれゆめをゆめとも思はれぬ身は 清原元輔」(元輔集)。「昨日見し人はいかにと驚けどなほ長き夜の夢にぞありける 慈円」(新古今・哀傷・八三三) ○覚ます〓悟らせる。気付かせる。

〔訳〕 寺の名も御法も徳高く、響く鐘の音に、誰が、逃れ難い迷いに覆われた人の世のはかなさを気付かせているだろうか。それは大乘院の鐘の音であるよ。

〔解説〕 寺院の鐘は、時刻を知らせるためばかりではなく、人の苦悩を消すものでもある。大乘院の鐘の音もまたそうである、その徳を称える。鐘の音によって苦悩が除かれるという例に『往生要集』の「諸行は無常なり。これ生滅の法なり。生滅滅しをはりて。寂滅なるを樂となす」祇園寺の無常堂の四の隅に、頗梨の鐘あり。鐘の音のなかにまたこの偈を説く。病僧音を聞きて、苦悩すなほち除こりて、清涼の樂を得ること、三禪に入り浄土に生れなんとするがごとし。」がある。

八一 同

僧唯称

撞はてぬ心ながらも聞けは世をさすか驚く入相の鐘

〔校異〕 底本は三句目を「今朝は世を」とするが、昭和本によって校訂した。

〔語釈〕 ○撞〓鐘を「撞」くと「尽」き果てるを掛ける。 ○さすが〓当然のことを改めて感嘆する様子。さすがに。やはり。和歌の用例が少なく、口語的な表現。 ○驚く〓気付く。 ○入相の鐘〓晩鐘。日没のころ、寺の勤行の合図に撞く鐘。とりわけ入相の鐘の音には無常が感じられる。「祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり」(平家物語)。また、和歌でも鐘の音に悲哀の情を感じている。「山寺の入相の鐘の声ごとに今日も暮れぬと聞くぞ悲しき よみ人知らず」(拾遺集・哀傷・一三二九)

〔訳〕 人には何かと尽き果てぬ苦悩があるものの、撞き果てぬ大乘院の入相の鐘の音を聞けば、やはりこの世は無常だとしみじみと気付くのである。

八―一二 同

三貞

露時雨ふりぬる寺の庭の面に月をやさそふ入相のかね

〔語釈〕 ○露時雨Ⅱ露と時雨。さつと降った時雨で露が置いている様子。 ○ふるⅡ露時雨が「降」ると、寺が「古」るの

掛詞。雨の縁語。「をく霜の花をいつくし名も高しふりぬる寺の鐘の響きに 前大納言四辻入道善成」(南都八景)。

〔訳〕 時雨がさつと降って露が置いた古寺の庭に、まるで月の出を誘うかのように大乘院の入相の鐘が鳴ることだ。

八―一三 同

宗仙 母 九十二歳

百年に宵暁と聞馴し御法の鐘を猶や頼まん

〔作者〕 柏村宗仙(一―二七参照)の母は、小那辺。慶長一八年一月生、宝永二年五月一二日没、九二歳。小那辺は、森本家を継いだ柏村信久の娘。宗仙は直條(「はじめに」参照)の父。その母なので、直條の祖母にあたる。

〔語釈〕 ○百年Ⅱ多くの年月。「ももとせと祝ふを我はききながら思ふがためはあかずぞ有ける 紀貫之」(貫之集・六八九)。

〔訳〕 百年もの長きにわたって、宵や暁ごとに聞き慣れた鐘の音であるが、信心により得られた長寿であると、更に深く仏法の鐘の音を頼りとすることだ。

〔解説〕 九二歳の長寿と添えることで、『八幡八景』の撰者である直條が、祖母の長寿を寿ぎ、併せてその長寿が仏の道に深く帰依したことによるとした。

八―一四 同

直條

故寺に住人や猶いかに聞たし明くれの鐘の響を

〔作者〕 柏村直條。「はじめに」参照。

〔語釈〕 ○故寺Ⅱ古くからある由緒ある寺。古刹。大乘院をいう。 ○聞きたしⅡ聞きたい。「いかに」と呼応して「聞きたき」となるところであるが、ここで句切れとなっている。 ○明け暮れの鐘Ⅱ暁につく鐘と夕暮れにつく鐘。明けの鐘と入相の鐘。

〈訳〉 古刹に住む人はもちろん、誰もが聞きたい。大乘院に響く明け暮れの鐘の音を。
〈解説〉 大乘院の鐘の音は、誰でも、いつでも人々の苦悩を和らげ、導くのだというのである。

八一五 同

其阿上人 〈無季〉

霧霞西にあらしや鐘の聲

〈作者〉 其阿上人。生没年未詳。連歌作者。其阿は時宗僧の法名で、相模国「藤沢遊行」（昭和本）寺の僧。元禄一四（一七〇二）年四月一二日紹巴百回忌追善千句「三吟之千句」の紹山の奥書きに「其阿 藤沢山之末流武州浅草神田山日輪寺上人諱吞可予叔夫也」とする。なお、幕府主催の柳営連歌会は、浅草の時宗日輪寺において事前の準備が行われ、住職が出座した。三吟は紹山（四一・一六参照）・其阿・昌坪（三一・一二参照）。

〈語釈〉 ○霧霞Ⅱ文芸上は、霧を秋、霞を春の季語とするが、ここでは覆い遮るものの総称と捉え、無季とする。 ○西Ⅱ鐘のあしらいで西方浄土をひびかせている。

〈訳〉 霧や霞に覆われたり、嵐に吹かれたりしても、常に変わらず法を伝える大乘院の鐘の音が響き渡ることだ。

〈解説〉 霧や霞に煙る大乘院に響く鐘の音を、「瀟湘八景」の「煙寺晚鐘」をふまえて、鐘の音を西方浄土から聞こえるものとした。「初瀬山ひばらがあらしかねのこゑ夜ぶかき月にすましてぞ聞く 藤原為子」（玉葉集・秋・六四四）。「ならびたつ松のおもてはしづかにて嵐のおくにかねひびくなり 伏見院」（風雅集・雑・一六六二）。

八一六 霜に聞や三十三天の鐘の聲

宣阿 〈霜・冬〉

〈作者〉 香川宣阿。「極楽寺桜」の和歌（二一・二二）参照。

〈語釈〉 ○三十三天Ⅱ忉利天。さんじゅうさんてん。「三十三天」と漢訳される。六欲天の第二、インドの世界観にあらわれる須弥山の頂上にある天界で、帝釈天すなわちインドラが住んでいる。ここは、楼閣、苑林、香樹などを備えた楽園とされ、快樂を受容する。四方に峰があり、峰ごとに八天あるので三十二天、それに中央の帝釈天を加えて三十三天となる。

〈訳〉 霜の降りた時、三十三天の鐘の音を聞けば、様々な欲望・煩惱が去来してもやがては悟りの境地に至るということだ。

八二七 寺の鐘聲聞盡す霜夜哉

守之（霜夜・冬）

〔語釈〕 ○聞盡す＝聞き尽くす。余すところなく聞く。「聞きつくす入相の鐘のこゑのうちに夕の色ぞ深くなりゆく 藤原為兼」（夫木抄・雑・八〇四一）。「盡す」に「月」夜、鐘を「撞く」を掛ける。

〔訳〕 月の霜夜に撞く大乘院の鐘の音を聞き尽くし、ついには迷妄を尽くすことだ。

〔解説〕 謡曲「三井寺」の鐘の音に因む一句である。「影はさながら霜夜にて。影はさながら霜夜にて。月にや鐘は冴えぬらん（中略）先初夜の鐘を撞く時は。諸行無常と響くなり。後夜の鐘を撞く時は。是生滅法と響くなり。晨朝の響きは生滅々已。入相は寂滅為楽と響きて。菩提の道の鐘の声。月も数添ひて。百八煩惱の眠りの驚く夢の夜の迷ひもはや尽きたりや後夜の鐘に。我も五障の雲晴れて。真如の月の影を眺めおりて明かさん」。そして、「夫れ長樂の鐘の声は。色の外に尽きぬ（略）」は『和漢朗詠集』、「待つ宵に。更けゆく鐘の声聞けば。あかぬ別の鳥は。物かはと詠ぜしも（略）」は『新古今和歌集』の小侍従などを踏まえる。また、「楓橋夜泊」などの漢詩を踏まえた詞章が尽くされる。なお、小侍従は、石清水八幡宮第二五代別当光清の娘で、応保元（一一六一）年ごろ二条天皇に出仕した。

八二八 鐘も今雲をうかつや胸の月

直樹（胸の月・秋）

〔作者〕 森元直樹。「雄徳山松」和歌一二四参照。

〔語釈〕 ○穿つ＝穴をあける。突きぬく。（比喩的に）貫くように進む。○胸の月＝悟りを開いた心を澄む月にたとえて

いう。胸中が曇らないで清いさま。心の月。「むねの月心の水もよなよなのしづかなるにぞ澄みはじめける 土御門院」（続古今集・釈教・七六一）。「くまにもあらぬ人ぞかしこき」といふ句に／我とみるむねの月のわさやかにて 宗砌（新撰菟玖波集・釈教・三五六〇）

〔訳〕 大乘院の鐘の音も（私も）、今、煩惱という雲をつきぬけて、悟りを開いた心のように澄んでいることだ。

〔解説〕 和歌に、「雲をうがつ」という表現は知らない。寺の鐘の音が雲をはらい、皓々と光る月を照らし出したとする和歌的な情緒を発句として表現したといえる。

八一九 かねにしる霜の盛や法の花

遠貞 〈霜・冬〉

〔語釈〕 ○霜 年月星霜。 ○法の花 法の蓮の華。 仏に供える花。 ここでは、仏道の精華。

〔訳〕 鐘の音を聞けば、星霜のごときはるかな年月にあつてなお盛んな仏道の精華を見る心地のことである。

〔解説〕 「霜の盛」は、遙かな年月にあつて、衰えることのない仏道の精華となる。「はるかにも匂ひけるかな法の花後の五百年猶さかりなり 藤原俊成」(続後拾遺集・釈教・一二七九)。

八二〇 寺を出し鐘やとまりて今朝の霜

庸雄 〈霜・冬〉

〔校異〕 底本は初句「出づ」で切れているが、昭和本の句形に従う。

〔語釈〕 ○出し 出た。離れた。 ○とまる 立ち止まる。収まる。止む。霜は空中の水蒸気が地表に接触して生じるところから、立ち止まると言い立てた。

〔訳〕 寺を出た鐘の音が止まり、今朝の霜となったよ。

〔解説〕 延宝四年(一六七六)に刊行された『俳諧類船集』では、「霜」の付合語に「鐘の音」があり、「鐘」の付合語に「霜夜」が記されている。このように、鐘と霜は切っても切れない関係にある。その常識を覆し、夜ならぬ朝に、鐘の音が止まって地表に立ち止まる霜となった。いかにも突飛な発想の俳諧である。「生鳥に皆塩するや今朝の霜 貞徳」(犬子集)。「片色のきぬか紅葉にけさの霜 時定」(続山井)

八二二 霜を置落葉やひびく鐘の声

由順 〈落葉、霜・冬〉

〔語釈〕 ○ひびく 響く。余韻を生じる。「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり」(平家・一)。「夜深き朝の鐘の音かすかに響く」(源氏・総角)。

〔訳〕 霜を置いている落葉である。そこに大乘院の鐘の音がかすかに響くことだ。

〔解説〕 「冬くれば霜の鐘きく初瀬山もろき木の葉にひびくとはなし 三条西実隆」(雪玉集・冬・一五三五)、「はつ霜やおきはじむらん暁の鐘の音こそほのきこゆなれ 藤原公能」(千載集・冬・三九七)など霜に和して鐘が鳴るということは、中国の地理書『山海経』の「豊嶺に九鐘有り、秋霜降れば即ち鐘鳴る」による。謡曲「高砂」では「高砂の。尾上の鐘の音

す也。曉かけて。霜は置けども松が枝の。葉色は同じ深緑。立寄る陰の朝夕に。搔けども落葉の尽きせぬ（略）、発句でも「つかぬ鐘ひゞくほどふるしもく哉 貞徳」（犬子集）（「しもく」は霜来と撞木を掛ける）などがある。

八一二 悟る世や露とことふるかねの聲

文庫（露・秋）

《作者》 生没年未詳。別号、了徳庵（昭和本）。

《語釈》 ○悟る＝ものの迷いを去って真理を得ること。○露＝はかないもの、わずかなことの比喻。○ことふる＝事柄が古めかしくなる。いい古される。ここでは、露の降るの掛詞としても用いられる。

《訳》 儚さの象徴である露が降りて、古くより鳴り響く大乗院の鐘の声を聞けば、世の無常を知るばかりである。

《解説》 鐘の音に世の無常を知るという一句である。『平家物語』の冒頭部分や、「夕暮はものぞかなしき鐘のおとをあすもさくべき身とし知らねば 和泉式部」（詞花集・雑・三五七）などの歌にみられる無常観である。

八一三 鐘の音に古しへを聞霜夜哉

直條（霜夜・冬）

《作者》 柏村直條。「はじめに」参照。

《語釈》 ○古しへ＝いにしえ。「往にし方」の意。過ぎ去った時。また、亡き人。「淡海の海夕浪千鳥汝が鳴けば情もしのにいにしへ思ほゆ」（万葉集・三・二六六）。「いさや、いにしへの御許しもなかりし事をかくまで漏らし聞ゆる（略）」（源氏・宿木）。

《訳》 鐘の音に世の移ろいや故人が思い出され、歲月の無常を知る霜夜であることだ。

《解説》 「霜夜」は、霜が降りる寒い夜の意であるが、星霜のことば通り、長い歲月を連想する言葉でもある。そんな夜にひびく鐘の音は、はるかな歲月を思い、今は亡き人が偲ばれるというものである。

八二四 同

宗得（すずし・夏）

鐘の聲にしよりすずしふもと寺

《校異》 底本は中七が「す、し西より」とあるが、『発句絵巻』（大乗院鐘解題参照）に従った。

《作者》 柏村氏。名は、直重。息に直能（宗仙）、孫に直篠。「安居橋月」に和歌（五―一二参照）が出る。

《語釈》 ○にし〓西方浄土。 ○すずし〓夏の季語。涼しいこと。また、心がさわやかであること。心中にわだかまるところがなく快いこと。 ○ふもと寺〓男山のふもとにある寺。ここでは、大乘院。

《訳》 大乘院の鐘の音は涼しく、心がさわやかになる。まるで、西方浄土より響いて来るように思われる。それもその筈、大乘院は八幡大菩薩が鎮座する男山のふもとにある寺なのだから。

《解説》 大乘院が、八幡大菩薩（阿弥陀如来）が鎮座する男山のふもとにあることから、西方浄土にあるがごとき心地がすると述べ、八幡大菩薩の御利益に叶い、その鐘の音は一層すがすがしく、心の迷いはらってくれることだと詠ったものである。

おわりに

「八景」は、絵に描かれ、漢詩や和歌に詠まれている。さらには、「八景」の絵に漢詩や和歌の賛を施すものもある。それらの中で『八幡八景』は、日本における「八景」の成立では初期の位置付けであるが、漢詩、和歌に加えて連歌の発句を詠んだものとしても、管見の限りでは最初の位置付けとされよう。発句は、連歌師の里村昌純を中心に入集するが、靈元上皇の漢和（和漢）連句会などの文芸サロンとの関係もさることながら、柏村直條の妹真が昌純に嫁していることが注目される。このような事情から、多くが連歌の発句であるが、貞門俳諧や談林俳諧に馴染む連中の入集もあり、それらの俳諧を含むと考えている。詳細な考察は課題として残った。さらには、底本とした正徳本と昭和本にはかなりの相違があり、書誌の調査や成立の考証などはあまり触られていないので、併せて今後の課題としたい。

また、連歌師などの絵と発句を記した『八幡八景連歌発句絵巻』も他に例を見ない貴重な一巻である。本冊ではその八景を各章の解題に掲出し、参考に供したことを成果の一つとする。なお、この資料は、山城郷土資料館の伊藤太氏が、先に展示図録『南山城の俳諧―芭蕉・蕪村・櫛良―』（二〇〇七）にまとめられているが、ともに閲覧が難しい状況にある。伊藤氏は、その他の石清水八幡宮所蔵の八幡八景に関する資料も調査、紹介をしておられるが、本冊はこれらの資料の成果を活用させて頂いた。さらには、丁寧な助言を賜った。ここに記し学恩に謝するものである。

『八幡八景』を読む会は、ここ数年、竹内千代子、小西亘、土井三郎の三名で続けてきたが、もともとは、柏村直樹氏からの声掛けで始まった。直條の後裔である直樹氏は、自宅に蔵する八幡八景の掛軸などをもとに、その美術史的な意義や価値について調査するなかで、八幡の地域史研究の団体を知り、直條の来歴や業績などを発表する機会をもち、その中で、発句に関心を持っていた土井に声掛けをし、漢詩については山城郷土資料館などを通じて小西を知り、当初はこの三人で二年間ほど研究をすすめてきた。だが、直樹氏は、自身の体調のこともあり退いた。時を経て、京都府連句協会の縁から竹内が加わり今日に至る。いずれにせよ、直樹氏の発案によって『八幡八景』の解読や翻刻などの研究が進んだことは言うまでもない。そのことを記し、併せて謝意を表したい。

『八幡八景』作者名索引

凡 例

- 一 本稿は作者名のうち、名のみ索引である。
- 表記は概ね原文による。
- 一 所在は、本文の作品中私に付した番号である。
- 一 配列は、まず、漢字の音読みによって五十音順とし、次に、漢字ごとにまとめる。漢音を優先とするが、慣用によるものもある。
- 一 訓読みの名については、音読みに捨て見出を付す。

「名」		「作品番号」	
あ			
韶光	三一	覚慧	七一
安栖	五二五	觀山	五一八
安重	三一三	還了	六一
違順	四一七	環溪	五九
伊貞	一二六	晦巖	四六
隱溪	七五	寬藤	六一〇
院卓	三二一	久友	五二四
院卓母	七一三	基	↓も
惟中	三一六	義真	七一八
惟庸	七九	義次	↓よ
惟參	六二	義德	四一二
寅亮	二七	宛伽	一九
一永	二二	玉田	四八
英儀	四二一	圭杜多	三九
悦怡雲	八六	月潭	一六
遠貞	八一	乾舟	四四
か		兼重	五一三
		顯昌	二二
		見野	四一一
		玄心	六一五
		玄中	六三
		玄祐	一一五
		元通	五七

山彦	二一四・
實陰	七七八
實業	八一〇
實種	四一〇
實長	二二一
資熙	二二九
師點	↓す 八一五
持實	↓も 六二六
時春	六二六
重條	六一九
集仗	一一二
周旋	五一七
周天	四一五
秀信	二一九
守經	五二二
守之	八一七
純安	七二七
順的	六一九
兼光	五二三
嘯月	一一一
悚山	四一九
紹尹	一一四

紹兆	二一二
紹珉	三一二
紹山	四一六
湘南	六四四
韶光	↓あ 五二二
正胤	五二二
正隱	一一二五・
正從	六一二
正俊	五二〇
照圭	一一二〇
尚誠	五一五・
昌格	六一二
昌海	一一七
昌億	三一七
昌札	六一七
昌純	二二一
昌築	四一五
昌築母	四一三
昌坪	三一三
昌陸	一一三
性湛	八一三

心嶽	三四四
真敬	四一一
信	↓の 三一〇
資熙	三一〇
盛澄	二一八
雪應	三三六
宣阿	二二三・
宣安	八一六
是精	六一二
善阿	七一七
善譽	七一七
悰涇	四一七
宗吟	四一八
宗春	二一五
宗兼	七二〇
宗賢	四二〇
宗真	二二三
宗仙	一二七・
宗仙母	七一五
宗得(直重も見よ)	八一三
	八一四

宗誠	四一九
宗作	六一二〇
祖縁	五二二
祖桂	八二二
則平	一一二二
即中	七六
素幽	六一八
端堂	一一四
大柱	六一八
中収	七三
直	↓な 五一八
長澄	三一三
長治	三一三
重則	二一六
重條	↓し
通躬	↓み
貞幹	↓さ
鐵牛	二六
鐵帚	一一五
等院	三一三
桃原	六七

た

参考文献

- 一 石清水八幡宮社務所編『石清水八幡宮史料叢書』一「男山考古録」(昭和二八(一九五三)年二月完結)
- 一 石清水八幡宮社務所編『石清水八幡宮史料叢書』1～5(昭和五一(一九七六)年完結)、同続編(1)～(3)(平成八(一九九六)年一〇月完結)
- 一 柏村真金編『柏亭家譜』西尾市岩瀬文庫蔵、請求番号100-29。
- 一 京都府立山城郷土資料館編図録「南山城の俳諧―芭蕉・蕪村・樗良―」(平成一九(二〇〇七)年)
- 一 京都府立大学文学部歴史学科編『八幡地域の古文書と石清水八幡宮の絵図―地域文化遺産の情報化―』(京都府立大学文化遺産叢書第3集、平成二二(二〇一〇)年)
- 一 『八幡山名所案内記』(慶応二年冬、長濱尚次序)、「石清水八幡宮境内図」(文化一一(一八一四)年一二月記)収録。
- 一 『南都八景詩歌』(青山歴史村蔵・国文学研究資料館画像データ)
- 一 『南都八景和歌』(国文学研究資料館蔵・国文学研究資料館画像データ)
- 一 福井久蔵著『連歌の史的研究』(昭和四四(一九六九)年初版、有精堂)
- 一 堀川貴司著『瀟湘八景―詩歌と絵画に見る日本文化の様相』(平成一四(二〇〇二)年初版、臨川書店)

図版一覧

- 一 『八幡八景連歌発句絵巻』石清水八幡宮所蔵。
京都府立山城郷土資料館編図録「南山城の俳諧―芭蕉・蕪村・樗良―」より転載。
- 一 『都名所図会』京都府立図書館歴史彩館所蔵。
表紙、裏表紙「城州 八幡山案内絵図」原本所在不明。小山嘉巳氏彩色。なお、本稿に関連したものについて、私に名称を付した。

著者紹介

竹内千代子

京都府立朱雀、鳥羽高等学校教諭を経て、英知大学准教授、現在は立命館大学非常勤講師、京都俳文学研究会事務局。近世後期京都の芭蕉・顕彰俳諧を研究テーマとし、落柿舎再興と井上重厚、芭蕉堂歴世と花供養会、京都俳諧書肆菊舎太兵衛と甫尺、丹後の芭蕉句碑、淀藩士畑吟風の俳諧、城南寺田堀家の「秦^{はたをぐさ}夫草」などの調査を続ける。著書に『「炭俵」連句古註集』（和泉書院）。

小西

亘

一九八二年より京都府立高校に勤務。現在京都府立南陽高校国語科教諭。京都府南部の宇治、南山城、奈良市月ヶ瀬の文学作品の蒐集と調査をライフワークとする。著書に『青谷梅林文学散歩』（城陽市観光協会）・『月瀬記勝』梅溪遊記』（梅の里月ヶ瀬へ）編集員会）・『宇治の文学碑を歩く』（濤標）・『詩歌とめぐる南山城・月ヶ瀬』（濤標）など。

土井 三郎

大阪市立小学校教諭を経て、八幡市を中心にした郷土史の研究に勤しむ。主な著書（編集・共著）として『大阪城とまち物語』（フォーラム・A）、『歴史たんけん八幡』（八幡の歴史を探究する会）、単著として『八幡の歴史に光を』（ホルス出版）がある。山城郷土資料館友の会会員として近世における俳諧史を学ぶ傍ら、俳句や連句の実作に参加し今日に至る。

付 記

一 本冊をなすにあたっては次の学恩を賜った。記して謝意を表すものである。敬称略。

柏村 直樹

伊藤 太

小山 嘉己

石清水八幡宮

京都府立図書館歴史館

東京都立中央図書館加賀文庫

一 科学研究費助成事業・基盤研究（C）「近世後期京都の芭蕉顕彰俳諧の研究」（課題番号 20K00353）の成果の一部である。

一 立命館大学アート・リサーチセンター 文部科学省 国際共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ 国際共同研究拠点」 共同研究課題「花供養と芭蕉顕彰俳諧の研究」（代表：竹内千代子）の一部である。なお、成果の一部は WEB 公開中である。

<https://www.arcritsume.ac.jp/archive01/theater/html/hanakuyo/index.html>

石清水八幡宮『八幡八景』を読む

発行日 令和五年三月三日

著者 竹内千代子

小西 亘

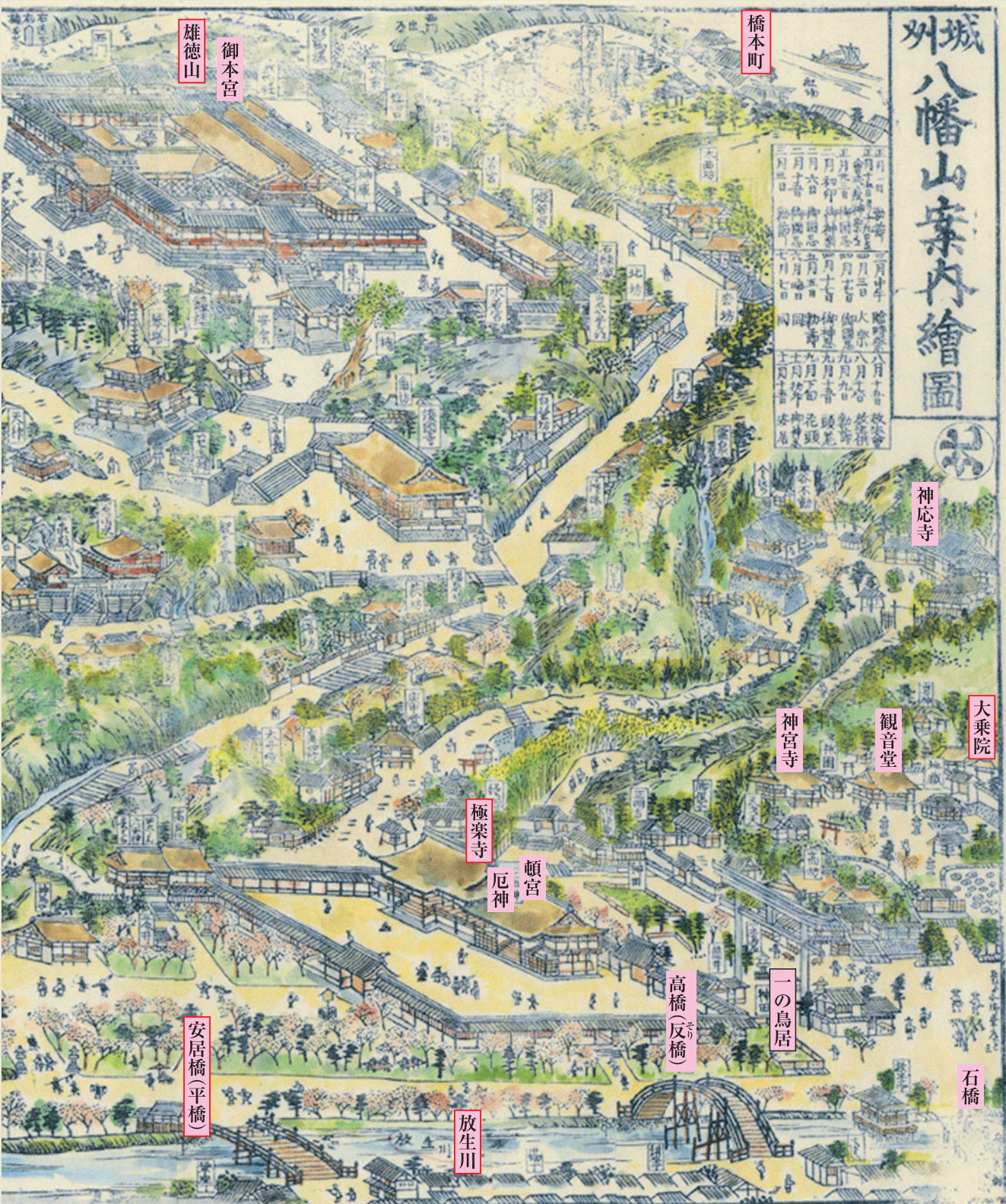
土井 三郎

印刷 株式会社 昭英社

〒六〇一八二九

京都市下京区五条通河原町西入本塩竈町五五八

電話 〇七五―三五一一八一一



城州 八幡山案内繪図